

平成26年度版

平成24年度採択 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」

成果報告書

学校法人藤ノ花学園
豊橋創造大学

目次

巻頭言	1
はじめに	2
1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』概要説明	3
2. 文部科学省申請概略	9
3. 事業グループ活動報告	15
3. 1 4つの教育事業	17
(1) メンタルタフネス講座グループ	19
(2) 自己理解促進プログラムグループ	23
(3) 地域企業連携プロジェクトグループ	27
(4) 3者間協働インターンシップグループ	32
3. 2 教育体制・産業界ニーズ把握体制の整備・連携推進	39
(1) 連携事業推進グループ	41
3. 3 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援	45
(1) ユビキタスキャンパスグループ	47
(2) 大学コミュニティグループ	55
4. 全体の総括	65
5. 補助資料	71
① プロジェクト活動成果報告書（学生）	73
② プロジェクト活動成果報告書（教員）	109
③ 社会人基礎力評価	125
④ 2015年度中部圏産業連携会議 ポスター発表資料	133
⑤ 大学教育改革フォーラム in 東海2015発表資料	137
⑥ プロジェクト活動 連携企業・団体一覧	141
⑦ 各種発行パンフレット	145
⑧ 行事実績一覧	149



巻頭言

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」
事業推進代表者

学長 伊藤 晴康

豊橋創造大学・豊橋創造大学短期大学部は、地域密着型の高等教育機関として、藤ノ花学園の伝統である実践的教育を受け継ぎ、地域に貢献できる職業人を育成している。

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」に参画している情報ビジネス学部キャリアデザイン学科、経営学部経営学科及び短期大学部キャリアプランニング科は、共に幅広い専門的職業人を育成することを目的として設置された学科である。各学科の教育目標は下記の通り学則に定められている。

情報ビジネス学部キャリアデザイン学科

生涯にわたっての高い就業能力をつけさせるため、健全な職業観と就業意識を育成し、経営学と情報学を基盤として時代の要請に沿った専門的職業教育を施すことを目標とする。

経営学部経営学科

生涯にわたっての高い就業能力を身につけさせるため、健全な職業観と就業意識を涵養し経営学と情報学の専門知識とスキルを持つ専門的職業人の育成を目標とする。

短期大学部キャリアプランニング科

短期大学部の教育理念に則り、社会人として求められる教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な職業観、就業意識を育成し、情報学を基盤として時代の要請に沿った職業的教育を施すことを目標とする。

上記の教育目標に沿い、学生の就業能力を高めるために、地域の産業界と連携した実践的な教育プログラムとして実施された教育活動をまとめたものが本誌である。就業力育成のための実践的な教育の取り組み事例として、多くの方々に情報を提供できれば幸いである。このような地道な教育の積み重ねにより、地域に人材育成の面で貢献する大学として、今後も努力を継続したい。

2015年3月



はじめに

「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」
事業推進責任者

豊橋創造大学経営学部長 佐藤 勝尚

本報告書は、平成 24 年文部科学省にて採択された『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の平成 26 年までの 3 年間の活動とその成果を取りまとめたものである。この事業は、三重大学を代表校とした中部圏 23 大学による「アクティブラーニングを通じた教育力」および「地域・産業界との連携力」を通して、教育改革力を強化する取組である。本学経営学部ならびに短期大学部キャリアプランニング科は、東海 A チームに属して幹事校と副幹事校からなる中部地域大学教育改革推進委員会の調整のもと、連携 FD を通して教育改革の実践過程で生まれる成功と失敗を共有しつつ教育力を高め、中部圏産学連携会議を通して、大学が育成しようとする資質と地域・産業界のニーズに関する対話を行うために『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』を展開するものである。このプロジェクトでは地域・産業界のニーズに対応した能力を育成するため、学生参加型授業、共同学習、課題解決学習や PBL などを教育現場に取り入れ、就業力に関わる学生の能動性を高める改革を進めるとともに社会現場での実践教育としてのインターンシップを高度化するものである。

本学では『大学生の就業力育成支援事業』として、これまで情報ビジネス学部・経営学部と同短期大学部キャリアプランニング科が共同で取り組んできた「持続型職業人 SOZO プロジェクト事業」を発展させ、『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』として次の 4 事業を柱とした事業展開を進め、学生の総合的な「就業力」の育成を図るものである。

豊橋創造大学

地域産業界連携教育力改革プロジェクトの概要

I. 4つの教育事業

- ① メンタルタフネス講座
- ② 自己理解促進プログラム
- ③ 地域企業連携プロジェクト
- ④ 三者間協働によるインターンシップ

II. 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

- ① 社会人基礎力育成体制の整備
- ② 他大学との連携事業による教育方法の改善

III. 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の後方支援

- ① ICT 環境整備による学生の ICT 能力育成と各事業内省環境の整備
- ② 大学コミュニティ形成による学生支援

本報告書をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

2015 年 3 月

『地域産業界連携教育力改革 プロジェクト』概要説明

1. 『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』の概要

1. 産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

本補助事業は、産業界ニーズに対応した人材育成を大学や短期大学などの高等教育機関で実施するための体制整備を進めるための補助事業として、平成24年度に文部科学省に創設された事業である（以下「産業界ニーズ補助事業と呼ぶ」）。中部圏では、「アクティブラーニングを通じた教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的とした事業を中部圏23大学の共同事業として申請して採択されている。中部圏23大学では、主に教育力を探求する「東海A（教育力）チーム」、産業界ニーズ把握方法を探求する「東海B（産業界ニーズ把握）」、「北陸地域チーム」、「静岡地域チーム」の4グループに分けて、教育方法や産業界ニーズ把握方法について考え方や方法論を取りまとめるとともに、それらを共有することによって、教育力向上を目指す事業になっている。豊橋創造大学並びに豊橋創造大学短期大学部は「東海A（教育力）チーム」に所属して、アクティブラーニングによる教育の実質化できる教育体制整備を目標に事業展開することになっている。

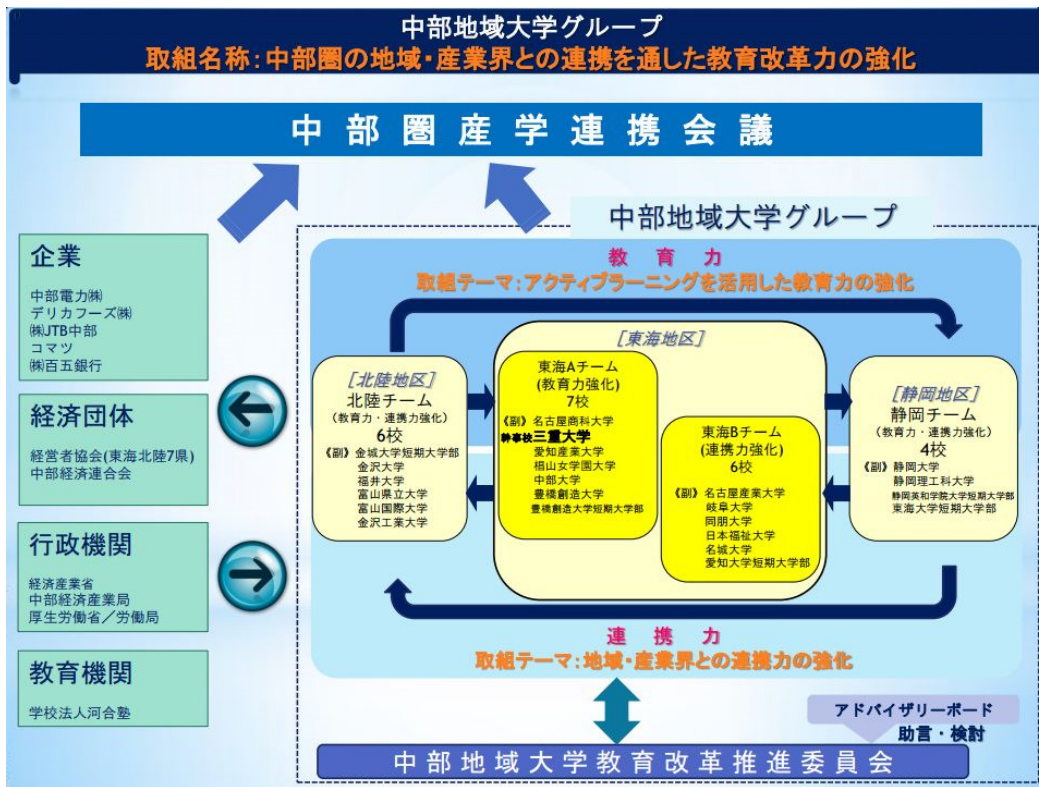


図 1.1 中部地域大学連携産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業

関連 WEB ページ <http://s-needs-chubu.pj.mie-u.ac.jp/>

2. 地域産業界連携教育力改革プロジェクト

豊橋創造大学では、「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備」（産業界ニーズ補助事業）への参加にあたって、育成すべき資質とその教育体制および産業界ニーズ把握方策について検討し、「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」（以下、CKP と呼ぶ）として、教育体制整備・産業界ニーズ把握体制の整備を推進することになった。

豊橋創造大学では、ディプロマポリシーで定める就業力育成を目指す。具体的には、社会人基礎力を養成できる教育システムの構築を行う。また、人材養成に関する産業界ニーズを把握する体制整備を行う。そのために

- (I) 4つの教育事業 (図 1.3 参照)
 - (1) メンタルタフネス講座
 - (2) 自己理解促進プログラム
 - (3) 地域企業連携プロジェクト
 - (4) 三者間協働によるインターンシップ

- (II) 教育体制整備・産業界ニーズ把握体制の整備
 - (1) 社会人基礎力育成体制の整備
 - ・教育効果測定・指導方法検討 WG
 - ・教育力向上研修会 (3回)
 - (2) 他大学との連携事業による教育方法の改善

- (III) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援
 - (1) ICT 環境整備による学生の ICT 能力育成と各事業内省環境の整備
 - (2) 大学コミュニティ形成による学生支援

の3つの機能を実行するグループを組織化した。これらの担当教員と事務職員で「地域産業連携教育力改革プロジェクト (CKP)」とその運営のための委員会を設置して、事業実施することになった。これらの機能全体を以下の図にまとめる。

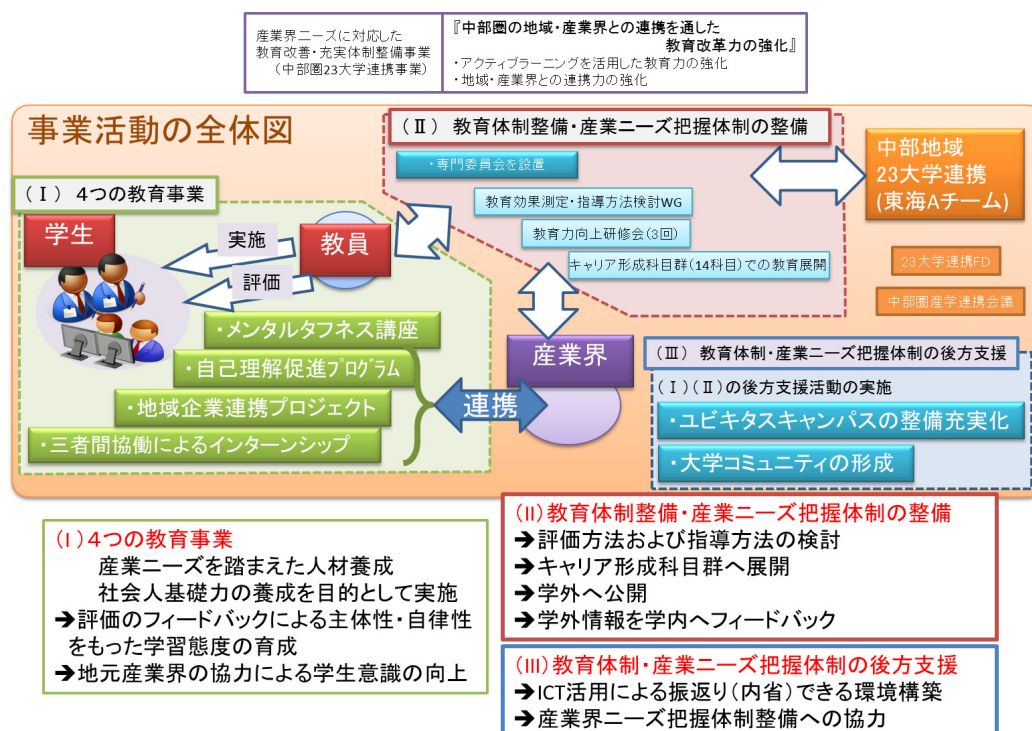


図 1.2 地域産業連携教育力改革プロジェクト (CKP) 全体機能図

3. 地域産業界連携教育力改革プロジェクトの実施体制

本学では「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備補助事業」を「地域産業連携教育力改革プロジェクト（CKP）」として実施する。「アクティブラーニングを通じた教育力形成」「地域・産業界との連携力形成」を目的として育成すべき資質の明確化とその教育体制整備および産業ニーズ把握方策のために、3つの機能を有したグループの役割を分離して組織化して事業展開を行う。

(I) 4つの教育事業

- ・メンタルタフネス講座
- ・自己理解促進プログラム
- ・地域企業連携プロジェクト
- ・3者間協働インターンシップ

(II) 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

- ・連携推進

(III) 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

- ・ユビキタスキャンパス
- ・大学コミュニティ

これらの事業詳細は、次節以降で説明する。

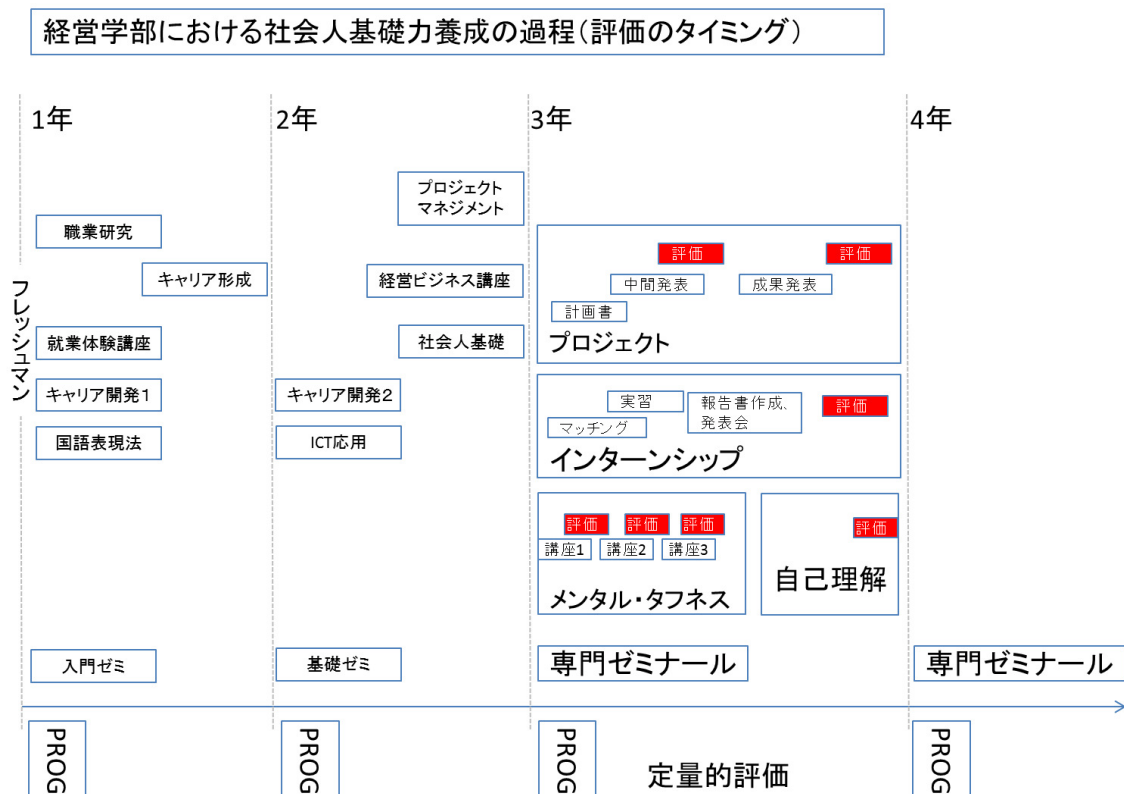


図 1.3 社会人基礎力養成のための教育プログラム

文部科学省申請概略



中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化 本学取組について

<p>本学取組名称</p>	<p>地域産業界連携教育力改革プロジェクト</p>
<p>選定年度</p>	<p>平成 24 年度</p>
<p>○学生の社会的・職業的自立のための取組のこれまでの実績について</p> <p>・これまでどのような方針・視点を持って取組を実施してきたか</p> <p>豊橋創造大学短期大学部キャリアプランニング科の教育目標は、「社会人として求められる基礎学力、教養やマナーを身につけさせると同時に、健全な勤労観、職業人意識を育成し、時代の要請に沿った専門的教育を施し、社会に貢献できる人材を養成すること」である。その教育目標を達成するためのカリキュラム構成であるが、受け入れる入学生が希望する将来の進路の多様化に対応するためにいくつかの専門ユニット群を用意する一方で、どの分野に進むにしろ社会人として要求される基礎力を培うためにコアユニットを設けている。全員必修のコアユニットでは、いわゆる社会人基礎力を養成するため、ビジネス文書を中心とした文書作成能力、計算・論理的思考力、情報リテラシー、経営の基礎、実務英語、マナーなどを修得する授業を、演習を取り入れながら実施している。教員は一方向的な授業にならないように工夫し、ことあるごとに学生が苦手とする発表を課し、学生の側も授業に積極的に参加し、社会から要請されているコミュニケーション力を伸ばせるような機会を提供している。本科の名称を冠する「キャリアプランニングⅠ／Ⅱ」および「ビジネス実務総論」の授業では、働く意味を考えさせ、健全な勤労観、プロ意識、責任感といった職業人意識を身につけさせ、将来の職業的自立を支援する取組の基盤としている。これまでのすべての取組は、学生を人間的に成長させ、成熟させ、自立した人生を送ってほしいという意図から実施しており、従来から、上記の正課の授業と連携して、就職率を向上させ早期離職者を減少させるための課外活動を実施してきた。現在、ほとんどの大学が実施しているインターンシップについては、「インターンシップ」という言葉が流行る以前から「企業実務実習・病院事務実習」として実施してきた。また、時には学外の社会人講師を招き、学生に実社会を紹介する講演会を実施してきた。例としては、前早稲田大学ラグビー部監督・中竹竜二氏による「挫折と挑戦」というテーマでの講演会、東愛知日産社長・青木公貞氏による具体的雇用環境についての講義などがあげられる。</p> <p>平成 21～22 年度・大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】では、「正課の授業と連携した総合的なキャリア教育支援」をテーマとして取組み、これまでの活動を学生が順序立てて学んでいけるような体系に整備した。具体的には6つの柱、「コミュニケーション力育成」「職業人意識の醸成」「自己理解」「ビジネスマナーの修得」「就職情報提供」「教員のFD研修」をキーワードとして諸活動を充実させ、学生の社会的・職業的自立を後押しする仕組みをつくりあげた。現在でも、それらを継続し、より発展・充実させて実施している。</p> <p>平成 18～20 年度・現代的教育ニーズ取組支援プログラムでは、「食をテーマとした地域活性化」という取組で、地域貢献を伴う実践的教育を行った。「食農教育」「食文化の伝達」「福祉サービス」「災害時炊き出しボランティア」という4つの分野で3年間にわたりいろいろな活動をした。「食文化の伝達」活動の中で、「地産地消」ということで地元の野菜を使った郷土料理を小学生に教える取組を行ったが、その取組は平成 24 年の現在でも、豊橋の公共施設「こども未来館ココニコ」での「大学生コックさんのクッキング教室」として継続実施しており、知識に基づいて実践するよい機会であり、本科で調理を専攻する学生の職業的自立にも貢献している。</p> <p>平成 22～23 年度・大学生の就業力育成支援事業では、「持続型職業人 SOZO プロジェクト」という取組で、「早期離職防止を目指したメンタルタフネスとスキルの育成」をテーマとして活動した。年2回「メンタルタフネス育成講座」を実施し、学生はメンタルタフネスの基礎</p>	

知識とモチベーション・コントロールの手法を学んだ。大学で学んだ知識を実践の場で活用する試みとして、ゼミの時間を活用して「プロジェクト活動」を実施した。2年間の試行錯誤期間を経て、これらの取組は、平成24年度も、より充実したものにするべく継続実施している。

上記3つの取組の具体的成果は、活動報告書として冊子にまとめてある。

・これまでの取組の成果を、どのようにカリキュラム・ポリシーに反映させてきたか

上記のような取組を踏まえ、平成22年度に3つのポリシー（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）を整備した。本科の教育目標に基づいてディプロマポリシーをまず書き、これまで受け入れている学生の現状を加味してアドミッションポリシーを作成した。その後、その2つの差分を埋めるにはどうしたらよいかという視点からカリキュラムポリシーを書き、3つのポリシーの整合性をとった。これらのポリシーは「教育方針」として大学のホームページで公開し、オープンキャンパスでも高校生に説明している。カリキュラムポリシー冒頭に掲げている本科の教育目標は、具体的に6つの項目（社会人基礎力、職業人意識、マナー、教養、知的能力、専門知識）に項目化し、それぞれの能力分野をどの科目群で対応するのか明示している。「キャリアプランニングⅠ・Ⅱ」の授業内容には柔軟性を持たせ、高校から短大への円滑な接続を目的とする初年次教育としても機能させている。知的基盤としての「教養」は、生涯教育の出発点としても重要だと考え、学生が自由に選択できる「基礎教養ユニット」として配置している。これまでの先入観で科目を選ばないように指導しており、未知の分野と出会える機会になることを期待している。専門的な知識と実務能力を体系的に学べるようにいくつかの「専門ユニット」を設置し、学生に選択させている。学生の履修状況に応じて、各「専門ユニット」内の科目を増減したり、受講生の集まらない「専門ユニット」は廃止したり他のユニットに統合したりしている。正課外で実施していた就職支援活動の一部は、より一層の成果をあげるため、必修の正課授業に取り込むようにしている。「特別研究セミナー」は、これまで学んできた知識を、具体的な課題にあてはめて考える力を身につけるために設置している。

個々の科目については、毎年、科目名称は同じでも内容や教え方を見直したり、学生の要望・時代の要請に応じて入れ替えを行っている。1つの具体例を挙げれば、平成24年度から「ライフ・コーディネート」という科目を増設している。この科目では「お金」の面からライフプランニングを学び、幸せな人生を送るための知識を提供している。現在の学生には、税金、健康保険、年金、貯蓄、ローン、相続といった実際的な知識が欠如しており、そのことが将来の自立に大きく影響すると考えるからである。

このように、カリキュラムは固定したものを単調に繰り返しているわけではなく、教員のFD活動の成果を反映させたり、いろいろな取組の反省にもとづいて見直しを続けている。

○本事業において実施を計画している内容について

・短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて

短大における人材育成の現状と産業界のニーズとのギャップについて議論する際、よく指摘される点のひとつに「学生の主体性の欠如」がある。これは、短大生が入社してから、与えられた仕事をするだけで満足してしまい、どうしても周囲からの指示を待つ状態になりがちであり、これまでの仕事のやり方の改善に取り組むとか、現状のやり方の問題点を自ら発見し、抜本的な解決方法を工夫するといった積極的な姿勢が欠けているという指摘である。厳しい経営環境の中、企業は社員の少数精鋭化を進め、社内で人材育成をする余裕を失い即戦力となる人材を求めているが、新入社員の中には上司から与えられた仕事しかやらない人材も見受けられるようである。心配りができ、よく気がついて物事を先取りして対応しておいたり、全体の仕事の流れを俯瞰して自分のやるべきことを率先してやる、といった姿勢が実社会から求められているのである。一方、学生の立場から見れば、決して学生の能力が欠如しているわけではなく、たまたまこれまでの人生経験において、自ら課題を見出し、

それを解決するような機会を与えられてこなかったせいだと言うこともできる。大学全入時代においては、高校教育と大学教育の円滑な接続のために、各大学の学生支援がますます手厚くなる反面、学生が自ら行動を起こし主体的に活動する機会や、先入観にとらわれず物事を解決していく経験が減少してしまっているのではないかと懸念される。そのため、本科においては、学生の主体性を引き出し、産業界のニーズに応えるために、産業界ニーズ事業：東海Aチームにおける取組みにおいて「アクティブラーニングを活用した教育力強化と検証」の具体的展開を他大学と連携を取りながら以下の4つの事業を計画し実行する。

※「持続型職業人SOZOプロジェクト」事業について

「就業力育成支援事業」である「持続型職業人SOZOプロジェクト」は、継続事業として平成24年度も実施していくが、今回、過去2年間の取組を発展・充実させ、「就業力」育成のより一層の充実を図るため、アクティブラーニングの手法を活用し、新たに事業展開する。

① 長期に亘る就職活動に耐え抜く「メンタルタフネス育成講座」の実施

今回は、年2回の「メンタルタフネス育成講座」を実施する。1回目は、「ストレス」の基礎理論、2回目は「セルフモチベーション」講座である。知識を伝達する座学に加え、課題演習の機会を多く設け、学生が主体的に学習する場とする。アクティブラーニングの手法のうち、5～6人のグループに分けて実施する「グループワーク」や、グループ内での「ディスカッション」を積極的に取り入れ、学生にやる気を出させる工夫をする。各グループでまとめられた意見は、全員の前で「プレゼンテーション」させる。ステップごとに、「振り返り」シートを書かせ、学んだ内容の確認をさせる。メンタルストレスをコントロールし、リラックスするためのノウハウは、これから一生活用できるものであることを理解させる。

② 度胸をつけ、臨機応変に対応できるための採用面接担当者の擬似体験（ロールプレイ）

就職試験では、最終的には面接試験での言動・振る舞いが採用かどうかを決めることになる。このプログラムは、学生に面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させるものである。特に、通常は経験することのない「面接担当者」の立場を体験させることによって、企業側の人事担当者がどのような視点から学生を評価しているのか、わからせることが主眼である。学生に企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させるのに役立つのである。具体的には、まず学生に志望企業に対する志望動機や入社後のそうありたい姿を事前に考えさせた上で、自分を積極的に売り込む模擬面接を実施する。面接担当者はキャリアセンターの職員や、社会人経験のある教員によって行い、実際の面接試験に近い形で実施する。学生は教職員からのフィードバックにより、志望業界、志望企業や志望職種に対する理解を深めることができる。次に、模擬面接が終了した学生は、今度は面接する側として面接担当者側に着席し、他の学生の面接の様子を観察したり、面接担当者の1人として質問したりする。学生は、この経験により、他学生の良い点や改善点を自分の場合に照らし合わせて学んでいくことになる。最後にグループごとに学んだ内容を「ディスカッション」させて、「グループワーク」の成果として、各グループに「プレゼンテーション」させた後、教員が総括し、学生に「振り返り」を促す。

③ 地域組織と連携したプロジェクト活動

地域組織・企業と関わりを持ちながら、企画・計画・実行するプロジェクトを立ち上げ、そのプロジェクトの運営を通して、学生自らが主体的に学ぶ「SOZOプロジェクト」を推進する。これまで学んできた知識が、実社会でどのように活用されているのか知る機会となる。学内だけの閉じた活動ではなく、学外へ出かけて行く何らかの「フィールドワーク」を含んだ活動である。実際のプロジェクトでは、いわゆるPDCAサイクルを回しながら物事を進め改善していく「プロジェクトマネジメント」の手法を経験する。プロジェクト全体を「タスク」に切り分け、段取りよく物事を進める手法を学ぶ。前もってリスク要因をリストアップしておくといったプロジェクト成功のノウハウを身につけていく。プロジェクトによっては、企業人のものの考え方、企業での仕事の進め方を垣間見ることになる。このプロジェクトマネジメントの知識は、パーソナル・プロジェクトマネジメントとして物事を進める視点を学生が持つことになり、将来ずっと使えるスキルであることを教える。

パソコンを活用した正課授業のリテラシー教育に加え、各学生に1台ずつ貸与した携帯情報端末（iPad）を活用し、就業後にも活かせるスキルを育成する。

プロジェクト活動では、教員の側は学生の主体性を引き出す「ファシリテーション能力」を問われることになり、教員の教育力育成にも役立つ。

④ アクティブラーニングの手法を使った教育経験の共有

「社会人基礎力」といったジェネリックスキルの育成は、初年次教育をどう進めるかといった問題とともに、どこの大学でも試行錯誤している課題である。各大学でのFD活動を活性化し、連携大学間で共有する仕組みをつくりたい。あらゆる局面で、アクティブラーニングの手法として5つ要素（グループワーク、ディベート、フィールドワーク、プレゼンテーション、振り返り）を含むような活動を展開し、上記の活動の高度化を図っていく。連携大学間のFD活動合同報告会といった研究会において、各大学の教員・学生代表がプレゼンテーションを行い、お互いの評価・フィードバックを行いながら、各大学の教育力のレベルアップを図りたい。これらの成果は、ホームページで公開し、連携していない大学にも広めるようにしたい。

上記のように、アクティブラーニングの手法を最大限活用して、メンタルタフネス育成講座やプロジェクト活動を中心とした4つの事業を展開し、学生の主体性を育み、産業界のニーズと大学における人材育成のギャップを埋めるような活動としたい。

・支援期間終了後の運用について

支援期間終了後も、連携大学間や協力企業との関係を維持発展させ、アクティブラーニングの手法を使いこなす経験を蓄積し、お互いに水平展開するようにし、他地域へもホームページや活動報告書による情報公開を積極的にすすめる。本事業を通して教職員のFD活動・SD活動を活発にし、学生の大学生活をより充実したものにする努力を続けることは当然のことである。

事業グループ活動報告



3.1

4つの教育事業

(1) メンタルタフネス講座グループ

1. グループ事業の取り組み

メンタルタフネスグループでは、ストレス耐性や我慢の欠如などメンタルタフネスの不足に対応するため、セルフモチベーション、リーダーシップ、目標設定・目標達成などの理論的背景と実践的演習を組み合わせ、学生自身の経験知を高める教育プログラムであるメンタルタフネス育成講座を実施した。2年生3月に「第1回メンタルタフネス育成 ベーシック講座」(平成25年度事業で実施済み)、3年生の5月に「第2回メンタルタフネス育成 セルフモチベーション講座」、7月「第3回メンタルタフネス育成 メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座」の計3回の講座を実施した。

『産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業』の取組として本学が進める4つの事業のうち、「①メンタルタフネス講座(全3回)」「②自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を連動し、運営方法・プログラム改善等を行い平成25年度より年3回実施とした。平成26年度の各回の講座の概要を以下に示す。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
5月	第2回メンタルタフネス セルフモチベーション講座
7月	第3回メンタルタフネス メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座
3月	第1回メンタルタフネス ベーシック講座(平成27年度新3年生対象)

<<主な行事>>

(1) 「第2回メンタルタフネス セルフモチベーション講座」

開催日：平成26年5月24日(土) 10:30~16:30

会場：豊橋創造大学 A22 教室

参加人数：学生 30名、教職員 3名

講師：キャラメルソース(株) 代表取締役 初見 康行 氏

内容：セルフモチベーション

モチベーションに関する基本的な知識、モチベーションの代表的な理論(良く知られている考え方)、自分自身のモチベーション「持論」の研究



図 3.1.1 セルフモチベーション講座の様子

(2) 「第3回メンタルタフネス メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座」

開催日：平成26年7月31日(木) 10:30~16:30

会場：豊橋創造大学 A24 教室

参加人数：学生 30名、教職員 7名

講 師：キャラメルソース(株) 代表取締役 初見 康行 氏
 内 容：仕事理解と企業研究
 企業研究の必要性と考え方、ボードゲームを用いた企業研究（アパレル業界）、ケーススタディを用いた仕事理解（タイプ別アドバイス法）



図 3.1.2 ビジネス研究講座の様子

(3) 「第1回メンタルタフネス ベーシック講座（平成26年度新3年生対象）」

開 催 日：平成27年3月26日（木） 10:30～16:30

会 場：豊橋創造大学 A22 教室

参加人数：学生 33名、教職員 4名

講 師：豊橋創造大学 経営学部 今井 正文

内 容：自己のメンタルタフネス

メンタルタフネスの基礎知識、ストレスとは、自己のストレス状況の把握（ストレス度チェック、ストレッサー）、ストレス対応のための資源、リラックス法などストレスに関する基本的な考え方についてグループワークを通して学ぶ。

2. 活動成果（平成26年度）

メンタルタフネス育成講座では、自己のメンタルタフネス、セルフモチベーションから初めて、仕事理解と企業研究、自己分析と就職活動というような内容で実施したが、各回の講座の学生アンケートの結果をまとめると以下の様になる。アンケートは5段階評価（評価 5. 非常に満足 4. 満足 3. 普通 2. 不満足 1. 非常に不満足）で実施した。全3回の講座を受講した学生からは、「就職内定まで、ストレスと上手く付き合い乗り切りたい」、「自分の事なのに自分では気づかないような発見があった」、「就職活動では自己分析がいかに大切なのかが分かった」等の感想が寄せられている。また、出席については全日程3日間について全員が受講できるよう各回の欠席者に対して補講を行い、全講座について全員の出席となっている。

表 3.1.1 アンケート評価（概略）

	質問内容	第1回	第2回	第3回	平均
Q1	講座の満足度は？	3.8	3.6	4.2	3.9
Q2	講座の内容は、今後の日常生活や就職活動、働いていく上で役立つと思いますか？	4.1	4.0	4.0	4.0
Q3	講師の話は分かりやすかった	4.2	4.0	4.3	4.2
Q4	パワーポイントは理解しやすかった	4.2	3.9	4.3	4.1
Q5～	各種ワークの平均値	3.7	3.6	4.1	3.8
	平均	4.0	3.8	4.2	4.0

さらに本年度第2回セルフモチベーション講座、第3回ビジネス研究講座において、学生アンケートに社会人基礎力に関する項目を追加して事前事後アンケートを実施した。社会人基礎力に関する部分の集計結果のグラフを以下に示す。各回の講座の事前事後アンケートの差異から、講座ごとに効果が高い項目に差はあるものの、社会人基礎力に関する押し上げ効果があることが分かる。

また、第2回セルフモチベーション講座と第3回ビジネス研究講座のアンケートにおいて、第2回の事後と第3回の事前の比較、あるいは第2回と第3回の事前アンケートの比較から、時間の経過で元に戻る項目が多いものの、社会人基礎力のいくつかの項目について効果が見受けられる。

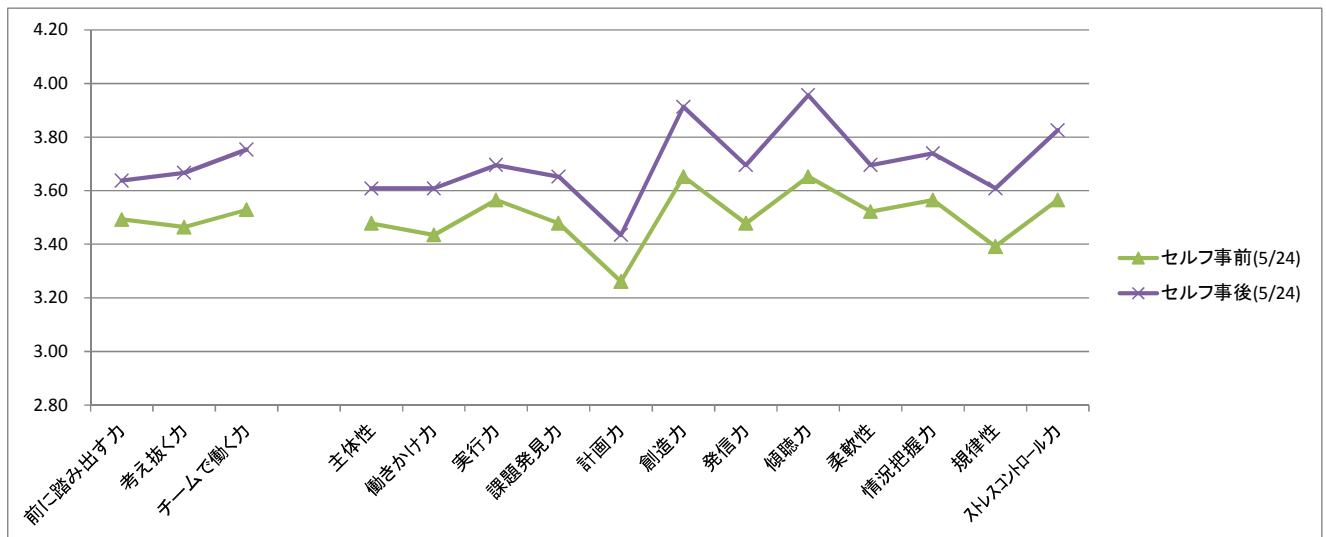


図 3.1.3 社会人基礎力アンケート評価 (セルフモチベーション講座)

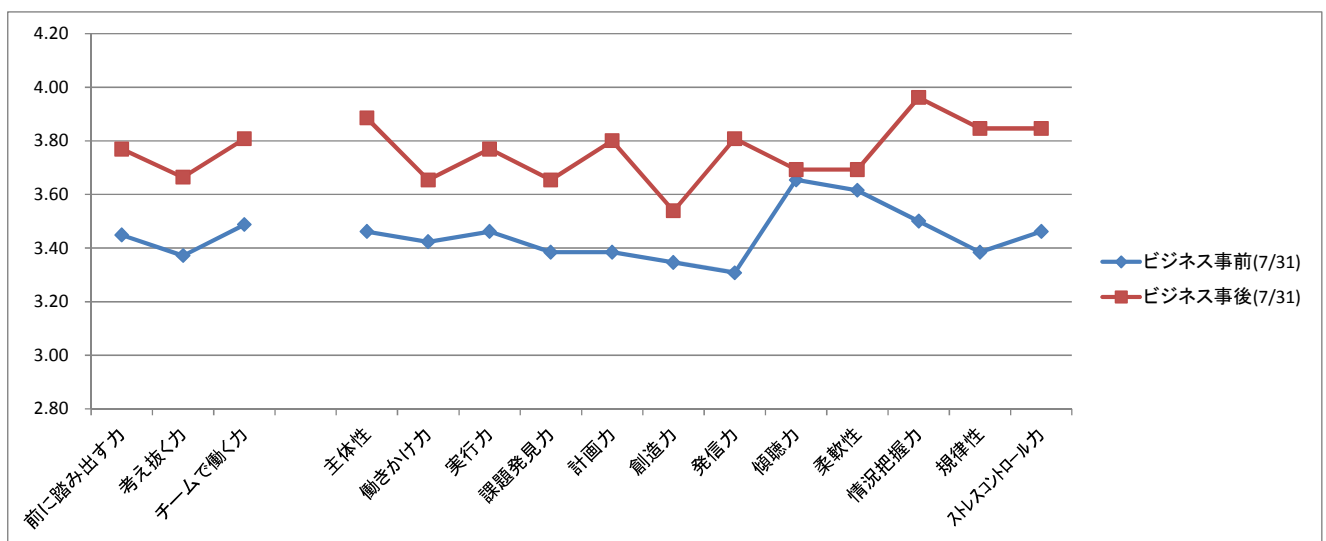


図 3.1.4 社会人基礎力アンケート評価 (ビジネス研究講座)

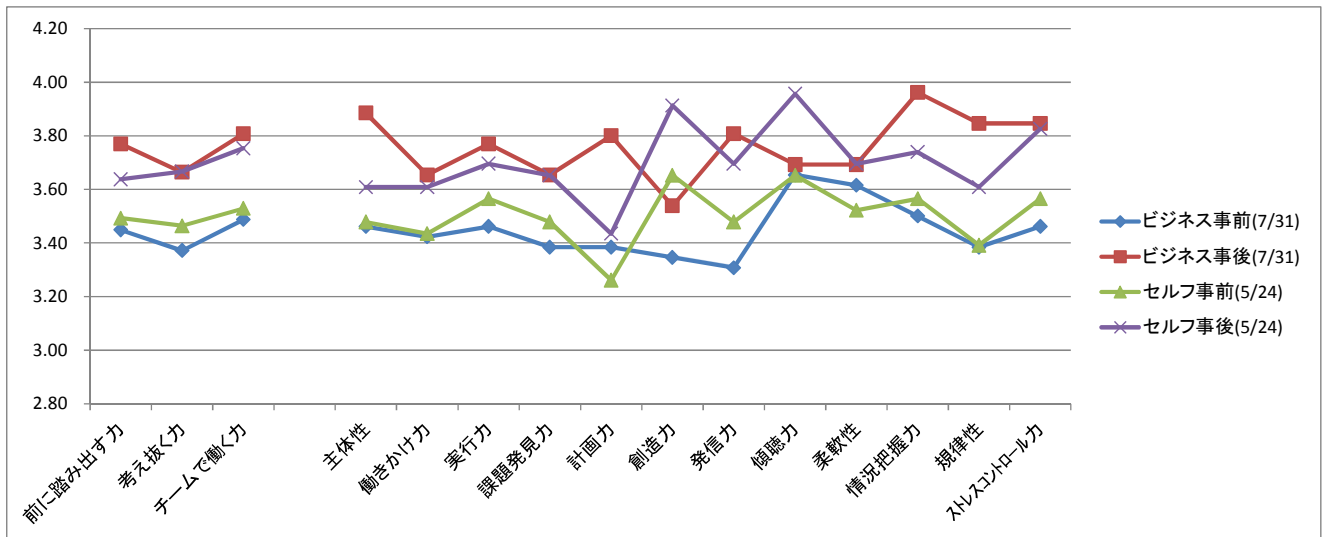


図 3.1.5 社会人基礎力アンケート評価（ビジネス研究講座）

3. 3年間を通じた成果

メンタルタフネスグループでは、ストレス耐性や我慢の欠如などメンタルタフネスの不足に対応するため、セルフモチベーション、リーダーシップ、目標設定・目標達成などの理論的背景と実践的演習を組み合わせ、学生自身の経験知を高める教育プログラムであるメンタルタフネス育成講座を実施した。平成24年度の全4回での独立したプログラムから、平成25年度からは「メンタルタフネス講座（全3回）」「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を連動し、2年生3月「第1回ベーシック講座」、3年生5月「第2回セルフモチベーション講座」、7月「第3回メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座」の計3回の講座とした。全体としては1科目15コマ構成（メンタルタフネス育成講座3コマ3回、自己理解促進講座3コマ2日）とし、年間を通じてのプログラムとした。各回講座の事前、事後の自己評価および自己理解促進講座PROGの結果から、社会人基礎力について幾つかの項目について押し上げ効果が認められる。プログラムの内製化も進めた結果、平成26年度末以降のメンタルタフネス講座については、学内常勤教員の実施とすることが可能となった。

4. 今後の課題

アンケート評価の概略からは、おおむね3後半から4前後であり、多くの学生が講座の内容を理解し、メンタルタフネスへの意識付けも出来ていると考えられる。第1回おもしろ村のような相互作用関連やボードゲーム関連は評価が高い様子である事などを考慮し各回のワークなどについては改善を行う必要がある。

以上の事から、メンタルタフネス育成講座については評価の低いワークについて今後も改修を行うとともに、スケジュールについてはインターンシップおよび就職ガイダンス、2月の自己理解促進のための模擬面接講座と連携する形とする。就職ガイダンスと連携する事により、メンタルタフネス育成講座から始まり、インターンシップ、就職ガイダンス、自己理解促進のための模擬面接講座へと、学生の関心と行動をスムーズにつなげる事が出来る事を期待している。

(2) 自己理解促進プログラムグループ

1. グループ事業の取り組み

自己理解促進グループでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を実施している。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者、特に通常経験することの出来ない面接官の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる事である。

言い換えると、学生に、面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させ、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになる。H24年度事業の集団面接および個人面接の面接ワークを体験する教員向け講習会の実施を踏まえて、H25、26年度は2日間にわたり学生向けの「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を実施した。

また、本学では既の実施しているメンタルタフネス育成講座と自己理解促進講座を一体化し、将来的には正規科目化を目指している。その中で受講前後の学生の成長度を把握することを目的に、PROG（コンピテンシーテストのみ）を導入した。経営学部2年生については、事前測定として2月に受験、3月に解説会を行い、自らが持つ現時点でのジェネリックスキルを理解するとともに、さらなる成長に繋げる方法を探った。3年生については、2月の自己理解促進講座の後に事後測定として実施した。講座の概要を以下に示す。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
4月	PROG 受験（学部1年生）
2月	PROG 受験（学部1年生、学部2年生事前測定） 自己理解促進講座 PROG 受験（学部3年生事後測定）
3月	PROG 解説会（学部2年生）

<<主な行事>>

(1) PROG 受験（学部1年生）

開催日：平成26年4月3日（木）
会場：豊橋創造大学 A23 教室
対象：経営学部1年生31名

(2) PROG 受験（学部1年生、学部2年生事前測定）

開催日：平成27年2月21日（土）
会場：豊橋創造大学 A24 教室
対象：経営学部1年生31名、経営学部2年生（事前測定）30名

(3) 自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）

開催日：平成27年2月23日（月）24日（火）
会場：豊橋創造大学 A24 教室
参加者：経営学部3年31名
協力企業担当者5名、学部教員8名
講師：学研メディコン 宗村善隆 氏、大藤律子 氏
内容：協力企業の人事担当者には面接官として参加してもらい、集団面接および個人面接、グループディスカッションワーク部分の評価を依頼。
協力企業：医療法人整友会 総務課長 伊奈昌宏 氏

野島保険（アメリカファミリー生命保険代理店） 代表 野島啓 氏
甲羅グループ（㈱甲羅） 人事総務部 中尾紘康 氏
㈱エーアイエー（アイセロ化学グループ） 店長代理 大羽良尚 氏
医療法人豊岡会 部長代理 布村直人 氏

（４）PROG 受験（学部３年生事後測定）

開催日：平成 27 年 3 月 25 日(水)
会場：豊橋創造大学 A31 教室
対象：経営学部 3 年生（事後測定）31 名

（５）PROG 解説会（学部 2 年生）

開催日：平成 27 年 3 月 30 日（木）
会場：豊橋創造大学 A22 教室
対象：経営学部 2 年生 30 名



図 3.1.6 自己理解促進のための模擬面接講座の様子

2. 活動成果（平成 26 年度）

自己理解促進のための模擬面接講座では、協力企業人事担当者、学生と共に教員も面接官として参加し、集団面接と個人面接のワーク教材の質問シートと評価シートを用いて、人事担当者の立場を理解した上で、質問や評価を行う。1 日目の講座において基本的な事項を学び、2 日目に実際に集団面接および個人面接のワークを行う。協力企業担当者から気が付いた点や意見等を述べてもらう事によって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて体験的に理解する。このように企業側のニーズの理解と、自己の職業観など自己理解を深めさせることが出来たと考えられる。また、この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになり、自己理解および内省をさせることが出来たと考えられる。

講座のアンケートの結果をまとめると以下の表の様になる。アンケートは 5 段階評価（5 役に立ちそう、4 やや役に立ちそう、3 普通、2 あまり役に立たなそう、1 役に立たなそう）で実施した。アンケート評価の概略からは、学生は自己理解促進講座について理解し、有益なものとしてとらえていると考えられる。また、協力企業担当者および教員の聞き取りからは、自己理解促進講座の模擬面接およびグループディスカッション等のワークについて、実践的で良いプログラムであるとの評価が得られている。

また、学生アンケートの社会人基礎力に関する項目の集計結果を以下に示す。講座の事前事後アンケートの差異から、講座による社会人基礎力に関する項目にも押し上げ効果があることが分かる。各項目をみると、発信力が低下しているが講座内で行われた模擬面接によって自己評価が修正されたことによると考えられる。他の項目については概ね押し上げ効果が見られ、相対的に自己理解促進プログラムの内省促す目的に沿った「考え抜く力」に関する項目が押し上げられていることが分かる。

表 3.1.2 アンケート評価 (概略)

	質問内容	評価
Q1	講座の満足度は？	4.5
Q2	講座の内容は、今後の日常生活や就職活動、働いていく上で役立つと思いますか？	4.6
Q3	講師の話は分かりやすかった	4.6
Q4	講座資料(ワークブック)は理解しやすかった	4.3
Q5～	各種ワークの平均値	4.1
	平均	4.4
	質問内容	4.5

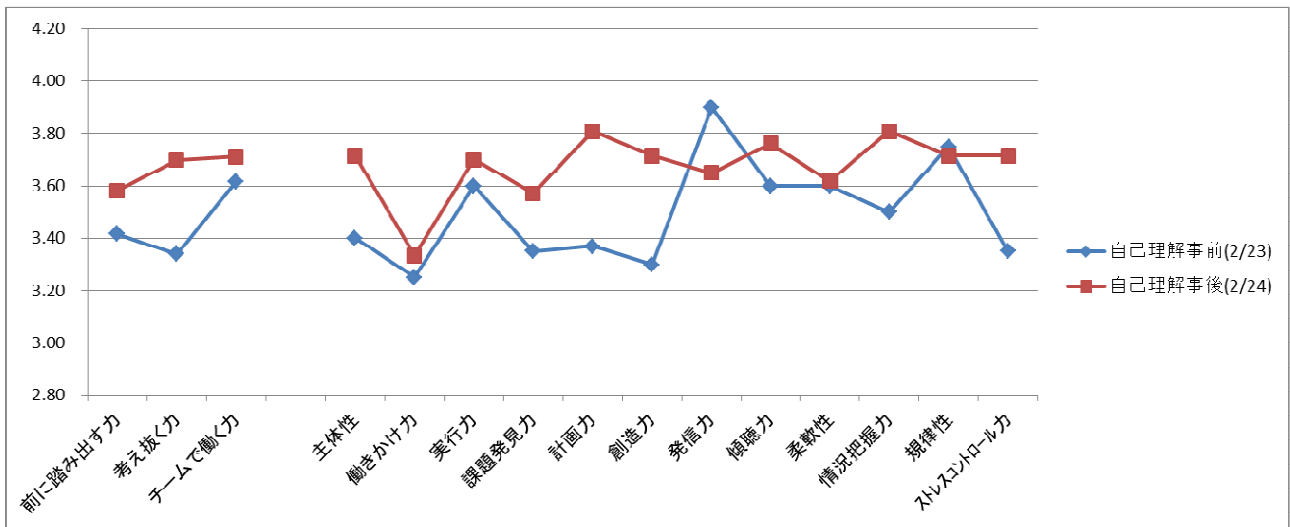


図 3.1.7 社会人基礎力アンケート評価

また、連携しているメンタルタフネス育成講座と自己理解促進講座の各講座の事前・事後の社会人基礎力に関する項目の3項目を図示すると以下ようになる。講座間の時間の経過で元に戻る傾向が見られるが、初期の講座では前の回の講座の自己評価が残存し、後半にかけても徐々に増加していく傾向が見られる。漸近的に増加傾向を示していることから、メンタルタフネス育成講座と自己理解促進講座を通して社会人基礎力の自己評価を押し上げる効果があるといえる。

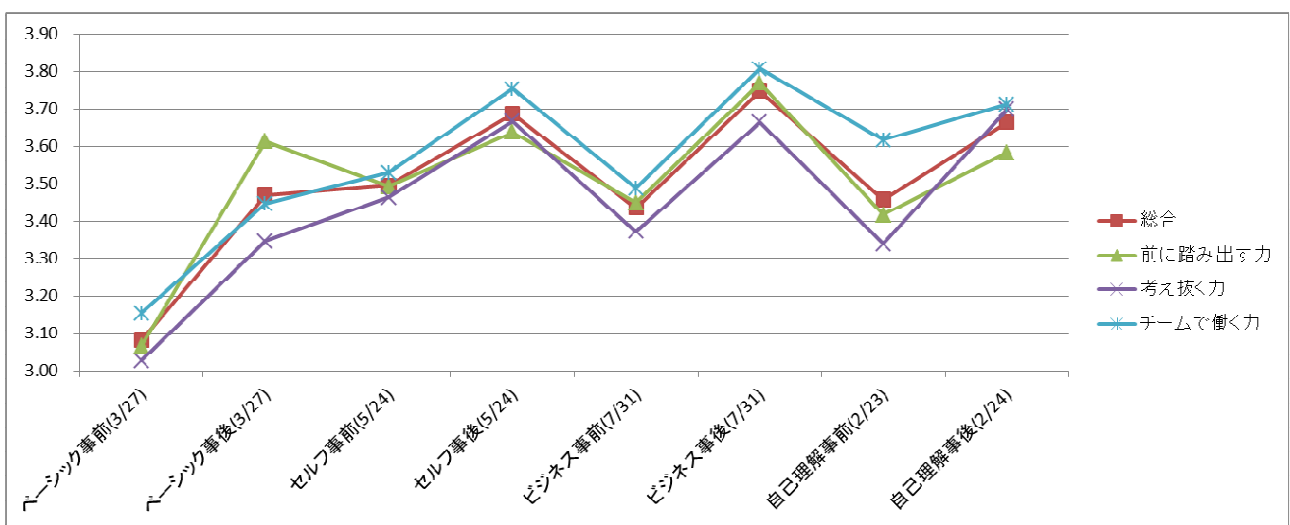


図 3.1.8 社会人基礎力アンケート評価の推移

3. 3年間を通じた成果

自己理解促進グループでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を実施した。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者、特に通常経験することの出来ない面接官の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる事である。言い換えると、学生に、面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させ、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになる。H24年度事業の集団面接および個人面接の面接ワークを体験する教員向け講習会の実施を踏まえて、H25、26年度は2日間にわたり学生向けの「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を実施した。

平成25年度からは「メンタルタフネス講座（全3回）」「自己理解促進のための模擬面接講座（自己理解促進講座）」を連動し、全体としては1科目15コマ構成（メンタルタフネス育成講座3コマ3回、自己理解促進講座3コマ2日）とし、年間を通じてのプログラムとした。

また、受講前後の学生の成長度を把握することを目的に、PROGを導入した。事前測定として2月に受験、3月に解説会を行い、自らが持つ現時点でのジェネリックスキルを理解するとともに、さらなる成長に繋げる方法を探った。3年生については、2月の自己理解促進講座の後に事後測定として実施した。各回講座の事前、事後の自己評価およびPROGから、社会人基礎力についていくつかの項目について押し上げ効果が認められることから、メンタルタフネス育成講座と自己理解促進講座を通して自己を内省することによって社会人基礎力を養成に効果があるといえる。自己理解促進講座における模擬面接ビデオデータは各自が参照できるようになっており、学生個々が後日に実施される個別の就職指導時に参照し振り返りを行うことが可能となっている。

4. 今後の課題

今後の課題は、さらなる協力企業担当者との協働体制の整備と実施内容及び時間配分等についての検討である。また、自己理解促進プログラムは、メンタルタフネス講座と連携するものであるため、年間を通じた全体スケジュールの調整が今後も必要である。以上の事から、自己理解促進のための模擬面接講座については、メンタルタフネス育成講座から自己理解促進講座、PROGによる測定とフィードバック、模擬面接ビデオデータの振り返りに至る全体スケジュールについて、学生の関心と行動をスムーズにつなげる事が出来るよう、今後も実施内容と内外に対する講座の意味付けの周知等について徹底していくよう留意したい。

(3) 地域企業連携プロジェクトグループ

1. グループ事業の取り組み

(1) 実施事業の目的と活動内容

大学生の就業力育成支援事業においては、社会から求められる人材育成を行うため、これまでの学士課程教育に加えて地域産業界との協働事業を展開し、その中で学生が自ら行動して就業力を学修することを目的としている。ここでいう就業力としては、社会人基礎力とも言われている能力を想定しており、

- ・多くの年代を含んだ企業人やグループ内メンバーとのコミュニケーション能力
- ・グループの中で役割を果たすことができる協調活動についての能力
- ・グループの中で事業を推進できる主体的に行動できる能力

を含む総合的能力の育成を目的としている。本事業では地域企業との協働プロジェクトにおいて、企業側の担当者と学生との協働作業をおこない、設定した目標が達成できるような活動の計画・実行・評価を繰り返し行う。プロジェクトにおけるミーティングは学生が上記に関する自らの能力を認識できる場となっており、その気づきを指導教員が促す。その気づきの中で、学生の自己成長やグループメンバーを模範として成長できるような学習環境の提供を目指している。本学では、実践教育としてインターンシップやビジネスプランコンテストへの参加を前提とし実践教育を正課授業の中で運営してきたが、本事業では、学年全員が外部企業との協働事業に参加することを前提に実施し、学生全体の就業力向上を目指している。

(2) 評価方法と学生指導方法の構築

地域企業連携プロジェクトでは、連携企業との協働作業を通して、学生の社会人基礎力養成を行うことになっている。学生が行うべきことを自律的に認識しそして行動できるような教育体制を形成しなければならない。上記にまとめた活動における行動規範に近接できるように指導教員並びに連携企業の担当者から適宜助言や指導を与える。事業中間の9月と事業終了後の1月に社会人基礎力シートを用いて、自己評価、教員評価、メンバー間相互評価を行い、学生本人にフィードバックする。学生にとっては、養成すべき能力が明示的に提示され、また、その改善に必要な事柄をこれまでの行動に対して助言されるので、次の行動計画や改善項目の理解が容易な教育体制になっている。学生活動の支援や助言などの指導方法について、連携グループ内でアンケート、考察、周知を行うことになっている。

平成24年度はプロジェクト活動に対する指導方法や企業協働方法の検討を行い、実際にプロジェクト活動を運営した。その指導結果を踏まえて、上記目的を達成するための指導方法や企業との関わり方法の改訂を行いながら学生プロジェクトの推進体制を整備した。また、学生が活動に対して内省できるように学生の社会人基礎力の評価方法とそのフィードバック方法を定めて実践した。平成25年度は、整備した運営体制を踏まえて、学生の自律的成長を促進できるよう教員側のアプローチ方法を探究した。1年間のプロジェクト活動において、9月と1月の2回評価、面談指導を実施し、学生の内省できる機会を増加させた。

プロジェクト活動では、種々の情報の収集、共有、それらの加工と意見形成に取り組まなければならないが、これらを効果的、効率的におこなうためには、ICT活用が不可欠である。平成25年度は、プロジェクト・マネジメントシステムを整備しプロジェクト活動支援を行った。また、ユビキタスキャンパスグループで整備 Sozo Passport に社会人基礎力シートの結果を掲載し、学生が身につけるべき能力に対する認識を高め、改善努力できる環境を形成した。平成26年度は、これまでの活動の充実に努める。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
5月	プロジェクトメンバーの決定 キックオフ講演会
5月から 7月	プロジェクトテーマの決定 プロジェクト計画の策定 目的, 協働企業の選定, 確定, プロジェクト計画書の作成
8月	中間発表会 (プロジェクトテーマ, 目的, 行動計画, 春学期実施内容) をパワー ポイントによる発表 配布資料 (A4 1枚 2段組) の作成
9月	社会人基礎力評価シートによる評価 社会人基礎力評価シートに基づく, 教員面接と助言, プロジェクト活動後半に向けて自己行動計画の作成
9月から 12月	プロジェクトの推進
12月	プロジェクト成果発表会 パワーポイントによる発表 配布資料 (A4 1枚 2段組) の作成 レジюме形式
1月	社会人基礎力評価シートによる評価 社会人基礎力評価シートに基づく, 教員面接と助言, 自己行動計画の作成 成果報告書 (学生)、成果報告書 (教員) の作成
2月	成果報告書 (教員) をもとに, プロジェクト活動の総括会議 (教育力向上研修会) の開催 次年度計画の策定 プロジェクト実施に関する改良 自己内省支援方法の検討

<<主な行事>>

(1) キックオフ講演会「豊橋を知る」

開催日: 5月1日 (金) 4限

会場: 本学 A23 教室

講師: 豊橋市企画部政策企画課 鈴木 祐二 様

参加人数: 経営学部3年生 26名

内容: 豊橋市政策企画課 鈴木祐二様を講師に迎えて、豊橋市における産業全体の特徴や推進事業についての講演を聴講した。また、「豊橋市のプロモーション」をテーマとしたグループ活動により、協働作業のために必要な主体性やコミュニケーション能力についての意義を認識した。



図 3.1.9 キックオフ講演会

(2) プロジェクト実習中間発表会

開催日：8月1日（金）3・4限

会場：本学 A31 教室

参加人数：経営学部3年生 31名，教職員 24名

内容：4月から始めたプロジェクト活動の目的や実施計画をプロジェクトグループ内でまとめて発表することにより、今後の計画の確認とその意義を再認識した。自らのプロジェクトのプロモーションを行うことの重要性を考える機会とした。



図 3.1.10 プロジェクト実習中間発表会

(3) プロジェクト実習成果発表会

開催日：12月18日（木）3・4限

会場：本学 B14 教室

参加人数：経営学部3年生 31名，来賓 1名，教職員 24名

来賓：豊橋市企画部政策企画課 鈴木 祐二 様

内容：4月から始めたプロジェクトのテーマや意義など全体像を要約して約10分で発表し、5分の質疑を行った。協力企業の担当者や代表取締役にご参加いただき、講評をいただいた。優秀なプロジェクト活動に対して学部長賞と学生が互選するプロジェクト賞を選出し表彰した。



図 3.1.11 プロジェクト実習成果発表会

2. 活動成果（平成 26 年度）

参加学生の社会人基礎力育成の観点における成果

平成 26 年度は、地域産業界と連携したプロジェクトとして 8 つのテーマについてプロジェクト実習を計画、実施した。その活動において学生が主体的、自律的、協調的にグループで行動して、テーマの決定、行動計画、作業の実施、進捗管理を行った。これらをグループの協議を通して決定し、役割分担して作業を進める体験をさせた。これらを効率的に進めるための必要な能力や行動について認識を深めさせた。

教育充実に関する観点の成果

本補助事業においては、学生の社会人基礎力を養成できる教育体制の構築や充実が目的である。プロジェクト実習は、学生がグループで作業を進める中での気づきや行動改善を行うための実習である。本補助事業の中心的事業であり、これらをカリキュラムに組み込み教育の実施、評価方法などを水死させた。具体的に事業展開することにより実施方法の改善ならびに改良についての意見交換を行った。

産業界ニーズ把握に関する観点の成果

人材育成に対する意見だけでは、抽象的で理解し難い。そのため、育成すべき能力を容易な言葉で説明し、その理解を深める。

3. 3 年間を通じた成果

地域産業界と連携したプロジェクトとして平成 24 年度は 11 テーマ、平成 25 年度は 8 テーマ、平成 26 年度は 8 テーマのプロジェクト活動を計画、実施した。それぞれのテーマは、表に示す。活動成果でも述べたが、本プロジェクトを通して学生が主体的、自律的、協調的にグループで行動

して、テーマの決定、行動計画、作業の実施、進捗管理を行った。グループ活動の経験を積むとともに、必要な能力や行動について認識を深めた。また、プロジェクト活動を通じて社会人基礎力が育むことが可能であることがわかった。特に、平成 25 年度の PROG と社会人基礎力の評価から、PROG を客観的評価、社会人基礎力評価シートを主観的評価として変化をみたところ、PROG で「自信創出力」「計画立案力」「実践力」で高い伸びがあり、社会人基礎力評価シートで「主体性」「実行力」「計画力」で向上傾向がみられた。主観的・客観的評価のどちらも類似した項目が向上したことより、プロジェクト活動を行うことで、自信を持ち、計画を立てて、自ら行動できる能力が育まれると考えられる。

4. 今後の課題

本事業の目的は、学生の社会人基礎力を養成することである。そのための教育体制や指導方法について検討実施した。次年度以降もプロジェクトのテーマ設定、活動計画の立案などの学生活動を支援する方法についての改善をすすめ、教育体制整備をより一層推進する。

(4) 3者間協働インターンシップグループ

1. グループ事業の取り組み

インターンシップは、学生が企業における就業体験を通して、①現場での実務から大学での学びの意味および意義を再確認して積極的な学びの姿勢を身に付けること(学びの往還)、②就業に対する意識を高めるとともに、職業・職種に対する理解を深めることを目的とした産官学連携の教育プログラムである。

インターンシップにより、学生には仕事上の問題点を自ら発見し、目的を設定して仮説を立て、創造的に解決する機会を提供する。また、就業体験に関する発表資料および報告書を、教員・企業からの指摘をフィードバックしながら作成することで、アクティブラーニングを伴った主体性・創造性の育成を目指す。

そのために、本年度は以下の内容を実施した。

- ・事前指導(インターンシップの実施内容の理解、インターンシップへの参加目的の明確化、実習企業の事業概要の理解、ビジネスマナー講座)

多様化するインターンシップの実施内容を理解し、充実した実習を実施できるように学内担当教職員ならびに外部講師によるインターンシップ説明会を開催するとともに、前年度の実施事例紹介を行う。

インターンシップへの参加目的を明確にするとともに実習先企業の事業概要の理解を深めるために、発表とその内容に対する議論を中心としたグループワークを実施する。

また、実習中に求められるビジネスマナーを確認するために、ビジネスマナー講座を実施する。

- ・実習(就業体験)

各自が実習先に企業にて、1~2週間の就業体験を行う。

- ・報告会の実施(発表資料の作成)

プレゼンテーション資料の作成を通して、実習内容を振り返りながら自身の設定したテーマの内容・発見した問題点に関する考察を教員および企業担当者の指摘をフィードバックしながら深める。

また、発表練習をグループ単位で実施することにより、学生自身にどのような発表をすべきかを考えさせる。

- ・報告書の作成

報告会の実施同様、報告書の作成を通して、実習内容を振り返りながら自身の設定したテーマの内容・発見した問題点に関する考察を教員および企業担当者の指摘をフィードバックしながら深める。

なお、本年度は経営学部(情報ビジネス学部)3年生9名と2年生3名の計12名が10企業・事業所のインターンシップに参加した。実習期間は、1週間(5日間)が5名、6日間が1名、7日間が1名、2週間(10日間)が5名であった。

<<主なスケジュール>>

平成26年度の主なスケジュールは、以下の通りである。

5月 事前指導(インターンシップ説明会、インターンシップの事例紹介)(担当:科目担当教員、

- キャリアセンター)
- 6月 事前指導 (実習先のマッチング・自己紹介書の作成指導) (担当: キャリアセンター)
- 7月 事前指導 (自己紹介書の校閲指導) (担当: 科目担当教員)
ビジネスマナー講座 (担当: キャリアセンター)
- 8・9月 実習 (1~2週間)
実習先の訪問 (担当: キャリアセンター、就職委員会教職員、専門ゼミナール担当教員)
- 9・10月 報告会資料の作成指導・発表練習 (担当: 科目担当教員、専門ゼミナール担当教員)
- 10月 インターンシップ報告会の実施
企業との座談会の実施
- 10~12月 報告書の作成指導 (担当: 科目担当教員、専門ゼミナール担当教員)
※学内での校閲終了後、企業担当者による校閲を受ける
- 2月 報告書の完成・印刷

<<主な行事>>

(1) インターンシップ報告会

今年度の報告会は、平成26年10月20日(月)に本学A32教室にて実施した(図1)。報告会には、次年度インターンシップに参加する2年生を中心とする在学生在が参加した。また、学外からはインターンシップ実習先企業・事業所から9企業・事業所(10名)、近隣高校から6校(7名)、さらに産業界ニーズGP連携大学から1大学(2名)の参加があった。

報告会では、まず本年度のインターンシップの実施スケジュールおよび実施状況を説明し、続いて実習生12名が実習先企業の概要と実習目的・内容について報告した。その後、実習先企業・協力企業から学生の報告内容に対してコメントを頂くとともに、およびインターンシップに参加する際の心構えなどについてコメントを頂いた。

実習生による報告では、「インターンシップにはできる限り早い時期に参加した方がよい。」「参加するまでは大変に感じるが、参加して他大学の学生と交流もできるので、是非参加して欲しい。」といった声が聞かれた。



図3.1.12 インターンシップ報告会の実施風景

(2) インターンシップ座談会

インターンシップ報告会に引き続き、本学3階会議室にてインターンシップ協力企業との座談会を実施し

た（図2）。座談会には6社（6名）の協力企業に参加頂いた。

座談会では、まず本学の今年度のインターンシップの実施状況を説明し、続いて企業・事業所の方よりインターンシップにおける学生の実習状況、問題点、今後の課題などについて様々な意見を頂いた。

一部企業からは、実習に参加する学生全般に対して、「全体的に元気が無く、自分の意見を表示しない学生が多い」、「質問に対しては必ず答えて欲しいと」の意見が出された。インターンシップは普段見ることができない企業様子を知る絶好の機会であるので、質問事項を事前に考えさせておくなどの準備もしておいて欲しいとのことであった。また、新聞を読んで社会・経済の日々の動向に興味を持つように努めて欲しいという要望や、また「インターンシップ=内定（その企業に行かなければならない）」という印象を持って参加を避けている学生がいるのではないかと意見も出された。

より詳細な社会人基礎力に関わる産業界ニーズの把握のために、昨年度に引き続き実習生の社会人基礎力の評価への協力を各社に依頼し、了承を得た。



図 3.1.13 インターンシップ座談会の実施風景

2. 活動成果（平成 26 年度）

インターンシップが産学官連携の教育プログラムであるという観点から、本学では実習中の学生の評価を実習先企業に依頼している。従前より、職務に取り組む姿勢、実習テーマへの取り組み等の状況の評価を依頼し、それらの評価内容を学生にフィードバックしながら実習報告書の作成に取り組み、作成した実習報告書に対しても実習先企業に校閲評価を依頼している。さらに、昨年度より社会人基礎力の評価も依頼している。

今年度も、これら三点の評価を依頼し、その評価結果を通して、学生に不足している点を明確にするとともに、企業が学生に対してどのようなものを求めているのか、そのニーズの把握に努めてきた。

それら評価の記入票を図3～5に示す。なお、各評価票の主な評価項目は以下の通りである。

- ・実習評価記入票（図3）

職務規律の遵守、職務に取り組む姿勢、実習テーマへの取り組み等の評価結果を記入

- ・報告書原稿の校閲評価記入票（図4）

報告書の「テーマ」の設定、報告書本文の記述内容（実習先事業所の概要、実習概要、実習内容、図表および解説内容、考察）について、評価結果を記入

- ・実習生の社会人基礎力レベル評価（図5）

社会人基礎力に関する3つの力、12項目について、到達レベルを評価

なお、社会人基礎力レベル評価表では、その評価に際して基準が必要であるため、他大学の学生と比較して当該学生の到達レベルを判断頂くこととした。

豊橋創造大学インターンシップ実習評価

事業所名		記入者氏名	
部署名		実習学生名	
実習日時	平成 年 月 日 () ~ 平成 年 月 日 ()		

I 評価

(1)職務規律の遵守について

(2)職務に取り組む姿勢について (意欲・積極性・協調性・責任感)

(3)実習テーマへの取組み等について

(4)その他この学生についてご意見をお書きください

II その他

本学インターンシップ委員会についてご意見・ご要望
(実習学生が複数で、記入者が同一の場合はいずれか一部にお書きください)

(実習先事業所一大学)

本様式は、本学「個人情報保護に関する規程」の定めに従い、取扱いをさせていただきます。
なお、本様式の記載事項(個人情報)はインターンシップ以外の目的では使用いたしません。

豊橋創造大学 キャリアセンター

図 3.1.14 実習評価記入票

2014年度

インターンシップ報告書原稿の校閲評価 記入票

1. ご担当者様についてご記入ください

実習先 事業所名			
校閲 ご担当者	部署名	役職名	お名前
実習学生	学籍番号		氏名

2. 上記学生の報告書原稿を以下7項目について評価してください

報告書原稿の評価項目	該当する評価番号を○で囲んでください
1) 報告書「テーマ」の設定	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好
2) 目録表(1ページ)	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好
3) 「はじめに」の内容	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好
4) 実習先事業所の概要	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好
5) 実習概要または実習内容	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好
6) 図表および解説内容	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好
7) 考察の記述内容	1. 訂正を要する 2. 普通 3. 適切 4. 良好

3. 報告書原稿の修正の程度を該当する番号を○で囲んでください

修正の程度	学生およびインターンシップ委員会の対応内容
1. 全面的に修正してほしい	学生へ報告書原稿を全面的に修正させ、委員会の教員点検の後、貴事業所へご高関をお願いします
2. 訂正箇所が多く有り、指示にしたがって全て修正してほしい	全ての訂正箇所をご指示にしたがって学生に修正させ、貴事業所へ高関を再度お願いします
3. 訂正箇所が幾つかあり、指示にしたがって修正して大学内で点検してほしい	訂正箇所をご指示にしたがって学生に修正させ、委員会の教員による点検の後、報告書原稿を校了とします
4. 修正する必要なし	本学キャリアセンターで点検して校了とします

4. 初校原稿に対する総合評価の該当番号を○で囲んでください

総合評価	5. 大変良い 4. 良好 3. 良い 2. 報告書として可 1. 不可(要訂正) 0. 全面的に修正
------	--------------------------------------------------------

5. その他、学生へのご指導または報告書編集などに関するご意見などをご記入ください。

(注)上記の個人情報、本学のインターンシップ以外の目的で使用することはいけません。

豊橋創造大学 キャリアセンター

図 3.1.15 報告書原稿の校閲評価記入票

社会人基礎力レベル評価表 評価対象学生氏名: ○○ ○○

3つの力	12の要素	定義	できていなかった 評価 1	あまりできていなかった 評価 2	同等のレベルでできていた 評価 3	他の学生よりもできていた 評価 4	行動(実習)できていた例
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力					自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組んでいた
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力					相手を納得させるために、協力することの必要性(意義、理由、内容など)を伝えるなど、働きかけていた
	実行力	目的を踏まじ結果に行動する力					目標達成に向かって、強い意志を持ち、困難な状況から逃げずにねばり強く取り組み続けていた
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力					現状を正しく認識し、現段階でなすべきことを的確に把握して課題を明らかにしていた
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力					作業のプロセスを明らかにして、実現性の高い計画を立て、また状況に合わせて柔軟に計画を修正していた
	創造力	新しい価値を生み出す力					複数のものもの、考え方、技術等を組み合わせ、新しいものや解決策を作り出していた
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力					聞き手がどのような情報を求めているかを理解し、事例や客観的なデータ等を用いて具体的にわかりやすく伝えていた
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力					内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解していた
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力					自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れていた
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力					周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうよう行動していた
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力					相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解して行動していた
ストレス コントロール力	ストレスの発生源に対応する力					ストレスの原因を見つけて、自力または他人の力を借りて取り除くことができていた	
実習中の挨拶・言葉遣いなど							

※ 各項目につきまして、他大学の学生と比較して当該学生の達成度がどの程度であると感じられたか、該当する評価レベルに ○ を記入下さい。
※ 記入が困難と思われる項目につきましては、空白のままでも構いません。

図 3.1.16 実習生の社会人基礎力レベル評価

今年度の社会人基礎力レベル評価を見ると、前年度強化を望まれていた「主体性」で高い評価を得られている学生が多く見られた。また、「働きかけ力」、「傾聴力」、「状況把握力」でも高い評価が多く見られた。

その一方で、「計画力」、「創造力」については強化を望む評価が見られた。ただし、これら社会人基礎力のどの力が不足していると判断されるかは、学生個々に依存している面が大きい。

このように、前年度に引き続き学生の社会人基礎力に対する産業界ニーズをより細かく把握し、改善された項目・さらなる改善が必要な項目を把握することができた。今後、各学生に対する社会人基礎力評価の内容を精査して、大学全体で指導すべき内容と学生個々の状況に合わせて指導する内容を区別して、指導体制・方法のさらなる改善に取り組む。

3. 3年間を通じた成果

本事業を通して、学生の社会人基礎力に対する産業界ニーズを把握し、インターンシップの事前・事後指導を充実させることによりインターンシップの深化（主体性・創造性の育成）に努めてきた。

産業界ニーズの把握では、座談会を通して学生全般に対する評価の把握に努めた。その結果、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」については概ね高い評価を得た一方、「主体性」、「実行力」、「課題発見力」には改善が必要との評価を得た。また、社会人基礎力評価シートを通して、学生個々が不足していると思われる力の把握を行った。

これらの評価結果を踏まえて、学生指導の改善・充実に努めた。

事前指導では、多様化するインターンシップの内容理解を進めるために、学内の教職員ならびに外部講師による説明会を開催するとともに、インターンシップの事例紹介やグループワークにより、インターンシップへの参加目的の明確化および実習先企業の事業内容の理解の深化に努めた。

また、事後指導では実習評価記入票のコメントを反映させながら、学生個々のインターンシップの振り返りを実施し、その内容を学生は報告会で発表するとともに、報告書としてまとめた。

これらの取り組みの結果、報告書に対する評価は5段階評価で平均3.8という評価を得た。また、社会人基礎力評価シートによる評価では、平成25年度に改善が必要とされていた「主体性」について、平成26年度では高い評価を得ている学生が多く見られるようになった。一方で、「計画力」、「創造力」については引き続き強化を望む評価が見られた。

以上のように、本事業を通して、産業界のニーズを把握してインターンシップの充実を図り、社会人基礎力の向上において一定の成果を上げることができた。

4. 今後の課題

インターンシップを取り巻く状況は、今後大きく変化することが予想される。

就職活動時期の後ろ倒し（繰り下げ）により、平成27年度卒業予定者から採用情報や説明会情報は学部3年生の3月に解禁となり、また採用選考開始は4年生の8月からスタートとなる見込みである。これに伴って、インターンシップを取り巻く状況も大きく変化することが予想される。

まず、採用選考が8月から開始されるために、インターンシップの実施時期を従来の夏季（8・9月）から冬季（12・1月）や春季（2・3月）に変更する企業が増えることが予想される。また、複数時期での実施を検討する企業も増えると思われる。

インターンシップの実施形態も多様化している。従来文系学部で中心的に実施されていた短期（5-10日）のインターンシップに加え、中長期（2-6ヶ月）のインターンシップやコーオペ教育プログラム、課題解決型（PBL）インターンシップの導入促進も求められている。

本学としては、「単に参加して何かを見てきた」ではなく、「次の学びにつながる、働く意義を考える」ようにインターンシップの充実化・実質化を目指して、今後も継続して事前・事後指導の充実・改善に取り組む所存である。しかしながら、例えばインターンシップの複数時期での開催が拡大した場合に、どのように指導カリキュラムを組み込むのか、単位認定をどの時期にどのように行うのかなどが大きな問題となる。これに対応するために、産業界と連携して、事前・事後指導をより充実させる新たな制度設計の検討が必要である。

また、学生の主体性を育むという観点からは、インターンシップへの複数回の参加が望ましい。そのために、カリキュラム変更などを実施して、2年次学生のインターンシップへの参加機会を本格的に増やすことも必要である。それとともに、1年次学生に対してインターンシップへの興味を喚起する機会を新たに設け、2年次でのインターンシップ参加につなげるフローを整備する必要がある。

3.2

教育体制・産業界ニーズ
把握体制の整備・連携推進

(1)連携事業推進グループ

1. グループ事業の取り組み

産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業では、中部地域 23 大学と連携して、「アクティブラーニングを活用した教育力強化」と「地域・産業界との連携力強化」が行える教育プログラムを形成することになっている。豊橋創造大学では、社会人基礎力を養成すべき資質として位置づけ、そのための4つの教育プログラムを実施する。そして、その成果や失敗を広く開示するとともに他大学と共有することにより、よりよい教育体制を構築する。連携事業推進グループは、このような実施事業の成果と失敗の公表と他大学との連携を図り、本学における教育体制の整備を進める。また、実施する教育プログラムを教育効果の高い教育プログラムに改善するために、連携事業推進グループでは、学生の社会人基礎力の評価方法と教育への展開方法を検討し実施する。さらに、社会人基礎力養成プログラムの実施成果を他の授業に展開して、学生に早期の意識付けや態度・志向の養成を進める。

<<主なスケジュール>>

日程	実施事項
5月17日	第1回東海 A (教育力) チーム会議 参加
5月17日	ワークショップ「産学アクティブラーニングの発展に向けて」参加
6月27日	平成 26 年度インターンシップ等実務者研修会 参加
8月6日	第1回教育力向上研修会 実施
8月7日	第1回就業体験講座 実施
8月28,29日	東海 A (教育力) チーム 連携 FD 合宿研修 参加
9月3-5日	平成 26 年度 教育改革 I C T 戦略大会 参加
9月8日	第2回就業体験講座 実施
9月24日	第3回産業界ニーズ事業セミナー (主催: 中部大学) 参加
10月20日	インターンシップに関する企業担当者との座談会
11月15日	平成 26 年度 第1回中部圏産学連携会議 (主催: 中部地域大学教育改革推進委員会) 参加
11月19日	第2回教育力向上研修会 実施
12月18日	第2回東海 A (教育力) チーム会議 参加
12月26日	平成 26 年度達成目標に係る評価報告提出
1月23日	平成 24~26 年度活動報告書提出
2月2日	第3回就業体験講座 実施
2月20日	第3回教育力向上研修会 実施
2月27日	本事業の事後評価書提出
3月7日	大学教育改革フォーラム in 東海 2015 参加発表
3月12日	第3回東海 A (教育力) チーム会議 参加

<<主な行事>>

補助事業の全体と俯瞰して、教育効果を高めるための他大学連携や学内事業の調整や教育方法・評価方法の検討を行っている。具体的に行っている活動を他大学連携に係る活動と教育体制整備に係る活動に分けて示す。

(1) 他大学連携に係る活動

東海 A チーム (教育力) チーム会議 参加

連携 FD の開催や参加

平成 26 年度第1回中部圏産学連携会議 (主催: 中部地域大学教育改革推進委員会) 参加

他大学、他組織開催シンポジウムへの参加

本学成果の発表



図 3.2.1 第 1 回教育力向上研修会
(左:名古屋商科大学の亀倉正彦先生による講演、右:ワークショップ風景)



図 3.2.2 東海 A(教育力)チーム 連携 FD 合宿



図 3.2.3 第 2 回教育力向上研修会

(2) 教育体制整備に係る事業

- 教育力向上研修会の実施
- 就業体験講座 (1 年生) の開催 (3 回)
- 経営ビジネス講座の開催 (15 回)

2. 活動成果 (平成 26 年度)

上記のように、連携事業推進グループの役割は、実施される 4 つの教育プログラムの成果を踏まえて教育体制の整備と産業界ニーズの把握体制を構築することである。また、成果や失敗を他大学と共有することにより、学生事業の推進や改善を図ることが本グループのもう一つの役割である。平成 24 年度、25 年度を踏まえ、平成 26 年度の活動成果は、まとめると以下ようになる。

- ・ 育成すべき資質の育成を、補助事業を含むキャリア関連科目等 16 科目で展開するために該当科目における学修計画を立案し集約した。一部の科目においては、教育方法の改善を図った。
- ・ 3 回の教育力向上研修会を実施し、本補助事業の目的の徹底や学生指導方法についての学習を進めた。第 1 回教育力向上研修会では名古屋商科大学の亀倉正彦先生を、第 3 回教育力向上研修会では株式会社はあもにいの大野晴己氏を招聘し、学生指導方法の探求を行った。
- ・ 学生が直接社会 (企業) と接する機会創出のために、就業体験講座、経営ビジネス講座を開催した。
- ・ 本学並びに他大学の実施状況の確認のためのミーティングに参加した。特に、東海 A チームの連携 FD 活動として合宿研修会を開催した。



図 3.2.4 第 3 回教育力向上研修会
(左：株式会社はあもにいの大野晴己氏による講演、右：ワークショップ風景)

3. 3 年間を通じた成果

平成 24 年度は、連携事業推進グループの補助事業全体における役割を明確化した。その役割に基づいて、学内の成果および失敗を取りまとめ連携大学に報告するとともに、他大学の状況の報告を受けて学内事業の考察を進めた。連携 FD や中部圏産業ニーズ把握会議に専任教員が参加して、事業目的やその実施意義や方法についての認識を深めた。高い割合で、専任教員がこれらの事業に参加した。また、補助事業で展開する教育プログラムのみならず、他科目への展開方法や社会人基礎力の評価方法の検討を始めることができた。また、社会人基礎力の評価については、プロジェクト活動やインターンシップなど学生の活動にもとづいて評価する仕組みと学生にフィードバックする方策を検討した。事業実施内容を大学教育改革フォーラム in 東海 2013 で発表報告した。

平成 25 年度は、育成すべき資質の評価の時期を整理しそれらを総合的にどのように活用するかについて検討した。また、学生が自らの状況を理解するために評価内容についての理解を深め自省できるように、評価についての説明会や教員との面談機会を設けた。自らの行動計画についての考察する機会も設定し、自己理解を弛緩できる体制を形成した。複数実施する評価結果にもとづき教育効果の評価や次年度への活用を検討するために、教育効果測定・指導方法WG開催した。また教員の指導力向上のために 3 会の教育力向上研修会を開催した。さらに、科目展開のためにキャリア形成科目群やゼミナール中心に、科目選定し学修マップをまとめた。

平成 26 年度は、平成 24 年度、25 年度を踏まえ、社会人基礎力養成の教育プログラムの展開や産業界ニーズ把握の体制・制度の整理を図るために教育力向上研修会を開催した。研修会は全 3 回行い、第 1 回「より良い PBL(Project Based Learning)指導を目指して」、第 2 回「プロジェクト運営における教育効果・工夫と課題」、第 3 回「企業が求める社会人基礎力と指導のあり方」をテーマに議論を深めた。また、他大学連携に係る活動にも積極的に参加した。

4. 今後の課題

3 年間で、補助事業で目標としている学生の就業力とくに社会人基礎力を養成する教育体制整備並びに産業ニーズ把握の体制・制度の整理を行った。具体的には、上記に記載した内容である。これら検討した体制で、今後は 1 年を通じた教育プログラムを運営し、教育体制や制度の評価を行う。

3.3

教育体制・産業界ニーズ
把握体制の後方支援

(1) ユビキタスキャンパスグループ

1. グループ事業の取り組み

本グループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 環境の整備および ICT 利活用推進を中心とした以下の活動を行っている。

- (1) 学内 ICT 環境の整備・充実（設備等の維持や利便性向上の検討）
- (2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、eラーニング推進
- (3) 「4つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援
- (4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

前年度までの実施状況と評価結果を踏まえ、平成 26 年度は改善活動を中心に実施した。特に、スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) の追加開発・改修の支援、本事業 Web サイトの改修と充実化、等に取り組んだ。事業最終年度に当たるため、教員によるこれまでの ICT システム活用状況を把握することを目的としたアンケートを実施した。

また、例年どおり、平成 26 年度入学生 (学部・経営学科 1 年、短大部：キャリアプランニング科 1 年) に iPad を貸与するとともに、利用に関するサポートを行った。

<<主なスケジュール>>

分類	時期	内容
(1)	4 月～3 月	学内 ICT 環境の維持・管理・監視、充実化、状況に応じて改善活動
(2)	4 月	プロジェクト管理システム・スチューデントプロフィールシステム等利用方説明 (情ビ 3 年、キャリア 2 年)
	5 月	携帯情報端末の配布準備
	6 月	携帯情報端末の配布、利用方法に関する説明会 (経営 1 年、キャリア 1 年)
	12 月～2 月	携帯情報端末の物品確認および回収 【確認】 12 月:情ビ・経営 3 年・キャリア 1 年、1 月:経営 1 年、情ビ・経営 2 年 【返却】 1 月:キャリア 2 年、2 月:情ビ 4 年
(3)	4 月～3 月	プロジェクト管理システム開発・運用支援
	4 月～3 月	スチューデントプロフィールシステム運用・開発支援
	4 月～3 月	eラーニングシステム管理
(4)	4 月～3 月	Web サイトの運営

情ビ:情報ビジネス学部キャリアデザイン学科 経営:経営学部経営学科 キャリ:短期大学部キャリアプランニング科

<<主な行事>>

分類	日付	内容	対象
(2)	4 月 8 日(火)	プロジェクト管理システム利用説明会	経営 3 年
	4 月 10 日(木)		
(2)	4 月 16 日(水)	プロジェクト管理システム利用説明会	キャリア 2 年
(2)	6 月 11 日(水)	iPad 配布・説明会 (+Handbook, Sozo Passport 説明)	経営 1 年
(2)	6 月 13 日(金)	iPad 配布・説明会 (+Handbook, Sozo Passport 説明)	キャリア 1 年
	8 月 6 日(水)	ICT システム利用状況に関するアンケート	教員
(3)	8 月 20 日(水)	プロジェクト管理システム機能改善	
(3)	4 月～2 月	スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 機能改善	
(3)	8 月～10 月	eラーニングシステム (Handbook) 更新	

2. 活動成果（平成 26 年度）

(1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)

- 平成 23 年度末に無線 LAN 環境の充実化をはじめとする学内 ICT 環境の更新を行い、大学の一般教室・PC 教室のすべてにおいて携帯情報端末から無線 LAN 接続ができる環境を整えている。平成 24 年度以降は、継続して学内設備に対するシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。結果として、今年度は特に不具合の発生は確認されず、現状では安定した無線 LAN 接続環境を提供できているといえる。

(2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

- 平成 26 年度入学生(経営学科1年生、キャリアプランニング科 1 年生)に対して携帯情報端末(iPad)を貸与するとともに、その基本操作方法や ICT システム(スチューデントプロフィールシステム Sozo Passport、e ラーニングシステム Handbook)の導入に関する説明会を実施した(図 3.3.1)。



図 3.3.1 iPad 配布・説明会の様子（左：経営 1 年、右：キャリ 1 年）

- 平成 25 年度に引き続き、平成 26 年度も e ラーニングシステム(Handbook)の授業や演習における活用が進んだ。図 3.3.2 は Handbook ログイン数(日ごとのユニーク利用ユーザー数の月合計)およびコンテンツ数を示したものである。年度によって学生数が異なるためログイン数を単純に比較することはできないが、年間を通して e ラーニングシステムが活用されたといえる。教職員が作成した教育用コンテンツも確実に増加しており、授業・演習内利用が一層進んだことを確認できる。

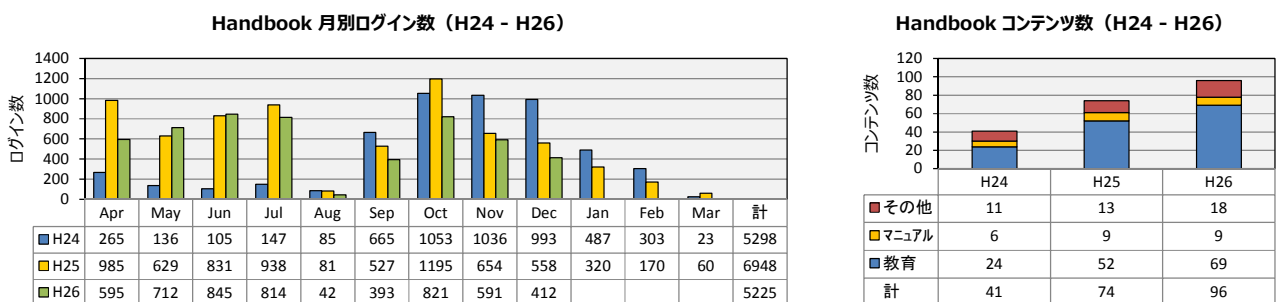


図 3.3.2 e ラーニングシステム (Handbook) 活用状況
(左：ログイン数の推移、右：掲示コンテンツの内訳)

(3) 「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 事業開始当初から自己理解促進プログラムグループ・地域産業連携プロジェクトグループと連携して開発してきたスチューデントプロフィールシステム(学修ポートフォリオシステム、Sozo Passport、図 3.3.3)について、平成 26 年度も開発・運用支援を行った。具体的には、PROG アセスメント結果の登録、社会人基礎力評価シートの登録、自己理解促進プログラムにおける面接記録ビデオの登録、インターンシップ情報の登録(報告書等)を行った。Sozo Passport の主要機能である「課題作成(教員)」「課題提出(学生)」の年間利用状況を整理したところ、学部・短大あわせて 13 科目(課題数

48)で同機能を使用して授業活用されたことがわかった。

- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理システム』について、プロジェクト情報登録やアカウント作成等の管理面で支援を行った。また、システムの利便性を向上させるための若干のインターフェース改修作業を行った。



図 3.3.3 スチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) 画面例
(左：学生のレポート提出ボックスと学修記録タイムライン、右：教員による課題確認画面)

(4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 本事業に関する対外的な広報、および、内部関係者向けのマニュアル揭示等の目的で設置した Web サイトについて、コンテンツ掲載等をはじめとする管理・運営を行った(図 3.3.4)。平成 26 年度については、計 73 件の本事業に関する記事を発信することができた(H24:60 件、H25:119 件)。
- サイトへの Web アクセス解析結果を図 3.3.5 および表 3.3.1 に示す。この結果から、年間を通して本事業サイトが参照されており、大学関係者のみならず、広く本学の取り組み(活動内容や教育手法等)を産業界・教育界に周知するひとつのツールとして効果的であったといえる。実際に、事業グループサイト(三重大学)や教育(就業力)関連の情報を整理しているポータルサイトから本事業の記事がリンクされ、そのサイトを経由した一定数のアクセスがあったことも確認された。



図 3.3.4 地域産業連携教育力改革プロジェクト Web サイト <http://project.sozo.ac.jp/>

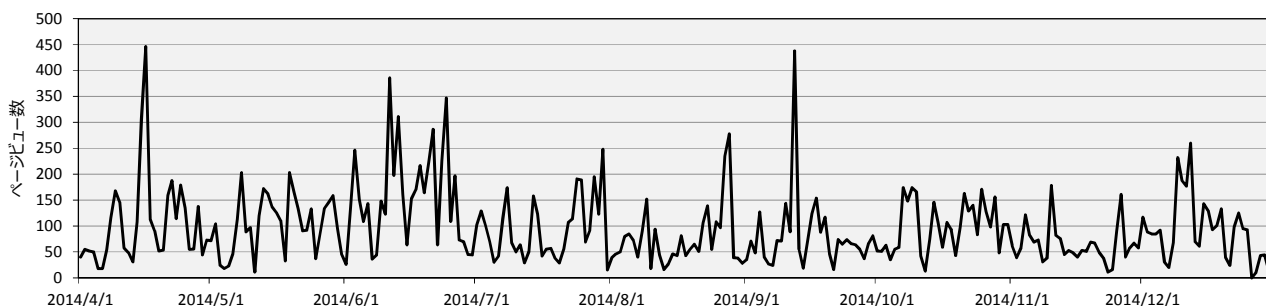


図 3.3.5 事業 Web サイトのページビュー数の推移
約 97 ページビュー／日（2014/4/1～2014/12/31）

表 3.3.1 事業 Web サイトアクセス状況

年度	ユーザー数	訪問数	ページビュー数	訪問別 ページビュー
H24 (2012/4/1 - 2013/3/31)	2,706	9,059	19,894	2.20
H25 (2013/4/1 - 2014/3/31)	4,141	12,676	34,553	2.73
H26 (2014/4/1 - 2014/12/31)	5,154	10,280	26,543	2.58

その他

- 事業最終年度に当たるため、教員によるこれまでの ICT システム活用状況を把握することを目的としたアンケートを実施した。（結果については 3 年間を通じた成果の中で説明）

3. 3 年間を通じた成果

本グループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 環境の整備および ICT 利活用推進を中心とした活動を行ってきた。3 年間の活動成果のうち、主要な事項について以下にまとめる。

(1) 学内 ICT 環境の整備・充実(設備等の維持や利便性向上の検討)

- 携帯情報端末の管理環境の整備
学生自身が iPad を管理できるよう、学内 PC 環境を整備した。D 棟 4 階・5 階、および、サポートセンターの PC を利用して、iPad のバックアップ等を行えるようにした。また、学生のアクティブな活動に支障を与えないよう、iPad を充電できる専用ロッカーも配置してサポートした。
- 無線 LAN 環境の充実
平成 23 年度末に無線 LAN 環境の充実化をはじめとする学内 ICT 環境の更新を行い、大学の一般教室・PC 教室のすべてにおいて携帯情報端末から無線 LAN 接続ができる環境を整えた。平成 24 年度以降、本事業期間中は、学内設備に対するシステムログ等の観察を通じて不具合発生状況を監視した。結果として、学生の活動に影響を与えるような大きな不具合の発生は確認されず、安定した無線 LAN 接続環境を提供できたといえる。
- ネットワーク(対外接続)環境の改善
iPad の配布により、学内ネットワークのクライアント数が倍増する結果となった。増加する学内からのインターネットトラフィックに適切に対応するため、本学情報システム部門(ネットワーク管理委員会、システム管理室)を中心に、インターネット接続回線の増速(最低保証帯域の改善)等の対応を行った。

3 年間の活動を通じて、学生・教職員における iPad 利用のための環境整備・充実化を実現できたといえる。

(2) 携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進

- 毎年、新入学生に対して入学後(6月)に iPad を貸与し、基本的な操作や管理方法に関する説明を行ってきた。同時に、スチューデントプロフィールシステム(Sozo Passport) および e ラーニングアプリ(Handbook) の導入と利用に関する説明も行った。これまでの活動を通じて、本事業に係る学部・学科の全学生に iPad を貸与する(所持させる)ことができた。
- 在学生全員が iPad を所持することにより、授業内で iPad や e ラーニングシステムを活用しやすい環境を構築できた。当初は教員による授業活用があまり進まなかったものの、操作法の習熟が進むにつれ、平成 26 年度には多数の教員が授業・演習で活用するようになった。また、コンテンツの蓄積や充実が進んだ。
- 就業力育成支援を目的としたプッシュ型の問題配信システムおよびアプリ(一問一答アプリ、Sozo Platz) の開発を行い、実際に学生に使用させた(図 3.3.6)。開発したシステムとアプリに関しては学会発表(平成 24 年度電気関係学会東海支部連合大会)を行い、外部の教育者から一定の評価を得ることができた。

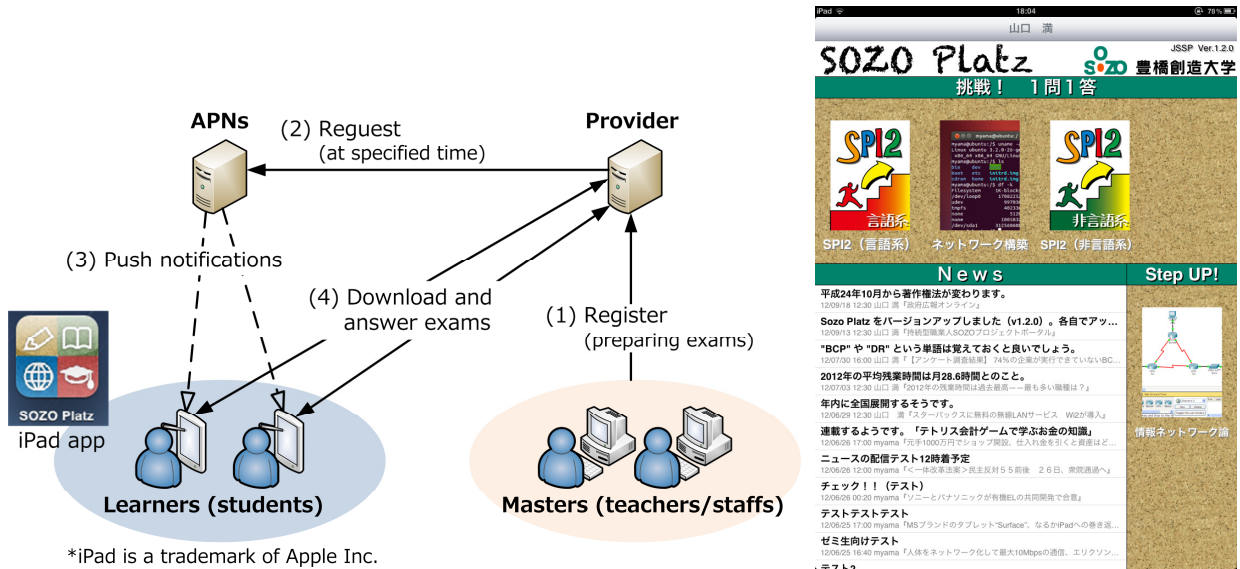


図 3.3.6 就業力育成のためのプッシュ型問題配信アプリ Sozo Platz (右: アプリ画面)

3 年間の活動を通じて、学生に対しては最新の ICT デバイスとそれを利用した学習環境を提供することができた。教員に対しては、ICT システムを利活用した「新しい教育手法」や「授業改善」などを検討する機会を提供することができた。

(3) 「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援

- 自己理解促進プログラムグループ・地域産業連携プロジェクトグループと連携して、本学独自の学修ポートフォリオシステム(スチューデントプロフィールシステム) Sozo Passport を開発し、実際に活用した。本システムは、ポートフォリオシステムとして、PROG アセスメント結果、社会人基礎力評価シート、面接記録ビデオ、インターンシップ情報などを蓄積し、Web を通じて容易に確認することができるものである。また、学生の学修成果(課題レポート)を蓄積・参照することを可能とし、学生が自分の学修履歴を振り返られるようにしている。本システムについては、利用している教員からは比較的良い評価を得ている。学生に対して「課題の提出場所」という認識を周知させることができ、頻繁にポートフォリオシステムにアクセスさせることに成功している。
- 地域産業連携プロジェクトグループで利用する『プロジェクト管理システム』について、開発(改修)および運用支援を行った。当初はアプリ(iOS)の形で利用していたものを、環境に依存しない形(Web ベース)に修正した(図 3.3.7)。プロジェクトによっては本システムを利用せずに運営していたところも存在したが、プロジェクト活動の支援という機能を果たすことができたと考えている。



図 3.3.7 プロジェクト管理システム (Web) (左：トップ、右：議事録管理画面)

3年間の活動を通じて、システム開発・運用面から他事業グループの活動・運営支援という目的は達成できたといえる。Sozo Passport についてはまだその機能を十分に活かしておらず、言い換えれば今後の可能性を大いに期待できる仕組みであるため、事業終了後も継続して一層の有益な活用を検討する。

(4) 事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

- 本事業は、中部圏 23 大学と連携し、教育方法や産業ニーズ把握方法についての情報共有を図ることを目的としている。これに対し、本学の活動状況を逐次対外的に示して共有するため、独自に Web サイトの構築を行った。Web サイトの構築にあたっては、事業グループごとに記事を参照したり、プロジェクトごとに活動を参照したり、等、閲覧者にとって利用しやすいように CMS を活用して整備した。

3年間の活動を通じて、前出の図 3.3.5 および表 3.1 からも明らかなどおり、本サイトにより学内関係者のみならず学外の人にも情報を提供することができ、目的を果たしたと評価できる。

＊ 『ICT システム利用状況に関するアンケート』 集計結果

学内 ICT システム・サービスに関して、現状を把握し、より一層の機能向上や改善を図るとともに、今後の運営方針決定の参考とするため、教員対象のアンケートを行った（実施日：平成 26 年 8 月 6 日（水）、回答数 20）。集計結果の抜粋を図 3.16 に示す。

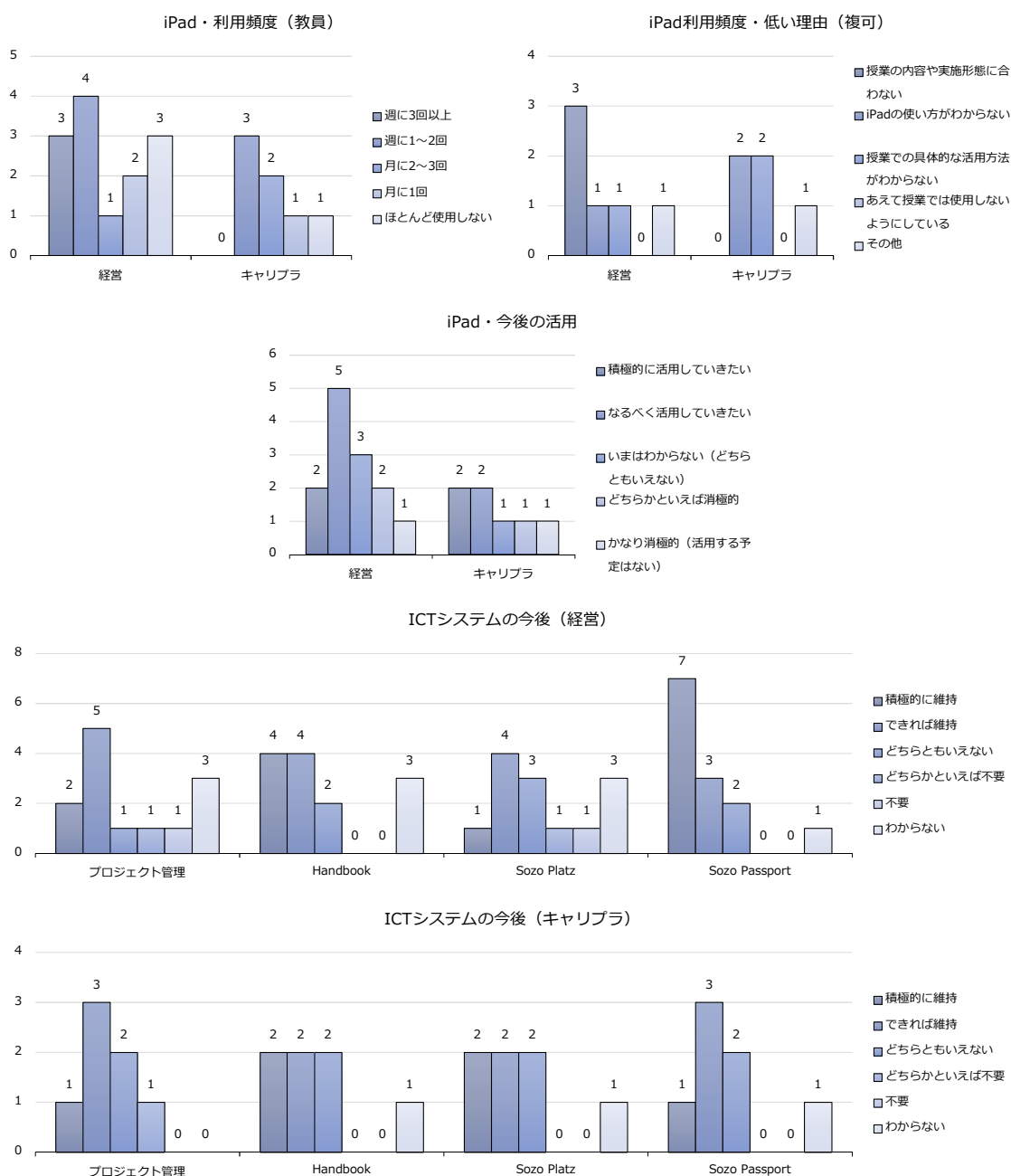


図 3.3.8 『ICT システム利用状況に関するアンケート』 結果 （一部抜粋）

アンケート結果から、次の点が今後の検討課題として挙げられる。

- iPad を活用したいという意思をもつ教員が多いが、具体的な活用方法を見出せない状況で悩んでいる様子が見えがえる。教員間での連携(授業での活用など、先行して試行している教員からの助言、意見交換など)が重要であり、そのための取り組みが必要である。
- ICT システムの有益性について多数の教員に理解されている様子であるため、今後も利用者に優しいシステムの構築に取り組むとともに、活用事例を蓄積・共有していくことが課題といえる。

4. 今後の課題

(1) 継続して学内 ICT 環境の管理・監視を行い、利用者の利便性を損なわないよう適切な環境を維持できるよう努める。

(2) 新たに本学に入学する学生に対して従来同様に iPad を貸与し、全員が iPad を所持し学習に利用できるよう準備する。また、そのための説明会の開催やマニュアル作成等を随時行う。引き続き eラーニングシステムの利用促進策について検討する。

(3) 関係事業グループと連携してスチューデントプロフィールシステム (Sozo Passport) をはじめとした各 ICT システムの有益な使い方に関して議論していく。随時利用者から意見を収集して機能改善を行い、より学生指導に有益なシステムに進化させる。

(4) これまでの事業をまとめた情報 (成果報告書) などを Web サイトに整理して掲載し、連携大学向け情報共有および一般の学外向けの情報公開を継続する。

(2) 大学コミュニティグループ

1. グループ事業の取り組み

本学では産業界ニーズに対応した教育改革・充実体制整備事業「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の後方支援を目的として、大学、短大、キャリアセンターや各同窓会が連携した形のコミュニティグループ活動を補助金対象外ではあるが独自に行ってきた。具体的には、卒業生や企業へのアンケート、企業訪問等を通じて、産業界からのニーズ、問題点を把握して今後の大学教育改革にフィードバックしていくことを目指した。

《主な行事》

平成 24 年～25 年度 年間活動内容

(※3. 3年間を通した成果で詳細報告)

時期	報告	活動内容	主体
2月	①	本事業内容に対する企業アンケート（平成24年度）	大・短
6月～3月	②	卒業生就職先企業訪問	大・短
8月	③	創造同窓会総会アンケート実施	大
10月	④	創造祭同窓会ブース開設 創造祭へ来た卒業生にアンケート調査を実施	大
10月	⑤	未内定者向け学内企業説明会、企業アンケート実施、OB 人事担当者参加	大・短
11・12月	⑥	短大 OG 交流実施（先輩の就職体験報告会に OG 参加）	短
2月	⑤	学内企業説明会 企業アンケート実施	大・短
2月	⑦	卒業生就業状況調査書（卒業後3年間）発送・回収	大・短
3月	⑦	卒業生就業状況調査未回答者へ再発送	大・短
4月～7月	⑦	卒業生就業状況調査票（前年度分）回収 未回答者へ追跡調査実施（電話確認）集計、分析	大・短

2. 活動成果（平成 26 年度）

事業最終となる今年度の各活動を報告する。

平成 26 年度の取り組み

月 日	報告	活動内容	主体
4月～7月	①	平成 22、23、24 年 3 月卒業生就業状況調査集計 未回答者へ追跡調査実施（電話確認）・分析	大・短
7月～12月	②	卒業生就職先企業訪問 求人開拓 在学生への教育指導依頼	大・短
10/25-26	③	創造祭同窓会ブース開設 卒業生にアンケート調査を実施	学
10/27（月）	④	企業アンケート実施（就職未内定者対象学内合同企業説明会）	大・短
1月	①	就業状況調査書発送（平成 24、25、26 年 3 月卒業生）	大・短
3月予定	①	就業状況調査未回答者再発送実施	大・短

■ ①卒業生就業状況調査実施

本年も卒業3年以内の卒業生に調査を実施した。結果については、3年間を通した成果にまとめて報告することとする。また、本年度発送（平成 27 年 1 月）分については、集計が次年度にまたがるため、次期の報告とする。今後この調査は全学的に拡大し、キャリアセンターの継続事業とする。

■ ②卒業生就職先企業訪問 (7月~12月)

本年度も 34 件の卒業生企業を訪問して、卒業生の元気に笑顔で働く姿を直接見ることができた。



企業からの評価は『とてもよく頑張っている。』が大多数であったが、なかには『数日勤務してすぐ退職した。』『今の学生の多くは、ストレスに弱く、家などから自立できていない。』や『現場でないと分からないことが沢山ある。就職してからが勉強である。』という意見もあった。急な訪問で卒業生をびっくりさせる場面もあったが、なかには、『とても大変で、学んだ事だけではないことが就職して分かった。』と答えてくれた卒業生もいた。

■ ③創造祭同窓会ブースアンケート (10月25日-26日)

今年も大学祭で同窓会ブースを利用した卒業生に、就業についてのアンケートを実施した。結果については3年間を通じた成果で報告する。

■ ④企業アンケート実施 (10月27日)

就職未内定者を対象とした学内合同企業説明会を実施した。そこでの企業からの本学学生の印象について以下のものであった。(回答 24 社)

- ・真面目そうな学生さんが多いと感じた。(IT系)・やや消極的に感じた。(運送業)
- ・真面目で大人しい人が多い印象を受けた。(サービス小売)
- ・元気がない、積極性がない。(介護)(車両サービス) ・挨拶をしっかりと頂きたい。(介護)
- ・比較的おとなしい。(給食) ・素直で真面目、ややおとなしい。(警備)(ドラッグ)
- ・声が小さい、元気がない。(ディーラー) ・真面目に落ち着いて聞いて頂けた。(食品卸)
- ・真面目な学生が多いと感じた。(ディーラー) ・のんびりしたイメージ(ディーラー)
- ・落ち着いている印象。(設計) ・いろいろ悩みながら就活しているようであった。(飲食)
- ・女子学生からは活発な意見を頂いた。(衣料小売)
- ・短大の学生の方が活発そうな印象。(建築)・熱心に就活していたようであった。(飲食)
- ・明るくハキハキとした人と、おとなしい人に大きく分かれる。(建材卸)
- ・活発で元気を感じる生徒が当社に興味を持って頂いた。(印刷)
- ・メモを取る学生と取らない学生がいた、やはりとったほうが印象はよい。(物流)
- ・この時期でまだ、自分の進みたい道が決まっていないようだ。(宿泊・飲食)
- ・しっかりと質問もされ、コミュニケーションが教育されていると感じた。(介護)
- ・前向きに取り組まれている学生が多く感じられた。(介護)

10月を過ぎて、内定が取れない学生を対象とした説明会であったこともあり、大人しい(積極性がない、真面目)、元気がないという企業からの意見からも、内定を取れないポイントとなっていると思われる。卒業に向けて、ここから如何にモチベーションを上げていくかが課題であり、ゼミ教員とともに対応を行っていく。



図 3.3.9 学内合同企業説明会

3. 3年間を通じた成果（平成24年度～平成26年度）

■ ①平成24年度 本事業内容に対する企業アンケート実施及び最近の若者動向

本学「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の内容について、平成25年2月7日の学内企業説明会会場においてこの事業のスタートとしての率直な意見を求めるためにアンケートを実施した。参加した企業30社からの主なコメントを記載する。

- ・この事業については大変よい取り組みである、特にメンタル面での取り組み（メンタルタフネス講座）は、先進的であると思う。
- ・学生さんが自ら立ち上げ運営までされること（プロジェクト活動）は、とてもよい学習になると思う。
- ・大学の講義を聞くだけでは学べないことを肌で感じられるよい機会である。
- ・最近の学生に不足している点は、個性、コミュニケーション能力、積極性、忍耐強さ。専門知識にこだわらず、幅広い知識、応用力が必要である。
- ・10年程前と比較すると、「どんどん出世したい」というガッツのある方が少なくなった。サラリーマン、社会人に対して夢を持てるようにすることが必要と考える。
- ・本学学生に不足しているものとして、明るさ、元気さ（特に男性）、目的意識。
- ・面倒見がよい学校が多いが、ある程度「不自由さ」を経験することで、自ら動き発見する力が養われるのではないかと考える。わざわざ大人が手助けしなくても社会を堂々と渡り歩いて行ける強さを身に着けられるような教育をお願いしたい。

この結果から、企業が望む人材として『ガッツのある人材』『めげない精神力』『周りに配慮できる人材』などを求めており、おおむね本事業を評価したものとする。一部の企業の中には本学出身の人事

担当者の参加もあった。本学学生が目線に立った、現実的で身近な説明は親近感もあり学生自身に意義のあるものであった。

■ ②卒業生就職先企業訪問 (7月~12月)

年度	平成 26 年度	平成 25 年度	平成 24 年度
件数	34 社 (学 17・短 17)	55 社 (学 15・短 40)	57 社 (学 23・短 34)

前年度卒業生の就職先を中心とした企業訪問を実施し、採用した側の思惑や意見・配慮等をできるだけ詳細な部分まで聴取した。また、訪問することにより卒業生の表情から就労状況や職場での人間関係などで苦悩する表情には励ましの助言を行うこともできた。実施したことで早期離職に至る防波堤となり、フォローアップの効果もあったと感じている。

短期大学部を中心に以下の事を報告する。

どんな人材が望まれているのか企業へのヒアリング

- ・新しいことにチャレンジする勇氣・バイタリティが欲しい。
- ・思いやりのある、やさしい人材が欲しい。(病院)
- ・コツコツと作業する辛抱強い人材。
- ・積極的に声を出して欲しい。
- ・元気で、明るいこと。人柄がよいこと。性格がよく、素直なこと。
- ・挨拶ができ、他人と会話ができて、まわりに興味が湧くこと。
- ・5年間かけて1人前にするつもりだ。厳しいがしがみついてきて欲しい。(会計事務所)
- ・本当に販売が好きな学生、美味しいと思わせる明るいタイプが欲しい。(製造小売)

直面している現状

- ・充実している商業高校の長期インターンシップとの差。
- ・メンタル面が弱い。「働くということ」に対して甘い考えがあること。
- ・「頭」と「体」のバランスが要求されている。考えていることをすぐ行動に移せる。口先で言うだけでなく、実際に行動できる。相手の言うことを理解し(場合によっては先取りし)、行動できる。
- ・採用試験の際、資格はあってもよいが、なくても支障がない。
- ・就職してから社内研修など、活動に積極性が見られない場合がある。
- ・自己肯定感の弱い卒業生がいる。高校生より自分の能力不足を自覚し、気弱になる。
- ・医療事務職は、基本的に欠員補充なので、計画的な採用が少ない。
- ・一度、本学の卒業生の採用で懲りると、戻るまでに時間がかかる。
- ・企業は、「大人の対応」をするので、我々に対して直接文句を言うことは少なく、無言で本学から離れ、求人票を送ってこなくなる。
- ・女子学生においては事務志望が多いが、実際には事務職採用企業は少なく、営業や販売、介護などの専門職で働ける人材を望んでいる。

上記が、卒業生の就職先訪問から得られた意見の一例である。社会の厳しさ、現状をどのように学生に伝えていくか、教育していくか。また、これからの学生に必要なグローバルな視点や自分の考えを人に伝える力(コミュニケーション力)を伸ばすことなど、一人一人の学生を見つめながら指導すること

が重要と考える。今後もこれらを課題として取り組み、さらに学内で情報共有を推し進め、今後の教育の場に役立てていくことが必要である。

■ ③創造同窓会総会アンケート調査

平成 25 年 8 月 3 日（土）2 年に一度の同窓会総会にて、卒業生にアンケートを実施した。

実施対象者：本学学部卒業生 50 名 有効回答者数： 29 名 （20 代から 30 代）

1) 現在の勤務先の満足度

・大変満足 2 名 ・満足 15 名 ・普通 6 名 ・多少不満 2 名 ・不満 2 名 他

2) 勤務先のよいところを記入して下さい

<業務・企業について> ・安定している ・顧客訪問が多く、様々な個性に触れることが多い

・人の役に立つ仕事である ・モノ作り ・ゼロからの商品企画、展開が魅力

・最先端の技術にふれられる

<労働環境・待遇等> ・県外転勤がない ・とても仲が良く働きやすい ・給与

・休暇 ・休日を拘束されない ・自分の予定に合わせて勤務できる

・長期転勤がない ・福利厚生がいい ・人の事を大切にできること

・1 人 1 人の役割に対する責任が大きく、やりがいがある

・自分のものさしを拡大でき、視野が広がり勉強になる

3) 勤務先の問題があると思うところを記入して下さい（自由記述）

<業務・企業について> ・自由すぎる ・先が見えない ・業界がいつまで続くのか不安

・無意味な業務が多い ・現場の仕事、苦労をトップが知らない

・利用者の思いに応えることができず、自立や生活機能動作の向上に目的を置きがち

・月末、大型連休前後の仕事量が多い

・若い人がすぐ辞め、年配者ばかりの逆ピラミッド

<労働環境・待遇等> ・多忙 ・報告が多い ・社会的な雰囲気が薄い

・出世しないとモチベーションが低下する

・サービス残業が多い ・利益が少なく賞与が少ない

4) 平均の残業時間について 1 日平均の残業時間数 回答者 23 名

・なし 4 名 ・0.5～1.5 時間 11 名 ・2～3 時間 6 名 ・3～4 時間 2 名

5) 残業代は支給されますか？ 回答 17 名

・支給される 12 名 ・支給されない 5 名

6) 今の勤務先を後輩に勧めますか？

・はい 12 名 ・いいえ 8 名 ・分からない 6 名 ・未記入 3 名

7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか？

・はい 9 名 ・いいえ 9 名 ・条件が合えば 6 名 ・未記入 6 名

8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか？

・給与面 8 名 ・人間関係 18 名 ・精神力 12 名 ・その他 3 名 ・未記入 4 名

（意見）・給与面、人間関係、精神力のうち 2 つは必要、2 つ欠けたら難しい

9) その他意見 ・人と人との関わりが人間の世の全てと知った。教養ももちろん必要だが、まず人として豊かな人材育成が必要かと考える。豊橋創造大学からも人材を出していけるよう人間味ある教育を今後ともお願いしたい。

1 0) 転職をした理由 (転職者のみ)

- ・会社に将来性がないと思った 6 名
- ・労働時間が長すぎた (不規則であった) 3 名
- ・給与水準が低かった 3 名
- ・人間関係が悪かった 2 名
- ・キャリアアップのため 2 名
- 他

1 1) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか

- ・はい 4 名
- ・いいえ 9 名
- ・未回答 16 名

学部同窓会総会におけるアンケートは、20 代から 30 代の広範な年代に対する調査となるので、当然、卒業後 3 年間の結果とは異なると思われる。今回で同窓会総会時に実施するアンケートは 2 回目になるが、出席する卒業生は正規職員で働いている人が多く、勤務先の満足度も「大変満足」・「満足」が 17 名と約 57%の卒業生が満足と答えている。また、回答者 29 名のうち 9 名が転職経験者で約 3 割となっている。学部 1 期生が卒業してから 15 年が経過したことから見えてきたことは、同窓会に出席する卒業生は現状に不満があっても最初に就職したところで頑張っており、約 7 割が定着している結果となっている。



図 3.3.10 同窓会総会アンケート実施



図 3.3.11 創造祭卒業生同窓会ブースアンケート実施

■ ④創造祭学部卒業生同窓会ブースにおけるアンケート調査

『創造祭』(学園祭)の交流の場として学部卒業生を対象とした同窓会ブースを開設した。

実施日：平成 24 年～26 年 10 月創造祭開催日 2 日間

年度	平成 26 年	平成 25 年	平成 24 年
実施日 (土・日)	10/25、26	10/26、27	10/27、28
有効回答数	38	18	38

会 場：豊橋創造大学 B22 教室

勤務先に関する就職のアンケートを実施したが、調査項目の統一された 25 年、26 年分をまとめて報告する。有効回答者は 56 名で概ね勤務 5 年から 10 年程の卒業生が多い。

- 1) 今の仕事の満足度は、『満足・普通』で 43 名。『不満・多少不満』で 12 名であった。
- 2) 勤務先の『良いところ』は、安定している、人の役に立つ、尊敬できる先輩や上司が多い、明るく働きやすいが多い。
- 3) 『悪いところ』では、多忙・サービス残業、先が見えない、給与が低い、時間が不規則 (仕事が突然増える) となっており、5 年以上働いた卒業生が多く、今回の調査では人間関係が問題というウエイトは、新人入社 3 年以内の場合よりも低いように思われた。

- 4) 平均の残業時間について 1日平均の残業時間数 回答者 11名
 ・なし 8名 ・0.5～1.5時間 23名 ・2～3時間 13名 ・3～4時間 8名
- 5) 残業代は支給されますか? 回答 16名
 ・支給される 30名 ・支給されない 16名 ・役職になったので出ない 3名
- 6) 今の勤務先を後輩に勧めますか? 回答 53名
 ・はい 10名 ・いいえ 17名 ・分からない 26名
- 7) 今後、大学から授業や就職ガイダンスへの協力依頼があった場合、可能ですか?
 ・はい 10名 ・日程が合えば 14名
- 8) あなたは働き続けるために必要な条件は何だと思いますか?
 ・人間関係 36名 ・精神力 26名 ・給与面 20名 ・他 4名

人間関係がトップで 36名だが、問3)の『今の会社の悪いところ』には入っていないことから、人間関係は重要であるが、今の会社ではある程度 問2)の尊敬できる先輩や上司が多いのように満たされているものと思われる。

- 9) 転職者の理由 ・会社に将来性がないと思った 7名 ・長時間労働（不規則であった） 6名
 ・給与水準が低かった 6名 ・人間関係が悪かった 4名
 ・家族や私的な事情（結婚を含む） 3名 ・仕事内容が予想と違っていた 3名
 ・キャリアアップのため 2名
- 10) 在学生から就職相談のある場合は電話をしてもよいでしょうか
 ・はい 5名

同窓会ブースに出席してアンケート回答した卒業生は前項（③創造同窓会総会アンケート調査）と同様に正規職員で働いている人が多く、勤務先の満足度も「大変満足」「満足」が 43名と 8割の卒業生が満足と答えている。また、回答者 56名のうち 12名が転職経験者と約 2割が転職を経験しているが、同窓会ブースに出席する卒業生は多少なりとも現状に不満があっても最初に就職したところで頑張っており、約 8割が定着している結果となった。

働き続けるために必要な条件は、1位に人間関係、2位に精神力、そして 3位が給与面であり、前項の③創造同窓会総会アンケート調査も同様な結果となっている。よって本学のこの事業で養成しようとしている『メンタルタフネス』は重要だと考える。また、OB・OGとして母校への協力などを前向きに考えてくれている卒業生も多く、卒業生を招聘する授業や就職ガイダンスへの協力賛同者が 10名ほど発掘でき、卒業生からの求人情報も得ることができ収穫となった。

また、給与面も 3位に入っていることから、初任給だけではなくこれからは将来的な年収にも関心を持つ時期になるかもしれない。この様々な事を在学生に指導していかなければならない。次年度以降も引き続きアンケートを実施し、卒業生の動向を見ていきたい。

■ ⑤学内企業説明会 企業アンケート実施

秋の学内企業説明会（平成 24年 10月 29日開催 34社）、春の『三河地区企業学内研究セミナー』（平成 25年 2月 9日）それぞれ、3人の本学 OB 人事担当者が参加した。

秋の『学内合同就職説明会（平成 25年 10月 28日 32社）』、春の『三河地区企業学内研究セミナー（平成 26年 2月 8日 32社参加）』、秋の『学内合同就職説明会（平成 26年 10月 27日 31社）』の各説明会において、本学学生の印象について、参加企業の皆様に簡単なアンケートを実施した。

【秋の『学内合同就職説明会（平成 25 年 10 月 28 日）』】

- ・積極的でよい 8 社 ・真面目な学生が多い 2 社
- ・明るく疑問にもった事をそのままにせず質問するという社会人として必要な要素を兼ね備えている子が多いと感じた。 4 社
- ・熱心に聴いている姿に好感が持てた。 2 社 ・おとなしい印象だった 3 社（営業職）。
- ・何がしたいのか、そのためにどのように就活を行っていけばよいか手探り状態。
- ・人柄がよく、素直でおっとりしている印象だった。 2 社
- ・会社の予備知識がもう少しあるとよい。 ・礼儀正しい。
- ・地元学生が多い。 ・あまり積極的ではない。（介護）
- ・他校にも言えるが、会場入り口でなかなか入ろうとしない学生が気になった。
- ・学園祭実行委員を経験された積極的な生徒が参加してもらえてよかった。
- ・元気のある学生とない学生がいたように感じられた。
- ・どんな仕事をしたいのか、的を絞れていない学生が多く、この時期に的が絞れていないと難しいと思う。

【春の『三河地区企業学内研究セミナー（平成 26 年 2 月 8 日）』】

- ・真面目な方が多い。 13 社 ・おとなしい学生。 7 社 ・反応がない。 ・内向的。 ・礼儀正しい。
- ・友達と固まって企業ブースを回っている学生がいる。 ・質問が少ない。
- ・就職するのはあくまで自分である、もっと個を積極的にアピールして欲しい。
- ・笑顔が良い。 2 社 ・明るく積極的な学生さんが多い。 3 社
- ・話を聞く姿勢や質問に思っている以上に鍛えられている感じがした。 ・熱心な学生。 2 社
- ・コミュニケーションがしっかりとれる学生が多い。
- ・まだこれから職種を決めるという感じの学生が多い。

という回答であった。特に気になるのが、本学学生は、『真面目でおとなしい』という企業からの指摘で積極性、社会人基礎力で言う『前に踏み出す力（主体性）』が特に不足しているように考えられる。



図 3.3.12 学内企業説明会 10 月



図 3.3.13 学内企業説明会 2 月

■ ⑥短大 OG との交流実施（先輩の就職体験報告会に OG 参加）

『短大 OG との交流の場』として短大キャリアプランニング科 1 年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を実施した。

実施日：平成25年12月5日（木）4時限

会場：豊橋創造大学 B14 教室 在学生参加：55名

OG 講師：医療法人 光生会 天野磨美子さん（平成19年3月キャリアプランニング科卒業生）

1年生を対象とした「先輩の就職体験報告会」を実施し、卒業予定者6名による内定報告に続き OG による講演を実施した。OG からは実際の医療事務の仕事についての話や社会人になって大変だったこと、学生時代に学んでいた方がよいことなど現役の後輩たちへアドバイスをいただいた。講演後、在学生との交流の場を設け、話を聞いた在学生からは「これを機に今の自分の生活を改め直さなければならぬと痛感することができた」「在学中にしっかりとビジネスマナーを身に付けておきたい」など現役の学生たちにとって貴重な場となった。



図 3.3.14 先輩の就職体験報告会

■ ⑦卒業生就業状況調査

過去3年間の卒業生に対して、就業状況を把握するアンケートを毎年実施している。アンケートは離職率を集計するだけでなく、離職に至った理由等を分析し、在学生の就職指導や各種対策講座へも反映し、安易な離職を防ぐために役立てている。

また、このアンケートでは卒業生との大学コミュニティーを活用した社会人基礎教育を展開させ、在学生が交流できる仕組み作りに役立てることを視野に入れた項目も設けており、卒業後の早期離職を防ぐことに繋げている。

課題としては、アンケートの回収率の問題がある。返信ハガキにおける1回目の回答率は40%であった。再発送を行っても51%に留まり、その後も未回答の卒業生宅へ個別に夜間や休日電話を入れて最終的に8割から9割の回答を得たが、業務量の負担が大きくなっている。また、郵送料もかかるためコストの問題も考える必要がある。

【調査結果】学部127名 短期大学部194名の調査

□大学

調査年	3年以内の離職理由 (上位順)
平成26年	・人間関係が悪かった ・家族や私的な事情 ・キャリアアップのため
平成25年	・家族私的な事情 ・長時間労働 ・給与水準が低かった
平成24年	・長時間労働 ・人間関係が悪かった ・期限付きの採用であった

□短大

調査年	3年以内の離職理由 (上位順)
平成26年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・適性に疑問を持った
平成25年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・適性に疑問を持った
平成24年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・仕事内容が予想と違った

□学部+短大3年間調査合計

調査年	3年以内の離職理由 (上位順)
平成24年～26年	・人間関係が悪かった ・長時間労働 ・適性に疑問を持った

以上のような結果であった。若者の職場ではトータル的に人間関係の難しさ、長時間労働の問題があるような結果だ。男子学生の多い学部では、長時間労働、人間関係の問題が多いように見える。一方、卒業生の全員が女子である短期大学部では、特に医療事務への卒業生も多く、人間関係が大変重要で、同僚や先輩、管理者とのコミュニケーションは重要な課題といえよう。長時間労働については慢性化している職場があったり、企業側の環境問題であったり、新人としての立場では改善できない要素もあると思われる。また、個人レベルではストレス耐性メンタルタフネス、コミュニケーション力の問題があるように感じる、これは最近の若者に共通の課題といえるのかもしれない。

どんな仕事でも3年間は我慢して従事しないと仕事の本当の面白さ、充実感、達成感は味わえないと言われているが、早期離職は、本人にとっても、企業にとってもデメリットとなるので、今後もこの調査は、卒業生向け、企業向けを含め全学的に継続性を持った調査をしていく方針である。

4. 今後の課題

本活動は「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の後方支援を行ってきたが、本学学生の長所、短所をしっかりと分析し、教育改善を行うために学部、短大へカリキュラムの提案も含め、結果を積極的にフィードバックしていきたい。

また、卒業生アンケート、離職調査、企業訪問は、今後も継続して行っていくが、従来の経営学部の他に保健医療学部理学療法学科、看護学科、短期大学部ではキャリアプランニング学科の他に幼児教育・保育科を加えて、全学的な取り組みとして行っていきたい。今後も定期的に卒業生からの要望や企業からのニーズをくみ上げ、教育改善に活かしていくような後方支援活動をキャリアセンターが行っていく必要がある。

全体の総括

4

4. 全体の総括

本学では、ディプロマポリシーで定める就業力育成を目指し、社会人基礎力を養成できる教育システムの構築を行った。また、人材養成に関する産業界ニーズを把握する体制整備を行った。そこで、3つの機能を実行するグループを以下のように組織化した。

(I) 4つの教育事業

- (1) メンタルタフネス講座
- (2) 自己理解促進プログラム
- (3) 地域企業連携プロジェクト
- (4) 三者間協働によるインターンシップ

(II) 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備

- (1) 社会人基礎力育成体制の整備
 - ・教育効果測定・指導方法検討 WG
 - ・教育力向上研修会 (3回)
- (2) 他大学との連携事業による教育方法の改善

(III) 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援

- (1) ICT環境整備による学生のICT能力育成と各事業内省環境の整備
- (2) 大学コミュニティ形成による学生支援

これらの3年間を通じた成果を以下に記載する。

1. 4つの教育事業の成果

(1) メンタルタフネス講座

メンタルタフネス講座では、ストレス耐性や我慢の欠如などメンタルタフネスの不足に対応するため、セルフモチベーション、リーダーシップ、目標設定・目標達成などの理論的背景と実践的演習を組み合わせ、学生自身の経験知を高める教育プログラムであるメンタルタフネス育成講座を実施した。平成24年度は各回が独立したプログラムであったが、平成25年度からは「メンタルタフネス講座(全3回)」を2年生3月「第1回ベーシック講座」、3年生5月「第2回セルフモチベーション講座」、7月「第3回メンタルタフネスを活かすビジネス研究講座」の計3回の講座とし、さらに後述する「自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」と連動させて、全体としては1科目15コマ構成(メンタルタフネス育成講座3コマ3回、自己理解促進講座3コマ2日)の年間を通じたプログラムとした。

各回講座の事前・事後の自己評価およびPROGの結果から、社会人基礎力について幾つかの項目について押し上げ効果が認められる。なお、プログラムの内製化を進めた結果、平成26年度末以降のメンタルタフネス講座については、学内常勤教員で実施する体制を構築できた。

(2) 自己理解促進プログラム

自己理解促進プログラムでは、アクティブラーニングによる学生の主体性・創造性を育成し、自己理解を深める活動として、学生が採用面接官を擬似体験するバーチャル人事体験を行う「自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を実施した。このプログラムの大きな特徴は、学生が面接者と面接官の両者、特に通常経験することの出来ない面接官の役割をオブザーバーとして体験することによって、企業の人事の視点からどのような学生が求められ、何が評価の対象となるのかについて、企業側のニーズの理解と、自己の職業観を理解することが可能となる事である。言い換えると、学生に、面接を受ける学生の立場と、企業側の面接担当者の立場の両者を体験させ、企業側のニーズを理解させ、自己理解を深め、自らの職業観を形成させる。この体験により、学生は、他学生の良い点や改善点を自分の立場に照らし合わせて学んでいくことになる。

平成24年度の集団面接および個人面接の面接ワークを体験する教員向け講習会の実施を踏まえて、平成25・26年度は2日間にわたり学生向けの「自己理解促進のための模擬面接講座(自己理解促進講座)」を実施した。また、「メンタルタフネス講座(全3回)」と「自己理解促進のための模擬面接

講座（自己理解促進講座）」を連動させて、全体としては1科目15コマ構成（メンタルタフネス育成講座3コマ3回、利己理解促進講座3コマ2日）の年間を通じたプログラムとした。

受講前後の学生の成長度を把握することを目的に、PROGを導入した。受験後に解説会を行い、自らが持つ現時点でのジェネリックスキルを理解するとともに、さらなる成長に繋げる方法を探った。

自己理解促進講座の事前・事後の自己評価およびPROGの結果から、社会人基礎力に関するいくつかの項目について押し上げ効果が認められることより、メンタルタフネス育成講座同様、自己理解促進講座を通して自己を内省することによって社会人基礎力の養成に効果があると言える。

なお、自己理解促進講座における模擬面接ビデオデータは各自が参照できるようになっており、学生個々が後日実施される個別の就職指導時に参照し、振り返りを行うことが可能となっている。

（3）地域企業連携プロジェクト

地域産業界と連携したプロジェクトとして平成24年度は11テーマ、平成25年度は8テーマ、平成26年度は8テーマのプロジェクト活動を計画・実施した。各プロジェクトの活動を通して、学生は主体的、自律的、協動的にグループで行動し、テーマの決定、行動計画、作業の実施、進捗管理を行った。このようなグループ活動の経験を積むとともに、必要な能力や行動について認識を深めた。

一連のプロジェクト活動を通じて、社会人基礎力を育むことが可能であることがわかった。特に、平成25年度のPROGと社会人基礎力の評価結果から、PROGを客観的評価、社会人基礎力評価シートを主観的評価として変化をみたところ、PROGで「自信創出力」「計画立案力」「実践力」で高い伸びがあり、社会人基礎力評価シートで「主体性」「実行力」「計画力」で向上傾向がみられた。主観的・客観的評価のどちらも類似した項目が向上したことより、プロジェクト活動を行うことで、自信を持ち、計画を立てて、自ら行動できる能力が育まれると考えられる。

（4）3者間協働インターンシップ

本事業を通して、学生の社会人基礎力に対する産業界ニーズを把握し、インターンシップの事前・事後指導を充実させることによりインターンシップの深化（主体性・創造性の育成）に努めてきた。

産業界ニーズの把握では、座談会を通して学生全般に対する評価の把握に努めた。その結果、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」については概ね高い評価を得た一方、「主体性」、「実行力」、「課題発見力」には改善が必要との評価を得た。また、社会人基礎力評価シートを通して、学生個々が不足していると思われる力の把握を行った。

これらの評価結果を踏まえて、学生指導の改善・充実に努めた。

事前指導では、多様化するインターンシップの内容理解を進めるために、学内の教職員ならびに外部講師による説明会を開催するとともに、インターンシップの事例紹介やグループワークにより、インターンシップへの参加目的の明確化および実習先企業の事業内容の理解の深化に努めた。

また、事後指導では実習評価記入票のコメントを反映させながら、学生個々のインターンシップの振り返りを実施し、その内容を学生は報告会で発表するとともに、報告書としてまとめた。

これらの取り組みの結果、報告書に対する評価は5段階評価で平均3.8という評価を得た。また、社会人基礎力評価シートによる評価では、平成25年度に改善が必要とされていた「主体性」について、平成26年度では高い評価を得ている学生が多く見られるようになった。一方で、「計画力」、「創造力」については引き続き強化を望む評価が見られた。

以上のように、本事業を通して、産業界のニーズを把握してインターンシップの充実を図り、社会人基礎力の向上において一定の成果を上げることができた。

2. 教育体制整備・産業ニーズ把握体制の整備の成果

平成24年度は、連携事業推進グループの補助事業全体における役割を明確化した。その役割に基づいて、学内の成果および失敗を取りまとめ連携大学に報告するとともに、他大学の状況の報告を受けて学内事業の考察を進めた。連携FDや中部圏産業ニーズ把握会議などの事業に専任教員が高い割合で参加して、事業目的やその実施意義や方法についての認識を深めた。また、補助事業で展開する教育プログラムのみならず、他科目への展開方法や社会人基礎力の評価方法の検討を始めることができた。さらに、社会人基礎力の評価については、プロジェクト活動やインターンシップなど学生の活動にもとづいて評価する仕組みと学生にフィードバックする方策を検討した。これらの事業実施内容

を大学教育改革フォーラム in 東海 2013 で発表報告した。

平成 25 年度は、育成すべき資質の評価の時期を整理し、その評価結果を総合的にどのように活用するかについて検討した。また、学生が自らの状況を理解するために評価内容について理解を深め自省できるように、評価についての説明会や教員との面談機会を設けた。自らの行動計画について考察する機会も設定し、自己理解を弛緩できる体制を形成した。

複数実施する評価結果に基づいて教育効果の評価や次年度への活用を検討するために、教育効果測定・指導方法WG開催するとともに、教員の指導力向上のために3回の教育力向上研修会を開催した。さらに、育成すべき資質の養成を科目に展開するために、キャリア形成科目群やゼミナール中心に科目を選定して学修マップをまとめた。

平成 26 年度は、平成 24 年度、25 年度を踏まえ、社会人基礎力養成の教育プログラムの展開や産業界ニーズ把握の体制・制度の整理を図るために教育力向上研修会を開催した。研修会は全 3 回行い、第 1 回「より良い PBL (Project Based Learning) 指導を目指して」、第 2 回「プロジェクト運営における教育効果・工夫と課題」、第 3 回「企業が求める社会人基礎力と指導のあり方」をテーマに、産業界および連携大学とともに議論を深めた。また、他大学連携に係る活動にも積極的に参加した。

3. 教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援の成果

(1) ICT 環境整備による学生の ICT 能力育成と各事業内省環境の整備

ユビキタスキャンパスグループ事業では、教育体制・産業ニーズ把握体制の後方支援を目的として、ICT 環境の整備および ICT 利活用推進を中心とした活動を行ってきた。3 年間の活動成果のうち、主要な事項について以下にまとめる。

- ・学内 ICT 環境の整備・充実：携帯端末の管理環境の整備、無線 LAN 環境の充実、ネットワーク環境の改善
- ・携帯情報端末の配布・諸説明等の ICT リテラシ指導、および、e ラーニング推進
- ・「4 つの教育事業」で使用するアプリケーション・システムの開発・運用支援：自己理解促進プログラムや地域企業連携プロジェクトグループと連携して Sozo Passport (学修ポートフォリオシステム) の開発、プロジェクト管理システムの開発
- ・事業成果の広報等を目的とした Web サイトの構築・運用

3 年間の活動を通じて、学生・教職員における iPad 利用のための環境整備・充実化を実現できた。学生に対しては最新の ICT デバイスとしてそれを利用した学習環境を提供することができた。教職員に対しては、ICT システムを利用した「新しい教育手法」や「授業改善」などを検討する機会を提供することができた。また、Web サイトを構築・運用したことで、学内関係者のみならず学外の人にも情報を提供することができた。

(2) 大学コミュニティ形成による学生支援

本事業が採択されたことを受け、平成 24 年度に本事業内容に対する企業アンケートを実施し、最近の若者の動向を調査し、企業が望む人材の把握を行った。3 年間の活動として、①卒業生就職先企業訪問、②創造同窓会総会アンケート、③創造祭学部卒業生同窓会ブースにおけるアンケート、④学内企業説明会 (企業アンケート実施)、⑤短大 OG との交流 (先輩の就職体験報告会)、⑥卒業生就業状況調査を行った。これら①～⑥の活動を通して、採用した企業の思惑や意見・配慮等を聴取し、卒業生の就労状況や職場での人間関係などを調査することができ、企業が求める人材の把握や卒業生のフォローアップ、在学生への支援へのフィードバックに活用することができた。

以上のように、産業界ニーズ補助事業を活用することで、社会人基礎力養成の新しい教育プログラムを開発・設置することができた。今後とも、本学の取り組みを広報し、改革を継続していく。

産業界ニーズ補助事業の運営に際し、ご協力いただいた関係各位の皆様に深く感謝いたします。

補助資料

5

1

プロジェクト活動成果報告書 (学生)

高校・介護施設向けのiPad活用および業務システム改善	75
担当教員:今井 正文	
コミュニケーション能力とは何か	81
～学生視点と社会人視点の相違～	
担当教員:加藤 尚子	
Sozo Socks Station 開店・運営プロジェクト	85
担当教員:川戸 和英	
豊橋エコタウンプロジェクト	
～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～	86
担当教員:見目 喜重	
打倒オカザえもん! がんばれトヨッキー!	90
担当教員:中田 麻貴	
ウミガメ保護プロジェクト	94
担当教員:中野 聡	
のんほいパーク盛り上げ隊!!!	96
担当教員:三輪 多恵子・山口 満	
豊橋市における外来生物影響調査プロジェクト	103
担当教員:和田 剛明	

高校・介護施設向けの iPad 活用および業務システム改善

今井プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

寺田一穂 (21117617), 村上彰仁 (21117728)
畦畑元美 (21217107), 榊田多絵美 (21217111)
玉田睦実 (21217116), 牧野貴徳 (21217631)
武村恒汰 (21417302)
指導教員：今井正文

2. 連携先企業・組織

有限会社ナーシングホーム気の里：
代表取締役 田中靖代様
愛知県立小坂井高等学校： 教諭 池田啓彰様

3. プロジェクト背景と目的

PC を活用したレクリエーションを実施している施設について、豊橋市内の介護施設にヒアリング調査を行った。その結果、実施している施設は100施設中5施設と少なく、実施していない理由は操作性の問題であった。また、iPad を取り入れている施設は2施設とさらに少なく、介護施設としては新しい形のレクリエーションであるといえる。iPad なら操作が簡単なため高齢者にも受け入れられ、また、iPad を活用したレクリエーションを早期導入することで他施設と差別化できる可能性がある。

そこで、本プロジェクトは、iPad を活用したレクリエーションを提案することで事業運営に参画し、利用者の満足度を通して新しいレクリエーションの有効性を検証する。また、施設より研修管理について改善の要望があったため、適切な情報管理と業務の効率化を図る業務システム改善も目的とする。高校における iPad の活用については、昨年度の活動を引き継いで連携先高校の要望に応じて活動する。

4. 実施計画

まず、介護施設の利用者向けに iPad 活用を試みる。iPad を施設利用者で使用してもらい、利用者に対するアンケートから、介護施設での iPad を活用したレクリエーションの効果を検証する。

併せて、施設より要望のあった研修管理表の改善については、事業の運営において適切な情報管理と業務効率化ができるよう、Access によるデータベースの構築を提案する。また、高校における iPad 活用は、連携先高校の要望に応じて、体育のダンスの授業でのタブレット端末利用や運用、関連システムの構築に協力する。

5. 実施結果

(1) 介護施設向け iPad を活用したレクリエーション

介護施設との連携にあたり、介護保険制度について勉強会を行った。介護保険制度の概要を理解し、連携先施設であるナーシングホーム気の里で実態調査を行った。実態調査の様子を図1に示す。



図1 実態調査の様子

施設では、毎日、午前には外来講師を招いてセミナーを行っており、午後は利用者自身が主体となるサークル活動が行われていた。サークル活動の内容は、機能訓練や俳句の会、民謡の会、脳トレや貼り絵などであった。

午後のサークル活動を見学し、作業内容の確認を行なった。この時、従業員の方から、「脳トレのような認知機能低下の予防につながる内容にしてほしい」と要望があった。また、作業が難しいとやる気や集中力の維持が困難となり飽きてしまうことも伺った。

施設調査の結果、レクリエーション提案では「操作しやすいものにする」、「ユーザーの希望に合わせて様々な難易度を準備する」を意識する必要があり、これらのことを踏まえ提案するアプリを検討した。「漢字」、「計算」、「クロスワード」などの種類別に、アプリの内容、難易度、操作性の評価を行ない、レクリエーションとして提案するアプリを決定、大学貸与 iPad 設定等の準備を行った。

iPad 操作マニュアルを作成し、希望者 5 名に対し第 1 回レクリエーション（8 月実施、全 4 回）を試験的に実施した。第 1 回レクリエーションの様子を図 2 に示す。

第 1 回レクリエーションでの 4 回を通して、参加者は iPad への関心が強くなり、操作にも慣れた様子だった。アンケート調査を実施し、利用者の方の意見も参考に、時間制限や背景に動きがあるものは無くし、好評だったアプリを追加した。好評だったアプリ、「漢字書き取り」、「パズル」、「間違い探し」を図 3 から図 5 に示す。



図 2 第 1 回レクリエーションの様子



図 3 漢字書き取り

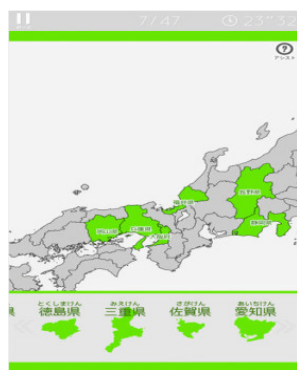


図 4 パズル



図 5 間違い探し

第 2 回レクリエーション（11 月実施、全 8 回）では、中間発表からの反省を踏まえ、連携の意味や情報発信の仕方を再検討した。活動や内容が伝わりやすいように参加案内を作成し、利用者の方と居宅介護支援事業所に配布した。参加者は 14 名であった。レクリエーション参加案内を図 6、第 2 回レクリエーション（11 月実施、全 8 回）の様子を図 7 に示す。

ナーシングホーム風の里をご利用の皆様へ
アイパッド
 ～ iPad を使って遊んでみませんか～

※iPadとは、手で持って使える大きさのコンピュータです☆

iPad はパソコンより操作が簡単で、画面を触るだけで使用できます。豊橋創造大学 経営学部が、皆さんと一緒に楽しめたらと思います。iPad を活用したレクリエーションを考えました。下記の予定で実施しますので、漢字や間違い探しなどの脳トレを iPad で体験してみませんか？興味をお持ちの方は、デイサービスのスタッフまでお申し出ください。

記

日時 平成 26 年 11 月 第 2・第 4 の月・水・金・土曜日
 13 時 15 分～13 時 45 分

場所 ナーシングホーム風の里 テイルーム

内容 iPad を活用したレクリエーション
 漢字検定 間違い探し パズル など体験できます♪

レクリエーション予定表 11 月

月	火	水	木	金	土	日
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

豊橋創造大学 経営学部 今井ゼミプロジェクト活動

図 6 第 2 回レクリエーション参加案内

実施後には、利用者の方から「またやりたい」や「この機械で頭の体操ができればいい」という声をいただいた。施設からは、「利用者が楽しみにしているので、今後もレクリエーションを継続したい」と依頼があった。

最終アンケート調査を行い、レクリエーション

の効果検証を行った。8月には「面白い」80%、「やや面白い」20%だったが、11月には「面白い」93%、「やや面白い」7%という結果になり、高齢者にもiPadが受け入れられたといえる。8月と11月のアンケート調査結果（質問項目：内容は面白かったですか）を図8示す。



図7 第2回レクリエーション

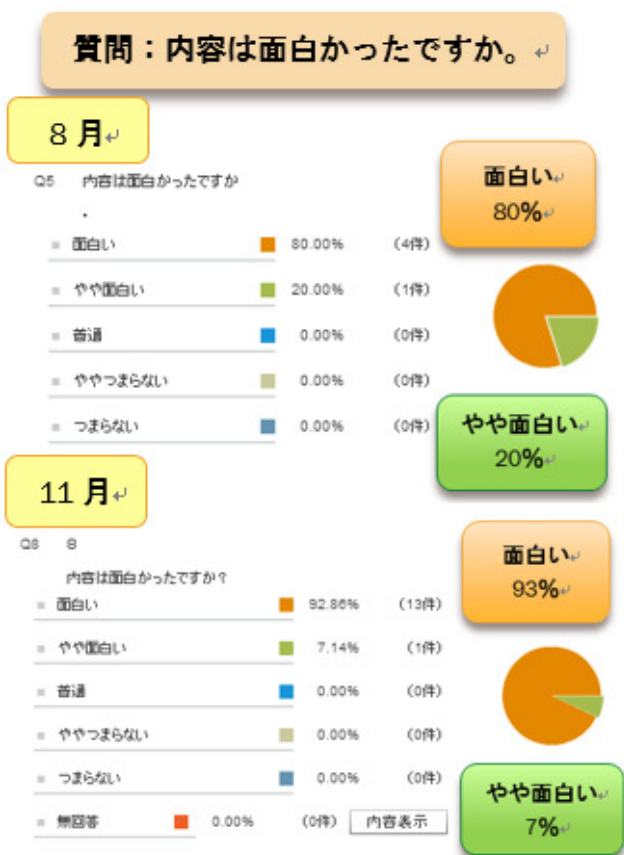


図8 8月と11月のアンケート調査結果の比較（質問項目：内容は面白かったですか）

(2) 介護施設データベースシステム構築

まず、Excelで管理していた研修記録表をAccessにインポートした後、通常の研修記録とは別に参加管理が必要な研修記録など重複したデータを正規化し、リレーションシップ設定等のデータ整理を行った。また、要望に合わせて、入力フォーム、クエリ等を作成した。マニュアルを作成し、完成したデータベースシステムを施設に納入した。

完成したデータベースを図9、操作マニュアル例を図10、納入の様子を図11に示す。

図9 完成したデータベース

DB操作マニュアル

～基本操作・画面説明～

まず開くと、この画面が表示されます。

テーブル...DBのデータ保管庫です、ここに入力されたデータが蓄積されています。
クエリ...ここで閲覧したいデータを絞り込みます。
フォーム...ここでテーブルにデータを入力します。

図10 操作マニュアル例



図 11 納入の様子

(3) 高校における iPad 活用

本年度は今井ゼミの研究用 iPad2 と小坂井高校様が購入されたタブレット端末（Lenovo Android）、スマートフォン等が活用された。ダンスの授業でのビデオ撮影およびデータ転送用の Wi-Fi 経由のビデオ提出システム、体育館内での複数モニタへの映像提示等を提案した。タブレット端末を使用した授業の様子を図 12 に示す。

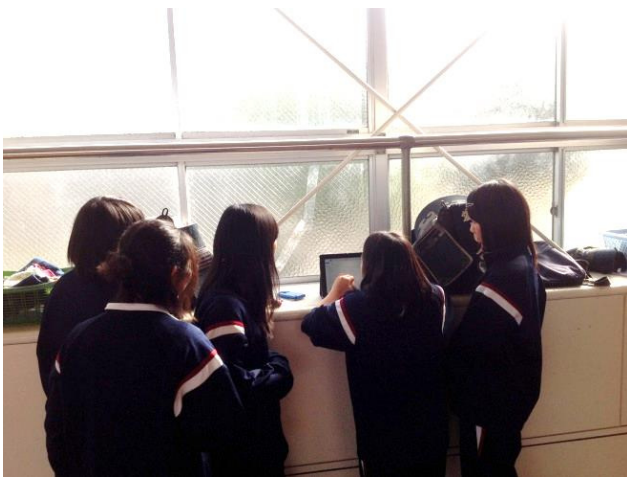


図 12 タブレット端末を使用した授業の様子

6. プロジェクトの成果

1) 介護施設向け iPad を活用したレクリエーション

アンケート調査の結果、「面白い」約 93%、「やや面白い」約 7%となり、高齢者にも iPad が受け入れられていると考えられる。また、「満足」約 93%、「やや満足」約 7%となり、iPad を活用し

たレクリエーションは高齢者にも十分有効であるといえる。アンケート調査結果（質問項目：このレクリエーションに満足しましたか）を図 13 に示す。iPad という一つのツールを使ったレクリエーションを通して、参加者の方々が過ごす楽しい時間を共有し、喜びを分かち合うことに、我々もやりがいを感じた。レクリエーションに参加された人の豊かな時間を作り出すお手伝いできたと考えている。なお、平成 27 年 3 月末までレクリエーションを継続する。

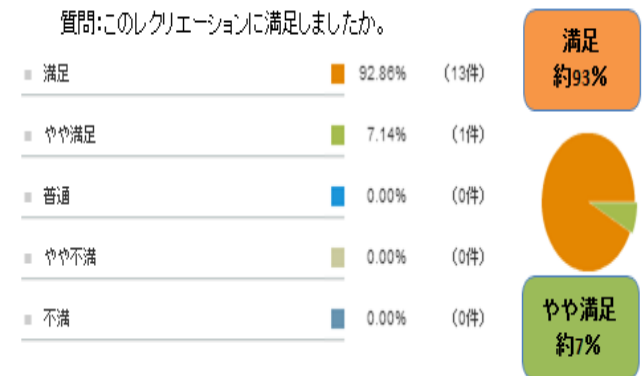


図 13 アンケート調査結果（質問項目：このレクリエーションに満足しましたか）

(2) 介護施設データベースシステム構築

研修記録の重複データ等が解消されデータの一元的管理が可能となったため、入力作業量が削減やデータ入力忘れが防止されるなど業務の効率化がなされ、適切な情報管理ができるようになった。

(3) 高校における iPad 活用

タブレット利用によって各グループは撮影と確認を繰り返すことができ、データ転送用 Wi-Fi 経由でビデオデータは教員 PC に集約され、教員 PC およびタブレットから複数の外部モニタによる映像提示も可能となった。

7. メンバー各自の所見

・21117617 寺田一穂

今回のプロジェクト活動では、iPad のアプリ調査と配布資料作成を担当しました。iPad のアプリ調査では、見やすさ・文字の大きさ・広告の有無・操作性に気をつけてアプリを検討した。短時間で

多くのアプリが見つかるだろうと考えていたが、検討したアプリに広告が出るなどで苦勞した。レジュメでは、うまくまとめることができなくメンバーに相談したりして、みんなで協力して締め切りまでに提出することができた。

今回のプロジェクト活動では、自分から行動することが少なく、他人任せにすることが多かった。なので、これからは、積極的に行動できるようにしたい。また、今回一人で悩まずにみんなに相談することが大切だと改めて実感することができた。

・21117728 村上彰仁

今回のプロジェクトでは、私はアプリ探しや介護施設の訪問、中間・成果発表会の発表者をした。アプリ探しでは、主に間違い探しのアプリについて調べた。訪問時に探したアプリを利用者さんに使ってもらったが、評判はあまり良くなかった。個人としてはいい結果が出せなかった。中間・成果発表会では、原稿の読み込みの甘さや機械の操作に慣れていなかったなど、自身の準備不足な点が目立ってしまった。振り返ってみると、私はメンバーの中ではあまりプロジェクトに貢献できていなかった。反省するべきところは多々あるが、利用者の方から「楽しかった」などの感想をいただいたときの感動や、メンバーと発表会を乗り切ったときの達成感は何物にもかえがたい体験だったので、このプロジェクトに参加できて良かったと感じている。

・21217107 畦畑元美

テーマを決定する際、ブレインストーミングとKJ法を使い、アイデアをアプリに関する事、介護に関する事、食べ物に関する事などにグループ化した。その中で、私達は「何をしたいのか」、「何ができるのか」を考え、実現可能なテーマを設定した。また、メンバーが多いので、活動はテーマごとに分業して進めた。分業の際には、メンバー個々の能力を生かせる配分にし、メンバー全員で活動の全体像を捉えながら実施することに気を付けた。

私達は、①介護施設向けの iPad 活用、②介護施設の業務システム改善、③高校向けの iPad 活用という 3 つの活動をしてきた。4 月に活動が始まってからこれまで、先を見越して詳細な計画を

立て、進捗状況を確認し、情報を共有しながら行ってきた。限られた同じ期間の中で 3 つの活動をするのは大変だったが、どのように成果を出していくか、期間を意識しながら進めることができ、質の高い活動ができた。プロジェクトリーダーをサポートする立場であるプロジェクトメンバーとして、活動が円滑に行われるよう自分の役割を果たした。

介護施設向けの iPad 活用について、外部からの問い合わせと取材が 2 件あった。「iPad がどのように高齢者に対して活用できるか」、「人気のアプリは何か」といった内容であった。連携先施設であるナーシングホーム気の里からも、平成 27 年 6 月開始予定の新事業や平成 28 年 4 月開始予定の介護事業で、iPad が大いに活用できると期待しているとコメントをいただいた。今回のプロジェクト活動を通して、iPad は、介護施設を利用する高齢者を対象とした新しいビジネスのツールの一つとして活用できると確信し、施設での導入の機会を作ることができた。

21217111 榊田多絵美

今回のプロジェクト活動では、私の役目は、実際に介護施設に行って利用者の方々に iPad を体験させ、使いやすさや満足度などを調査して Web 報告を書いた。Web 報告を書くことにあたって、人に伝わりやすい、読みやすい文章にするために書き直しを何度も重ね、Web 報告を書くことの苦勞さを知った。最初は、感想や思ったことを書くということで軽い気持ちで書いていて、メンバーの皆や教員にチェックをしてもらったところ、自分が思っていたこととは反対に厳しい指摘を受けた。この一年で見る人に対してどんな文章にしてみるか、見ている人の視点になって考えながら書くことで、最初の時と比べて文章の書き方も変わってきた。自分の書いた Web 報告がネット上に上がった時は達成感が味わえて、喜びも感じることもできた。これからもこのことを生かして、卒業論文やレポートなど様々な場面で良い文章が書けるように努力したい。

・21217631 牧野貴徳

今回のプロジェクト活動では、主に Access を使用したデータベースの作成を担当した。前半は

アプリケーションの検討に参加をし、全員で提案するアプリケーションを絞り込む作業を行った。同時に iPad の設定等を進めていた。後半は必要な情報を Excel で受け取り、それを Access にインポート、正規化、リレーションシップ、ルックアップを使用することにより、データの重複を無くし、情報の入力もスムーズに行えるようになった。施設への訪問も後半から参加した。反省点としては、データベースの着手が遅れてしまい、最後のほうまで無駄が多い見にくいものだったのが一番の反省点である。ゼミ全体では分担をしっかりと決めて、全員でプロジェクトを進めていけてよかった。この経験を今後にも活かしていきたい。

21417302 武村恒汰

今回のプロジェクトで私は、iPad を介護施設で活用していただくために 8 月と 11 月に介護施設に訪問と業務システム改善のためのデータベース構築を行った。訪問の前に iPad に入れるアプリなどを他のメンバーと一緒に探して検討をしたがあまり力になれなかったので申し訳なかった。8 月と 11 月の訪問では介護施設の利用者の方々には間違いさがしなどのアプリが好評で楽しんでいただけたと考えている。データベースの構築では施設側が現在 Excel で管理しているデータを Access に移し正規化を行うという作業をした。データベースのマニュアルなども作ったが内容が不十分だったので、次回もしこのようなマニュアルを作る時は丁寧に作れるようにしたい。

【謝辞】

本プロジェクトの実施にあたり、ご協力いただいた有限会社ナーシングホーム気の里様、愛知県立小坂井高等学校様には大変お世話になりました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

コミュニケーション能力とは何か～学生視点と社会人視点の相違～

加藤プロジェクト

入社対象)に関するアンケート調査結果」より引用

1. プロジェクトメンバー

- 福井実也美(21217121)
- 指導教員：加藤尚子

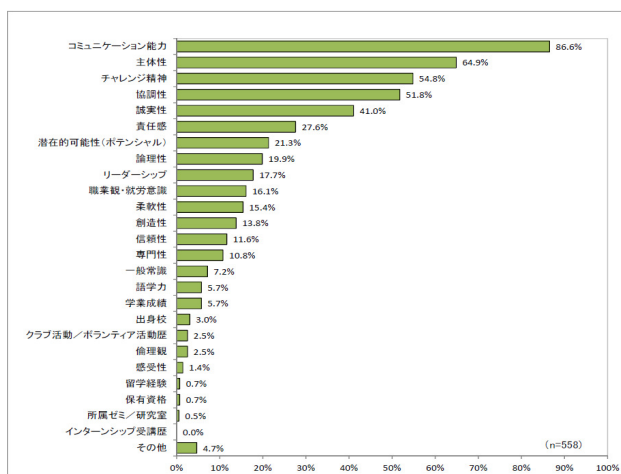
2. 連携先企業・組織

- 野島保険事務所 (代表：野島啓氏)
- スクエア (代表：國崎恭弘氏, フロアー：星野梨恵氏)
- クオークネット (代表：齋藤純氏)
- 株式会社ナツメ (取締役常務：夏目喬之氏)

3. プロジェクト背景と目的

一般社団法人日本経済団体連合会のアンケート結果 (2014 年) によると、企業が選考時に重視する要素の第 1 位は「コミュニケーション能力」であった (図表 1 参照)。

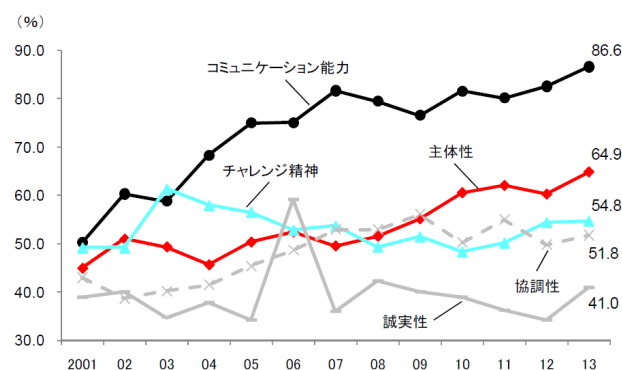
図表 1. 企業が選考にあたって特に重視した点 (5 つ選択)



出所：日本経済団体連合会 (2014) 「新卒採用 (2013 年 4 月

また、同連合会の新卒採用 (2013 年 4 年入社対象) に関するアンケート調査結果によると、企業が採用選考時に重視する要素は 10 年連続で「コミュニケーション能力」が第 1 位であった (図表 2 参照)。

図表 2. 選考時に重視する要素の上位の推移



出所：新卒採用に関するアンケート調査結果の概要 (2014) より引用

図表 1 と図表 2 から、このコミュニケーション能力とは具体的にどのような能力を指すのであろうかという疑問を抱いたのが「コミュニケーション能力」について考えることになったきっかけである。

社会人が考える「コミュニケーション能力」と、学生が考える「コミュニケーション能力」が同じであるかを確認する必要性を感じ、本学の学生アンケートの集計結果及び社会人の方々へのインタビュー調査の結果を通じて、その認識を明らかにしていくことにした。

これらの調査から得られた知見が少しでも学生の意識を変えることができれば、学生がその能力を伸ばそうとする可能性が高まる。それは、学生を迎え入れる企業にとっても、大学を卒業し仕事に携わっていく学生にとっても有益であると考えられる。そこで、学生に社会人として求められる

コミュニケーション能力が具体的にどのような能力であるかを前もって知ってもらうことを本プロジェクトの目的とした。

4. 実施計画

< 4. 1 > 実施スケジュール

本プロジェクトは以下のスケジュールにしたがって進行した（図表3参照）。

図表3. プロジェクト実施スケジュール

日付	活動内容
4月	プロジェクトのスケジュール確認 テーマ決め 情報収集
5月	アンケート作成 学生アンケート実施(1回目)
6月	アンケート集計 集計結果資料作成
7月上旬	アンケート作成 学生アンケート実施(2回目)
7月下旬	中間報告会資料作成
8月1日	中間発表
9月	アンケート集計、集計結果資料 作成、結果の検討
10月上旬	インタビュー内容の選定
10月下旬	企業の方々へインタビュー
11月	企業の方々へインタビュー インタビューおこし 結果の検討 成果報告会資料作成
12月上旬	成果報告会資料作成
12月18日	成果報告会(経営学部全員)
1月上旬	成果報告書作成
1月下旬	成果報告書提出(大学)

< 4. 2 > 第1回学生アンケート

2014年5月8日から5月23日にかけて第1回学生アンケートを実施した。ここでは、一般社団法人日本経済団体連合会のアンケートと同様に本学経営学部1年生から3年生の学生に企業が採用選考にあたって重視していると思われる要素を選択してもらった（26項目のうち5つを選択）。

< 4. 3 > 第2回学生アンケート

2014年7月10日から8月1日にかけて第2回学生アンケートを実施した。

ここでは、①学生に対し企業が考えるコミュニケーション能力とは具体的にどのような能力であるのか、②コミュニケーション能力の高低はどのような基準で判断していると考えられるか、について記述してもらった。

< 4. 4 > 社会人の方にインタビュー

2014年10月から11月の期間にかけて社会人の方々に1人30分程度のインタビューをさせて頂いた。インタビューに際してはICレコーダーを使用した。

ここでは、①企業が採用選考にあたって重視しているコミュニケーション能力は、具体的にはどのような能力であるか、②企業が採用選考時に学生のコミュニケーション能力の高低を見ているとすると、どのような基準で判断しているか、という二つについて伺った。

インタビュー風景

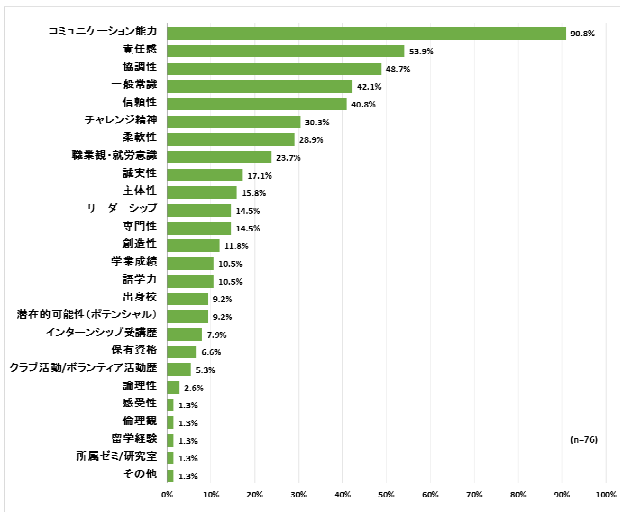


5. 実施結果

< 5. 1 > 第1回学生アンケート結果¹⁾

第1回学生アンケート結果は図表4のとおりであった。企業が採用選考にあたって重視していると考えられる点の第1位は「コミュニケーション能力」という結果であった（図表4参照）。

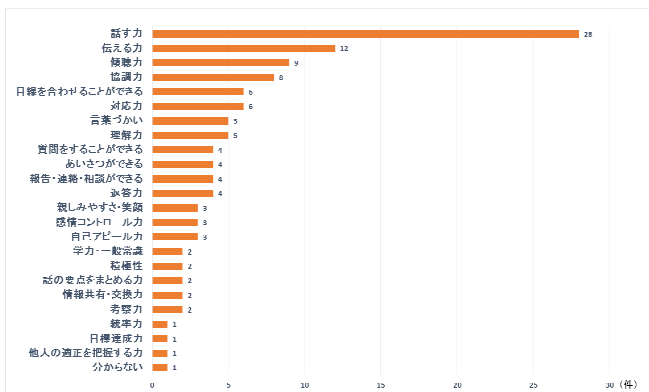
図表 4. 企業が採用選考にあたって重視していると考えられる点



< 5. 2 > 第 2 回学生アンケート結果ⁱⁱ

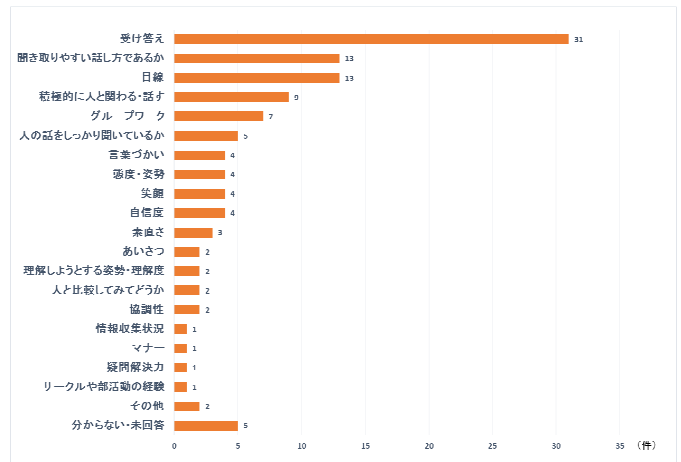
最初の質問項目であった「コミュニケーション能力とは具体的にどのような能力であるのか」について得られた回答の中で、似ている記述を集める作業を行ったところ 23 の要素に分類することができた (図表 5 参照)。

図表 5. 企業が採用選考にあたって重視していると考えられるコミュニケーション能力は具体的にどのような能力だと思いますか? (自由記述)



二つ目の質問項目であった「コミュニケーション能力の高低をどのような基準で判断しているか」について得られた回答の中で、似ている記述を集める作業を行ったところ、20 の要素に分類することができた (図表 6 参照)。

図表 6. 企業が採用選考時に学生のコミュニケーション能力の高低を見ているとすると、どのような基準で判断していると思いますか? (自由記述)



< 5. 3 > 社会人の方へのインタビュー結果ⁱⁱⁱ

回答をみていると、共通点として、受け答えと真摯な対応の 2 項目が浮かび上がってきた。また、コミュニケーション能力の重要性は、職種によって異なる可能性があることがインタビュー結果から見えてきた。

6. プロジェクトの成果

< 6. 1 > 社会人の方々から得られた意見と図表 5 との類似点

インタビューで得た回答から、受け答えと真摯な対応の 2 項目が浮かび上がってきた。

受け答えと似た項目を学生アンケートの結果から探してみると、話す力、伝える力、質問することができる、返答力、対応力といった回答が挙げられる。

真摯な対応と似た項目を学生アンケート結果から探してみると、傾聴力、目線を合わせることができる、あいさつができる、言葉づかい、親しみやすさ、笑顔といった回答が挙げられる。

< 6. 2 > 社会人の方々から得られた意見と図表 6 との類似点

インタビューからは、受け答えと真摯な対応の 2 項目が浮かび上がってきた。

受け答えと似た項目を学生アンケート結果から

探してみると、受け答えが挙げられる。

真摯な対応と似た項目を学生アンケート結果から探してみると、言葉づかい、あいさつ、態度・姿勢、マナー、目線、笑顔といった回答が挙げられる。

<6. 3>まとめ

学生はコミュニケーション能力を幅広く捉える傾向にあった。社会人の方々からは「真摯な」という言葉が挙げられるとともに、基本的な受け答えと対応が浮かび上がった。

また、コミュニケーション能力の重要性は、職種によって異なる可能性があることがインタビュー結果から見えてきた。

今後の課題として、本プロジェクトを継続するにあたっては職種等を考慮するとともに、分析の方法も考えていきたい。

7. 所見

私は電話でアポイントメントをとることが苦手だ。Excel でグラフを作ることや、人前で発表することも得意ではない。普段は苦手なことは人任せにしてしまうが、一人でプロジェクトに取り組まなければならなかったため、逃げ道がなかった。この環境は大変だったが、その分、自身の社会人基礎力が伸びたと実感している。この一年間は自分にとってチャレンジの年であった。

i 経営学部の教員の皆様及び経営学部学生の皆様のご協力により、本プロジェクトに必要なアンケートを実施することができました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

ii iに同じ

iii 豊川信用金庫業務推進部推進役兼融資マネージャー青山貴映氏にもインタビューにご協力頂くことができました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

Sozo Socks Station 開店・運営プロジェクト

川戸プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

石本智加奈 (21217104), 岩月美和 (21217106),
鈴木祐行 (2127114), 長谷川摩周 (21217120),
堀之内彩香 (21217120), 矢西キハル (21217126)
指導教員: 川戸和英

2. 連携先企業・組織

株式会社ナイガイ
中部ガス不動産株式会社

3. プロジェクト背景と目的

- ①背景: 2014年4月に閉店した、「SOZOショップ・笑輪」に続く、新メンバーでの新店舗、「SozoSocksStation」の立ち上げ。
- ②目的: 地域密着型の店舗、そして豊橋創造大学のPR活動を目指し、新店舗を設立し、専門店開店や営業方法を学ぶこと。

4. 実施計画および実施結果

1. 中部ガス不動産仲介の下、4箇所のテナント候補より、上記に決定
2. 知識学習会を実施
安松営業課長、本学遠山教務課長補佐による2コマの店舗運営や靴下知識に関する学習会
3. 株式会社ナイガイとの本格的な交渉開始
 - ①商品品揃え、店舗用什器、納期の交渉
 - ②購買時点仕入れ方式に決定
→利益配分75% (ナイガイ): 25% (SSS)
4. 10月17,18日豊橋祭りにて試験的にプレオープン
5. 11月2,3日 オープン
6. 11/23~12/23 クリスマスイベント
 - ①1000円以上お買い上げの方へ、1000円毎にクリスマスブーツを配布
 - ②店舗ディスプレイをクリスマス仕様とした。
7. 1/14~2/14 バレンタインイベント
 - ①株式会社ナイガイ提供のギフトボックスに、チョコレートを貼り付け、靴下をボックスに入れて販売。靴下或いはハンカチをカップケーキ

- の形にし、装飾した可愛いものも特別に販売
8. 1/16 棚卸し実施
 - ・店の全商品を一一つ数え、手元資料と一致するか数量確認を5時間かけて行った。
 9. 広報・広告活動
 - ①プレス発表会実施
 - ・東日、東愛知、中日、朝日新聞で掲載
 - ②チラシ配布: 述べ3回配布
 - ・プレオープン時、オープン時、クリスマス
 - ③パブリシティ
 - ・豊橋無料タウン誌 PLANETS パブ掲載
 - ・FM豊橋 豊橋祭りにて告知
 - ・豊橋街中活性課 サイト掲載
 - ④SNSによる広報活動
 - ・Twitter・Facebook アカウント立ち上げ
 - ⑤1/25 発行 HANAMARU に 1/4 ページ広告出稿

5. プロジェクトの成果

地域密着型店舗を目指し、お客様との会話や接触に力を入れ、意見や要望に応じて喜んでもらい、リピーターも増えつつあり、目的達成した。

6. メンバ各自の所見

- ①矢西: 店長として安松営業課長に営業報告や相談などの伝達係りを担当。大学生ではできない貴重な体験ができた。
- ②石本: 皆、個性豊かで反発もするがそれが良い所で素敵なメンバーだなと心から思っている
- ③岩月: 最初のうちはバラバラだったメンバーも、お互いに協力し合えるようになって、メンバーの成長もみえるプロジェクトになった
- ④鈴木: 自分一人では気が付かないようなことを6人の知恵を出し合って積極的にできた。各々の得意な分野が店内を見るだけでもいたるところに発揮されていて、達成感も感じる事ができた。
- ⑤堀之内: 経営というものはとても繊細なものだと実際に体験して学ぶ事ができた。
- ⑥長谷川: 豊橋の靴下専門店として定着できれば。

豊橋エコタウンプロジェクト

～小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

見目プロジェクト

- ・故障・トラブルの状況確認
- ・トラブルへの対処に関する市役所との連携

1. プロジェクトメンバ

森下佑也 (21217633) 山本雪乃 (21417303)

田邊俊希 (20923215) 眞子匠 (21123132)

中川千加 (21123228)

指導教員：見目先生

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋市教育委員会教育政策課
担当者：浅倉淳志、高橋拓也
- ・豊橋市内小中学校

3. プロジェクト背景と目的

近年、地球温暖化や化石エネルギーの枯渇問題、脱原子力発電の対応策として太陽光発電の利用促進が求められている。そのため、エネルギー消費の削減や太陽光、風力などの再生可能エネルギーの利用が促進されている。そのなかでも、太陽光発電は騒音がなく住宅などへの導入が容易であるという利点から普及してきている。しかし、発電性能の低下や故障、トラブルの発生など長期信頼性の問題が近年指摘されている。

長期信頼性の評価には、長期的なデータを必要とする。本プロジェクトでは、豊橋市内の小中学校（全 74 校）に設置されている太陽光発電システムを対象に、システムの稼働状況の調査を 3 年前から実施している。

本年度は同様の調査を継続し、長期信頼性に関する基礎データを収集して分析を行う。

4. 実施計画

<4.1> 春学期（太陽光発電の基礎知識の修得）

- ・太陽電池パネルの原理
- ・太陽電池パネルの種類
- ・長期信頼性に関する状況把握
- ・メーカーによる太陽光発電の長期補償の状況把握

<4.2> 秋学期（訪問調査）

- ・豊橋市内小中学校の訪問調査

5. 実施結果

<5.1> 太陽電池パネルの原理

太陽光発電は、太陽電池を用いて発電を行う発電方式である。太陽電池は性質の異なる 2 種類の半導体（N 型と P 型）を重ね合わせた構造となっている。そこに太陽の光（光エネルギー）が当たると、+ の正孔と - の電子が発生する。それらの正孔と電子はそれぞれ別々の半導体へと引き寄せられる。そして、太陽電池の表面と裏面につけられた電極に電球などの負荷をつなぐことによって電流が流れる仕組みとなっている。

<5.2> 太陽電池の種類

太陽電池には、大きく分けてシリコン系、化合物系、有機系、量子ドット系の 4 種類がある。

それらの特性を以下にまとめる。

・シリコン系

現在最も多く使われている太陽電池である。発電効率は高いがコストも高い単結晶シリコン太陽電池（発電効率 15～19%）と発電効率は落ちるがコストの安い多結晶シリコン太陽電池（発電効率 13～18%）がある。そして、現在は多結晶シリコン太陽電池は最も多く生産されている。

・化合物系

太陽電池需要の急速な拡大によるシリコン不足を解消するために開発された太陽電池である。元素の組み合わせによって種類を分けられる。変換効率 10～12% で低コスト化が望める。CIS 系太陽電池は次世代の太陽電池として期待されている。非常に高価だが、主に宇宙で使われている。変換効率 30～40% の GaAs 系太陽電池というものも存在する。

・有機系

有機物を原材料とするためコストが安い。

また、自由に曲げることや着色も可能である。しかし、変換効率が5~6%と低いことや寿命が短いことが課題となっている。

・量子ドット系

まだ基礎研究の段階の太陽電池パネル。現在の理論限界を破る太陽電池として開発が進められている。量子効果を利用して性能を向上させる技術とナノサイズの微小加工が必要となる。材料が異なるnmサイズの粒を規則的に並べた構造などが提案されている。

<5.3>長期信頼性に関する状況把握

太陽光発電は、歯車などの可動部がないためにメンテナンスフリーとされている。しかし、太陽電池モジュール（パネルの部分）は設置から3年以降、パワーコンディショナという太陽光発電で発電された直流の電流を家庭用の交流の電流に変換する装置は5年以内に故障・トラブルが起きやすいことが指摘されている。

太陽光発電は可動部がないから故障・トラブルが発生しないのではなく、可動部がないためにいつもと音が違うなどの異常に気づきにくく故障・トラブルが発見されていないという可能性がある。さらに、太陽光発電は屋上などの高くて見にくいところに設置されていることが多いので、そのことも故障・トラブルの発見を遅らせている原因となっている。

<5.4>太陽電池メーカーによる太陽光発電の長期保証

太陽光発電に発生する故障・トラブルへの指摘から、メーカーも長期信頼性への対応を開始した。

表1には太陽電池メーカーによる発電出力の長期保証条件の例を示す。国内のメーカーでは、無償で10年の出力保証を行うのが基本となっている。さらに、海外のメーカーでは、無償で20年以上の出力保証を提供しているメーカーもある。しかし、メーカーが保証のために行う故障調査は雑であり、また不十分であるとの指摘もあり、実際には適切に保証されていないケースも見られる。

太陽光発電の長期信頼性を揺るがすことが起きないようにするためには、長期信頼性について明確な国際基準を定める必要がある。

表1 太陽電池メーカーによる保証条件の例

メーカー	保証期間	保証条件
京セラ	10年	90%未満となった場合
三菱	20年	80%を下回った場合
シャープ	15年	10年目までは90% 11年目以降は85%
東芝	10年	90%未満となった場合
ソーラーフロンティア	20年	10年で10%以上 20年で20%以上 低下した場合
カナディアンソーラー	25年	1年目 97%以上 10年目 90.7%以上 25年目 80.2%以上 を保証
サンテック	25年	2年 81% 25年 72%を保証

<5.5>豊橋市内小中学校の訪問調査

長期信頼性の評価には、長期的なデータの収集が必要である。本プロジェクトでは、豊橋市内の小中学校（全74校）に設置されている太陽光発電システムを対象に、システムの稼働状況の調査を実施している。

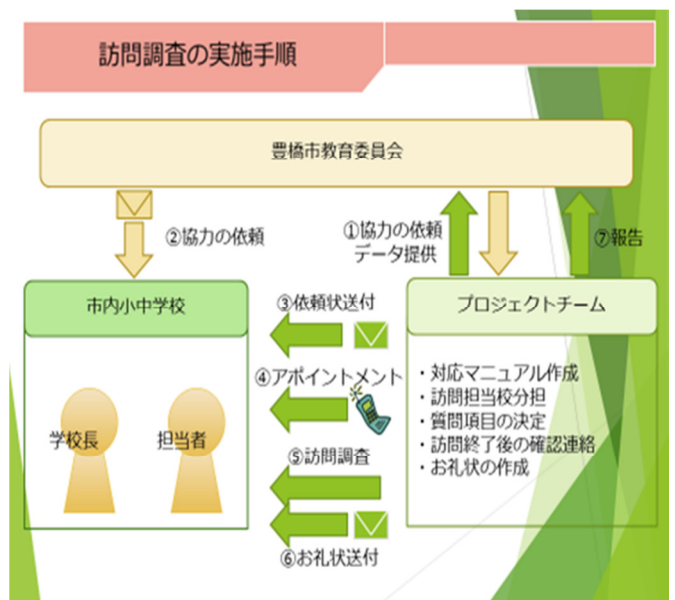


図1 訪問調査の実施手順

図1には訪問調査の実施手順を示す。

訪問調査は以下の手順で実施する。

- ①豊橋市教育委員会に協力の依頼・データ提供
- ②豊橋市教育委員会から市内小中学校へ協力の依頼をしていただく
- ③市内小中学校へ依頼状の送付
- ④市内小中学校へ訪問のアポイントメントの電話
- ⑤訪問調査を実施
- ⑥訪問調査が終わった学校からお礼状を送付
- ⑦訪問調査のデータをまとめて豊橋市教育委員会に報告

また訪問調査では、以下の内容について調査する。

- 設置状況の調査
 - ・パネル周囲の障害物の有無、
 - ・パネルの状態、
 - ・発電状況
- 稼働状況の確認
 - ・訪問前後の故障やトラブルの有無、
 - ・太陽光発電設備の活用状況
 - ・環境教育の内容
- 聞き取り調査
 - ・学校側からの要望、
 - ・トラブルへの対応、疑問点・問題点

<5.6>故障・トラブルの状況確認

12月末までに市内40小中学校の調査を実施した。その訪問調査の設置状況の調査から、建物のすぐ横に太陽光発電パネルが設置されていて、建物の影がパネルにかかり発電に大きな影響を与えられる学校が数校確認された。

稼働状況の確認では、市内小中学校の太陽光発電に様々な故障・トラブルを発見した。それらの故障・トラブルを発電への影響を基準にレベル別に分けた(表2)。表3には故障レベル別の今年度の故障・トラブル件数を示す。また、図2にはH23年度から26年度までの各年度の故障・トラブルの件数とその内訳の推移を示す。

表3および図2を見てわかる通り、今年度は故障・トラブル件数が急増している。昨年度は全体

74校で発見された故障・トラブル件数は11件であったのに、今年度は40校で21件と昨年度全体の約2倍にまで急増している。その中でも修理が必要な事態であるレベル3が、昨年度の2件から今年度は11件と5倍以上の件数が確認されている。

さらに、各レベルの故障内容を詳細に調べると、レベル3ではインバーターのファン故障が8件、配線切れ2件、レベル2ではインバーターのフィルターの根詰まり5件と、今年度は多くのインバーターの故障・トラブルを確認した。

表2 故障・トラブルのレベル
(基準：発電への影響)

故障レベル	発電への影響	内容
1	なし	施設の異常(雨漏りなど) 発電量表示パネルの故障
2	一時的に影響	インバータの停止(フィルターに支障) インバータの停止(エラー発生)
3	大いに影響 (修理必要)	インバータの停止(故障) 太陽電池パネルの破損 太陽電池パネルの断線

表3 今年度の故障・トラブル件数

故障レベル	今年度の故障件数
1	3
2	7
3	11

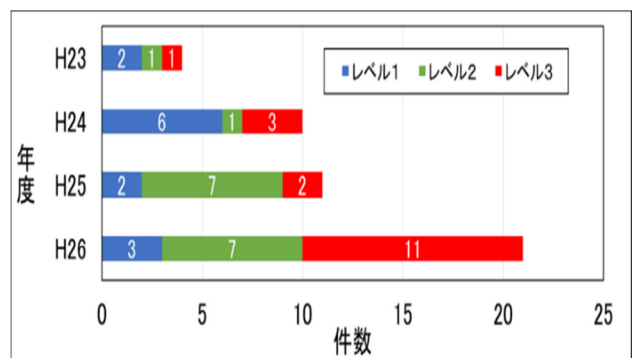


図2 各年度の故障・トラブルの件数とその内訳

基本的にこれらのシステムの故障・トラブルには学校側で対応しているのだが、訪問調査の際に、故障・トラブルに未対応な状況を数件確認した。

その理由として、以下のようなことが挙げられた。

- ・予算が足りない
- ・メンテナンスフリーのため気づいていなかった

このように、太陽光発電システムのトラブルへの対応は、各校の事情により様々であった。また、聞き取り調査では、学校側から次のような要望も挙げられた。

- ・故障した際に費用の工面をして欲しい
- ・業者の手配をして欲しい

<5.7>トラブルへの対処に関する市役所との連携

調査後に、豊橋市教育委員会教育政策課に上記の訪問調査の状況とその結果を報告した。その内容は、以下の通りである。

- ・訪問調査で判明した故障・トラブルに未対応な状況を報告
- ・個々の学校の要望・気になることを報告

こうした報告を通して、市内小中学校の太陽光発電の故障・トラブルにより迅速に対応できるような流れをつくることができた。

6. プロジェクトの成果

今年度の訪問調査では非常に多くの太陽光発電のシステムに故障・トラブルが発見された。さらに、故障・トラブルへの対応は学校の事情により様々であり、訪問調査の際に、故障・トラブルに未対応な状況も数件確認された。

こうした小中学校の状況や要望などを市役所に報告することで、故障・トラブルに迅速に対応する流れを作ることができた。

太陽光発電の長期信頼性の評価のためには、今後も市内小中学校の太陽光発電システムの故障・トラブル状況を、注視する必要がある。そのため、未訪問校の調査や来年以降の調査も継続して行う必要がある。

7. メンバ各自の所見

- ・森下佑也(21217633)

自分はこのプロジェクトの開始のころは、太陽

光発電は設置が面倒臭いことや発電量が不安定ということが問題点であると思っていた。しかし、太陽光発電の基礎知識を学んでいくことで、長期信頼性の問題のことやメーカーによって保証内容が違うなどということを知ることができた。

訪問調査では、電話で訪問のアポイントメントをとるときに緊張で声が震えてしまったり、舌が回らずに何度も噛んでしまったりして苦労した。実際に訪問した時は故障・トラブルの発生率が高く驚いた。しかも、その故障・トラブルが修理の必要なほどの故障・トラブルばかりで、さらにその故障・トラブルに気が付いていないということもあり、太陽光発電は本当にメンテナンスフリーで大丈夫なのかと思った。

今後の太陽光発電はシステムの設置後ももっと人の関心を引き、長期信頼性などの問題点など影の部分も注目され、改善されていくとよいと思う。

- ・山本雪乃(21417303)

初めは太陽光発電について漠然としたイメージしかなかったですが、基礎知識を学び理解が深まったように思う。

メンテナンスフリーとされているが、ネット上でのデータでも故障が多く、素材が劣化すること考えると本当にメンテナンスフリーであるのか疑問であった。実際に、訪問調査で多くの故障・トラブルが見つかり目先の言葉だけに踊らされずしっかり調べるのが大切だと感じた。

打倒オカザえもん！ がんばれトヨッキー！

中田プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

尾関 海斗 (21217109)
武智 椋也 (21217115)
坪田 紳吉 (21217118)
神藤 賢護 (21123114)
指導教員：中田 麻貴

2. 連携先企業・組織

豊橋市役所 産業部観光振興課 小泉氏
豊橋市役所 産業部産業政策課 長久氏
イマージュ広告 菅沼氏
鷹丘つくし東児童育成クラブ 佐々木氏
東田なかよしクラブ 加藤氏
向山きのご児童クラブ 徳光氏
鷹丘つくし児童育成クラブ 川口氏
津田保育園 岩田氏
下地児童クラブ 杉田氏
牛川東保育園 小林氏

3. プロジェクト背景と目的

豊橋市の知名度アップのために豊橋市のご当地キャラ「トヨッキー」を用いた活動を行っていきうということがこのプロジェクトの発端であった。

しかし、ゆるキャラグランプリ 2013 では、同じ愛知県内のゆるキャラ「オカザえもん」が 22 位であったのに対し、315 位であった「トヨッキー」。

そこでプロモーション活動を積極的に行なうことで認知度をアップさせ、ひいては豊橋市への地域貢献を行っていくことを目的とする。

4. 実施計画

4~6月

プロジェクトテーマの選定
実施事項についてのミーティング
連携先との調整

7月

豊橋市市役所小泉氏との打ち合わせ
中間報告まとめ

9~12月

ステッカー製作
豊橋祭り 豊橋市マスコットキャラクター大集合
豊橋創造大学での PR 活動
放課後児童クラブ、保育園での PR 活動

5. 実施結果

今年度は、ゆるキャラグランプリには出場しないことに決定した。その為、保育園と放課後児童クラブに訪問した。訪問日程は以下の通り。

日付	曜日	時間	訪問先	人数
10/18	土	9:00~	豊橋祭り 豊橋市マスコットキャラクター大集合	約300人
10/25~26	土、日	13:00~	豊橋創造大学学園祭	約50人
11/27	木	17:00~	鷹丘つくし東児童育成クラブ	約40人
12/2	火	15:30~	東田なかよしクラブ	約40人
12/2	火	17:00~	向山きのご児童クラブ	約20人
12/4	木	17:00~	鷹丘つくし児童育成クラブ	約30人
12/9	火	10:00~	津田保育園	約120人
12/9	火	16:30~	下地児童クラブ	約20人
12/11	木	10:00~	牛川東保育園	約100人

訪問時には、トヨッキーの着ぐるみをきて、折り紙や塗り絵を実施し、自分たちで作成したステッカーを配布した。

子供たちのトヨッキーに対する知名度は想像以上に高かった。しかし、知らない子も少しはいて、知ってもらいきっかけになった。また、知っていた子たちは、非常に喜んでくれ、より一層好きになってもらえた。

最初に、豊橋まつり 豊橋市マスコットキャラクター大集合に参加した。

この活動は市役所の方に手伝ってもらえますか？と依頼してもらって参加することになった。最初の活動で右も左も正直分からなかったが、そこをカバーしてくれたのは市役所の人達で、小さい子供達への対応の仕方、どうすれば小さい子供達に喜んで貰えるかなど、今後訪問して行くにあたりとても重要なことを学ぶことのできた活動であった。



2回目の活動は、鷹丘つくし東自動育成クラブだ。

鷹丘つくし東自動育成クラブは初めて自分たちの力だけで活動した場所だ。豊橋まつりで学んだことを中心にやって行けばいいと思っていたが、その考えが甘かったと痛感させられた初陣であった。

それを払拭してくれたのは鷹丘つくし東自動育成クラブの方達と子供達であった、最初トヨッキーの着ぐるみを着て登場した時の子供達の歓声は今も忘れる事ができない。

鷹丘つくし東自動育成クラブで自分たちなりに今後の訪問の基盤を作ることができた。



3回目の活動は東田なかまよしクラブだ。

東田なかまよしクラブでは前回の訪問で基盤を作ることができていたので、そんなに苦労することはなく活動を行うことができた。

ただ予想していない事が起こった、それは半端ではないくらい元気な女の子の存在であった。僕たちではあしらす事ができず、先生方に頼ってしまったのが心残りであり、自分たちでは予想していなかった課題となった。



4回目の活動は向山きこの児童クラブだ。

ここで驚いたのが熱狂的なおばさんのファンが存在だ。

豊橋市ではトヨッキーが子供たちから大人まで幅広い年齢層に人気があることが分かった。



5回目は鷹丘つくし自動育成クラブだ。

ここではトヨッキー漏電してほぼ稼働できなかった。

しかしそのおかげで子供たちと長い時間触れ合う事ができ今までの活動では味わえない感覚を体験できた。



6回目は津田保育園へ行った。

初めての保育園訪問だった、自動育成クラブと同じ様な気持ちで行き、出鼻をくじかれ上手く活動することができなかった。児童育成クラブとは違い、時間を制限されていたのでうまく段取りを運ぶ必要があったができず、保育士さんの助けを借り何とか終わることができた。

7回目は下地児童クラブだ。

児童クラブの集大成として挑んだ。集大成だけあり、ほぼ完璧といっても良い出来で終わることができた。



8回目は牛川保育園へ行った。

牛川保育園が私たちの行った活動の最後の活動だ。

最初に訪問した鷹丘つくし東自動育成クラブから培ってきた経験を全て出せ、津田保育園で課題となった児童クラブとの段取りの違いも上手く改善することができ、最後の訪問に相応しい内容で終わることができた。



6. プロジェクトの成果

発表前のぎりぎりになってスケジュールが立て込んでしまったので、訪問先のアポをとるのを早めるなどの、1年を通しての計画を考えておく必要があると感じた。

役割分担などをしっかり決めて、個々が担当した訪問先は最後まで責任を持ってやり遂げることができた。

7. メンバー各自の所見

この1年間を振り返ると、達成感も勿論ありますが、後悔の方が大きいです。最後ギリギリになってしまってから行動をしなければならなかったことがこの1年間の一番の後悔です。今後の就職活動や学校生活を行うにあたって、後に後に引き伸ばしてしまう癖をなおしていかないと今回のプロジェクトのように後悔をしてしまうと思います、全員揃うことがほぼなかったという点も後悔しています。体調管理の大切さ、メンバーが一人欠けてしまう事の厳しさなど、今後就職した時にもありえる状況なので、今回のこの反省を活かして行きたいと思う。(尾関 海斗)

活動を終え、感じたことはメンバーへの意見の発信が少なかったように感じた。活動をする日に休むメンバーがいたので、しっかり計画を立て予定を合わせて、メンバー全員で活動する日を増やせたらと思った。

訪問先に行ってから、段取りの計画性が少し足りないことも感じた。訪問先の方々にも予定があると思うので、行ってからの準備を早めにしておく必要があった。また緊張からか、少しおどおどした喋り方になっていたので、毅然とした喋り方ができたらなと思った。

訪問先が、市役所や保育園など社会人が相手ですごく忙しい印象があり、ぴりぴりしているのかと思っていたが、どこに訪問してもやさしく親切な対応だったのでとても良い職場だと感じた。

保育園では、子供たちが懐いてくれ、先生と呼んで慕ってくれていたのが保育園に就職したいとも思った。

何より驚いたのが、豊橋市民の人はみんなトヨッキーを知っていたので、しっかりと町に浸透したゆるキャラなのだと感じた。

豊橋市民だけではなく、近くの豊川や隣の浜松の人たちにも認知されていくのが、これからの課題だと感じた。(武智 椋也)

体調管理がしっかりとできていなくて、体調を崩してしまったので、ちゃんと健康管理ができたらよかった。また、プロジェクトを始めたばかりの頃はほとんど自主的に動く事ができず、周りのメンバーについていっただけだったが、プロジェクトを進めていくうちに、自分のできる事を考えて行動に移せるようになった。しかし、電話や発表

などの苦手な事を避けて、あまり手伝える事ができなかったのも自分から行動できるようになればもっとよくなったと思う。(坪田 紳吉)

スケジュール管理ができてなく、休んでしまったことがあった。訪問するアポ取りを始めるのが遅かったため予定が後半に固まってしまいスケジュール管理が難しくなった。また、プロジェクトを通し何も決まってないところからアイデアを提案し意見を絞り出していくことの大変さを痛感した。プロジェクトでは同世代で意見を出し合うが会社では年齢も立場も違う人とプロジェクトを進めることもあるかもしれない。お互いが納得する意見が出るのは難しく思えた。だか、今回の経験を活かして頑張りたい。(神藤 賢護)

ウミガメ保護プロジェクト

中野プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

篠田真輝(21123104),
石原奨大(21217103),
山内一生(21217127),

2. 連携先企業・組織

豊橋市役所 環境部 環境保全課

3. プロジェクト実施の背景と目的

背景

- ✓ 地域の環境保護活動を担う、
- ✓ 表浜海岸はアカウミガメが上陸・産卵に来る日本有数の海岸であること、
- ✓ 豊橋市のウミガメ保護活動に協力すること、
- ✓ 保護活動理念に賛同したため。

目的

1. ウミガメの生態の理解を深め、保護啓発活動を行うこと、
2. オリジナルショートムービーの作成とネット上の公開、
3. 東三河・遠州地域の小学校での模擬授業の実施、
4. 活動内容および作成資料の市役所環境保全課へのフィードバック。

4. 実施計画

春

- ✓ プロジェクトテーマ設定
- ✓ 市役所・NPOのイベント参加 … ✓自然観察会(7.19 早朝)、竜宮探検(7.26 夜間)、
- ✓ ボランティア保護活動 … ▲海岸清掃
- ✓ ウミガメの生態と現状を理解するための勉強会 … ✓毎週実施

秋

- 勉強会(継続) … ✓模擬授業PPTの作成(10月中)
- ショートムービーの作成 … ✓模擬授業に利用、✓環境ビデオコンテストに投稿(12月中)
- 小学校での模擬授業 … ✓三谷東小学校4年生2クラス(11.18)、✓鷹丘小学校4年生4クラス(12.2)
- 活動報告レポート(市役所向け)の作成 … ✕作成中
(✓終了、▲途中、✕未達成)

5. 実施結果

7月19日「アカウミガメが来る表浜海岸の自然観察会」の参加、7月26日「竜宮探検～表浜のアカウミガメ調査委員養成講座～」の参加。10月～12月には、小学校での模擬授業やショートムービーの作成などを行った。

特に、11月以降は以下の作業を行った。

- ① 11月18日 三谷東小学校4年生2クラスに向けて模擬授業を実施。
- ② 12月2日 鷹丘小学校4年生4クラスに向けて模擬授業を実施。



模擬授業風景・蒲郡市立三谷東小学校



模擬授業風景・豊橋市立鷹丘小学校

- ③ 12月11日 ショートムービーを Youtube にアップロード。
- ④ 豊橋市環境ビデオコンテストに投稿（現在応募中）

今後、活動報告を兼ねて豊橋市役所環境保全課を訪れる予定。

6. プロジェクトの成果

達成率は、60%程度だったと思う。

- ・勉強会を通してウミガメの生態と自然環境に関する理解を深めた。
- ・長谷川君の技術協力を受け、ショートムービーを作成した。
- ・その結果を、模擬授業の形で将来の世代にフィードバックした。特に、積極的に質問を浴びせかける小学生を前にした模擬授業は、とても良い経験になったと思う。
- ・模擬授業に際しては、昨年度の学生が作成したプリントも利用した(写真参照)。
- ・作成動画を youtube に投稿した。530 運動環境協議会から、以下のコメントを頂いた。

「コンテストに応募してくれてありがトン！ウミガメの赤ちゃんが海に向かって頑張って歩いてく姿は感動するね。20年後にも、きれいな海岸でウミガメちゃんをお迎えできるように、みんなで530運

動がんばろう～！」



他方で、ボランティア（清掃）活動が不十分であり、知識の不十分さから十分に質の高い授業ができたとも言えない。

7. プロジェクトの考察

(21123104) 篠田真輝

私は、今回のプロジェクトで学んだことは、去年の先輩方が基盤を作っておかげもあり、今年はその基盤の部分+αのことをしました。小学校の生徒さんたちにウミガメのことをもっとしてほしいと。生徒さん方に言葉をいただいた際に、模擬授業を行ってよかったと考えました。

(21217127) 山内一生

去年の先輩が残してくれたテーマを引き継ぎ活動した。また、ウミガメの保護活動をするることによって少しでも産卵にくるウミガメが増えていき、豊橋の活性化につながればよいと思い、このテーマは打ってつけだと思った。

(21217103) 石原奨大

今回のテーマは去年の先輩を引き継いだ。先輩を引き継いだため去年の基盤+去年できなかった項目を行った。勉強不足な面もありながら目標であった小学校での模擬授業を行うことができた。小学生も盛り上がってくれてとても有意義なものになったと思います。

のんほいパーク盛り上げ隊！！

三輪・山口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

青木威一郎 (21217101), 土屋 翔太 (21217117),
宮崎 輝 (21217125), 竹内 亨仁 (12345678),
指導教員：三輪多恵子, 山口 満

2. 連携先企業・組織

- ・ 豊橋総合動植物公園（愛称：のんほいパーク）
- ・ 公益財団法人 豊橋みどりの協会

3. プロジェクト背景と目的

豊橋市が運営する豊橋総合動植物公園（愛称：のんほいパーク）は、シティープロモーション活動の一環として『のんほいパーク 100 万人プロジェクト』を掲げ、入場者数の拡大に取り組んでいる。本プロジェクトでは、24 年度から継続して“のんほいパーク”の広報活動への協力を行ってきた。

昨年度の活動を通じて、のんほいパークから「若者世代への広報活動を行って欲しい」との要望があり、今年度は特に若者世代をターゲットとした広報活動を行った。また、これまでの活動経験から、若者世代に対する宣伝には SNS が有力であることを確認しており、今年度の主な情報発信ツールとして SNS を利用した。なお、SNS の投稿の中でも動画に対する反応が良いことから、今年度は特に動画投稿に力を入れることとした。

さらに、今年度の新たな取り組みとして、

- ① 発信するコンテンツの充実
- ② プロジェクト Web サイトへの誘導

を試みた。プロジェクト活動を通して、効果的な情報発信に対する理解を深めることを目標とした。

4. 実施計画

昨年度からの継続活動として、稼働中の SNS アカウント (Twitter, Facebook, YouTube) を引き継ぎ、継続した情報発信を行う。

また、昨年度 CMS で作成した Web サイトを引き継いで管理・運営を行う。今年度は特に、Web

サイト内のコンテンツを整理・追加し、閲覧者にとって有益でわかりやすいサイトへの改善を行う。

また、Web サイトに閲覧者を誘導するための新コンテンツとして、

- ・ のんほい動物データベース
 - ・ のんほい動物時計
 - ・ のんほい周辺マップ (Google サービス利用)
- 等を作成し、のんほいパークファンや動物ファンの取り込みを行う。

プロジェクト実施スケジュールを表 1 に示す。

表 1 平成 26 年度プロジェクト実施スケジュール

月/日	活動内容 (学外訪問等)	(学内)
5/19	協力依頼 ㊦ 昨年度報告・今年度予定 写真撮影 (5/11, 28)	SNS, Web サイト継続
6/12 19 25	取 材 ㊦ 協力依頼 ㊦ 昨年度報告・今年度予定 取 材 ㊦ セタイベント 写真撮影 (6/24)	動画 (短) 作成開始 → 随時アップロード
7/30 "	取 材 ㊦ 食虫植物イベント 依 頼 → 3 大学ポスター掲示 写真撮影 (7/3, 10, 24, 27)	動物データベース開始 動物時計作成開始 ナイトガーデンポスター作成
8/11 13 17	取 材 ㊦ ナイトガーデン " " " "	
9/ 5 30	" " " " 打合せ ㊦ 学祭アンケート 写真撮影 (9/24)	学祭アンケート作成 学祭パンフレット裏作成 学祭ポスター作成
10/20 25-26	参 加 ㊦ ギャラク=駆除体験 創 造 祭 → アンケート実施 写真撮影 (10/2, 9, 16, 29)	ギャラク=報告書作成 学祭アンケート集計
11/10 27	報 告 ㊦ ギャラク=駆除体験 取 材 ㊦ 飼育員インタビュー 写真撮影 (11/5)	アンケート報告書作成 アンケート報告書送信
12/ 4	意見交換 ㊦ ギャラク=企画 写真撮影 (12/6, 21, 23)	発表準備
1/11	写真撮影 (1/11)	

注：㊦は“のんほいパーク”，㊦は“豊橋みどりの協会”

2 月末まで

5. 実施結果

< 5. 1 > SNS の活用

SNS による情報発信は 2013 年度から継続してきた活動である。昨年度までの実績から SNS の情報拡散ツールとしての有効度は高いことが判明していたため、今年度も活動を継続した。

SNS (Facebook、Twitter) を活用し、取材を通じて収集した写真や動画、園内情報、イベント情報等を、のんほいパーク利用者や若い世代に向けて発信することに取り組んだ。

(1) Facebook

2013 年度の活動において、プロジェクトで利用するための Facebook Page を作成している。既存のファン ([いいね] を押ししてくれた閲覧者) に継続して情報を届けるため、今年度もこの Facebook Page を引き継いで運営していくこととした。

今年度、春学期は週 1 件、秋学期は週 2 件の割合で、プロジェクトメンバー 4 人でローテーションを組んで記事の投稿を行った。

表 1 に Facebook の投稿について、昨年度と今年度 12 月 9 日時点の実績を比較したものを示す。活動の成果として、216 人(前年度から 114 人増)のファンを獲得することができ、また、週平均で 550 人(前年度比 164%) のユーザーに情報を届けること(リーチ)ができた。さらに、Facebook インサイトから年齢層別リーチ内訳を調べると、18 歳～34 歳の世代が全体の約 84% (前年度比 113%) 占めていることがわかった。これらの結果より、SNS ツールを用いた若年層向けの情報発信について、昨年度より大きな効果を得ることができたと考えている。

(2) Twitter

Facebook Page と同様に、2013 年度に作成した Twitter アカウントを継続利用して情報発信を行った。Twitter は、主に、のんほいパーク訪問時に現地情報をリアルタイムで発信するために利用した。その他、Twitter の持つ連携機能により Facebook への投稿記事も発信されている (FB 連携ツイート)。

Twitter を利用した広報活動の成果を表 2 に示す。12 月 9 日時点で 237 人(前年度から 133 人増)のファン(フォロワー)を獲得できた。その

表 1 Facebook 広報活動の結果 (12/9 時点)

	前年度	今年度
総いいね数	102	216
平均いいね数	11	18
週平均リーチ数	335	550
動画投稿数	11	14

表 2 Twitter 広報活動の結果 (12/9 時点)

	前年度	今年度
全ツイート	334	302
純ツイート	83	83
FB 連携ツイート	137	105
リツイート (RT)	108	103
@ツイート (返信)	6	11
フォロワー	104	237
被リツイート	34	248
被お気に入り登録	30	218
@ツイート	6	17

他、個々の投稿に対して被リツイート数が 248 件(前年度比 729%)、被お気に入り登録数 218 件(前年度比 727%)、@ツイート数 17 件(前年度比 283%) と、ユーザーから好意的な反応を得ることができた。

Facebook と同様に、昨年度より大きな情報拡散効果を得ることができたと考えている。

< 5. 2 > 動画の活用

昨年度までの活動状況から、ユーザーの動画への関心が高いことが判明していたため、動画投稿サイト (YouTube、Vine) や SNS (Facebook、Twitter) を利用して、動画の投稿を積極的に行った。なお、動画の編集には Adobe Premiere Pro や Corel Video Studio X4 を使用した。

動画投稿サイトでは、動画に登場する動物名等をタグとして登録することで、投稿サイト内の検索機能を活用できるように工夫した。同様に、SNS の投稿記事では紹介文にハッシュタグを付けることで、検索への対応を行った。

2014 年 12 月 9 日時点で Facebook に投稿した動画は 14 本である。投稿した動画は内容によって再生数に大きく差が出ており、今後は多くの閲覧者に好まれる(反応される)動画や紹介文について分析・工夫が必要であると考えている。

＜5. 3＞ 新しいコンテンツの制作と Web サイトの充実

SNS の閲覧者やのんほいパークファンをプロジェクト Web サイトに誘導するため、過去のプロジェクトで作成した Web サイトの再整備を行った。特に、閲覧者にとって“有益”で“役に立つ”サイトであることを目標とし、サイト内で利用できる新しいコンテンツの制作に取り組んだ。

(1) プロジェクト Web サイト

プロジェクト Web サイトは2012年度に無料サーバを利用して作成し、その後、2013年度に学内のサーバへ移行したものである。当初は HTML で作成していたが、学内サーバに移行する際に CMS を利用したサイトに変更している。

今年度は、プロジェクト Web サイトの認知度を向上させる目的で、SNS のユーザーを Web サイトへ誘導するために閲覧者にとって有益なコンテンツを制作することにした。

また、これまでの活動で蓄積してきた“のんほいパーク”の情報や、飼育員インタビュー等をわかりやすく提示するために、メニューの構成等を見直し、サイトの再構築を行った。

(2) 動物データベース

取材活動で得た情報や、“のんほいパーク”から提供された動物たちの情報を整理し、Web サイト上で利用できるデータベースの制作を行った。データベースへの登録情報は、動物たち個体識別がしやすいように写真や性別等を明記した他、公式情報へのリンクや、公式サイトで提供されている「どうぶつえん通信」へのリンクを設ける等の工夫を行った。

図 1 にデータベースの表示例を示す。大量の情報をデータベース化するのは大変だったが、今後の Web サイトのメインコンテンツになったと感じている。

(3) 周辺地図

Google が展開するマップ機能を利用して、のんほいパーク周辺情報を整理し、Web サイト上に表示できるようにした (図 2)。表示内容は、3色のマーカーで、飲食店 (黄色)、コンビニエンスストア (青色)、前売り券を販売しているコンビニエンス

チャッピー

公開日:2014/07/26 最終更新日:2014/12/04



種類	ホッキョクグマ
名前・性別	チャッピー (♂)
生年月日	1993年12月14日
来園年月日	2009年2月12日
出生場所	ドイツ・ライプチヒ動物園
公式情報	http://www.toyohaku.gr.jp/tzb/map/zoo/012.html
どうぶつえん通信 (公式)	Vol.108「ただいまマイクのテスト中」(2014年7月3日) Vol.91「北極ですよね?」(2012年11月27日) Vol.81「冬眠?冬ごもり?」(2011年12月21日) Vol.72「ホッキョクグマのお嫁入り」(2011年4月27日) Vol.55「夏の贈り物」(2009年9月16日) Vol.17「ダイビングだけじゃない!？」(2007年5月21日)
動画	ホッキョクグマのダイブ ウトウトするチャッピー

図 1 動物データベース (Web サイト)

⇒ [のんほい周辺地図 by Googleマップ](#)



図 2 のんほいパーク周辺情報の整理

ストア (赤色) に分類している。

なお、前売り券販売中のコンビニ情報は、検索キーワードから”のんほいパーク”、”前売り券”の二言に強い結びつきが確認されたため、わかりやすいように色分けを行った。



図 2 動物時計

(4) 動物時計

Web サイトを訪れた人たちへのサービスコンテンツとして、時間ごとに“のんほいパーク”の動物たちの画像が表示される「動物時計」の制作を行った(図3)。制作にはJavaScriptを使用しているため、特にアプリ等をダウンロードせずにWebブラウザ上で動作が可能である。

この動物時計は、のんほいパークのファンや動物好きのネットユーザに喜ばれるように、動物名、個体名、性別、等が表示されるように作成している。さらに、動物データベースへのリンクを付けることでより“のんほいパーク”の動物たちの情報が拡散するように制作した。

< 5. 4 > 印刷物の作成

のんほいパークで開催される夏のイベント「ナイトガーデン」を宣伝するために、ポスターを作成し、学内や協力依頼した他大学(豊橋技術科学大学、愛知大学)に掲示した。学生向けということで、子供向けのイベント情報をあえて掲載せず、ライトアップされた観覧車を背景としてシンプル



図 3 作成した印刷物

なデザインで作成した。

その他の印刷物として、学園祭のアンケート協力を依頼するポスターや、学園祭パンフレットの表紙裏面を作成した(図4)。

< 5. 5 > 学祭におけるアンケート実施

10月25日、26日に行われた創造祭では、昨年に引き続き“のんほいパーク”に関するアンケート調査を行った。アンケートでは“のんほいパーク”にどれだけの人が訪れているか、また、どのような媒体を通してパークに関する情報を得ているのか、等“のんほいパーク”から依頼された質問項目を中心として調査を行った。

のんほいパーク盛り上げ隊!

のんほいパーク についてのアンケート

(1) あてはまる番号に○をつけてください。

性別: ① 男性 ② 女性

年齢: ① 10歳未満 ② 10代 ③ 20代 ④ 30代
⑤ 40代 ⑥ 50代 ⑦ 60代 ⑧ 70代以上

子ども: ① 有 ② 無 子どもの年齢: _____ 歳 _____ 歳

住所: ① 豊橋市内 ② その他 (_____ 県 _____ 市)

(2) この1年間に“のんほいパーク”を訪れた回数を教えてください。

① 0回 ② 1回 ③ 2回 ④ 3回
⑤ 4回 ⑥ 5回 ⑦ 6回以上

(3) “のんほいパーク”を訪れる場合は、どなたと訪れますか?

① 家族 ② 友達 ③ ひど

(4) “のんほいパーク”を訪れる場合は、どのような方法で訪れますか?

① 自動車 ② 電車 ③ 自転車 ④ 徒歩 ⑤ その他 (_____)

(5) のんほいパークを取り上げた番組等で、見た(聞いた)ことがあるものについて、すべて○をつけてください。

映画 ① 旭山動物園物語“4”の空をとぶ ② ヘアズ ドア ③ のんほいTHE MOVIE
TV ④ (番組名: _____)
ラジオ ⑤ Z/FM
電車 ⑥ 中野の広告
雑誌 ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(6) 上に挙げた番組を見て(聞いて)、「のんほいパークに行こうかな」という気持ちになりましたか?

① 強く思った ② 思った ③ あり思わなかった ④ 思わなかった
⑤ ひとつも見て(聞いて)いない

(7) のんほいパークについて、普段、情報入手する方法があれば○をつけてください(複数可)。

① 広報とよし ② インターネット (HP, Twitter, 等) ③ 公式チラシ ④ 新聞
⑤ コミュニケーション等の公共機関 ⑥ 電車中野のポスター ⑦ 友人、知人、家族、など (口伝)
⑧ のんほいパークについての情報を印刷したものはなし
⑨ その他 (_____)

裏面に続きます

図 5 アンケート用紙 (表面)



図 4 アンケート実施の様子

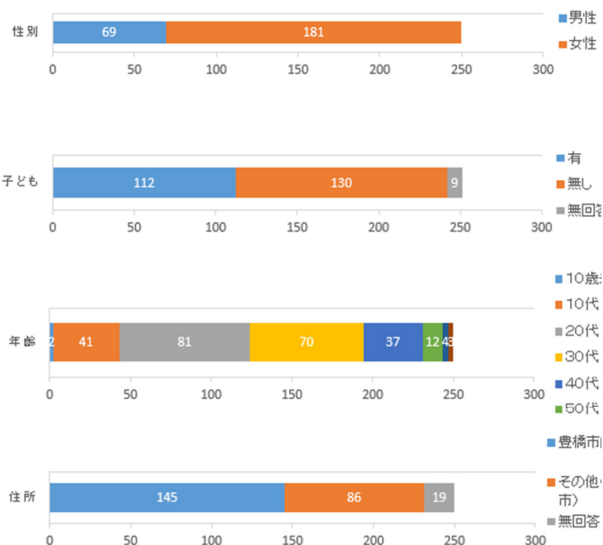


図 6 アンケート回答者の内訳

今年は人通りの良い屋外でアンケート活動を実施したため、昨年より多くの方に回答してもらうことができた。また、子供連れの方と若い方を中心に声掛けを行ったため、ターゲットとしている20代～30代の方を中心に多くの回答を得ることができた。アンケート回答者の内訳を図7に示す。

なお、のんほいパークについて、どこから情報を得ているのかという質問に対し、昨年は約半数の人がTVからと回答したが、今年は広報とよはしやネット(Twitter, HP等)から情報を得ていると回答した人が多かった。この結果から、SNSなどを利用したネットや紙媒体での情報発信は効果的であることが分かった。

また、本プロジェクトの認知度を知るために昨年同様盛り上げ隊に関する質問も行ったが、約8割の方が「知らない」と回答した。この結果から、盛り上げ隊の広報活動も行った方が良いと感じた。

アンケート結果は、昨年同様プロジェクトメンバー全員でExcelを利用して集計作業を行い、のんほいパークへ報告した。

<5. 6> その他

(1) 食虫植物イベント事前取材

みどりの協会から依頼され、食虫植物展の事前取材を行った。普段見られない植物園のバックヤードを見学しながら、食虫植物展に展示する植物とその特徴等について情報を提供して頂いた。

これらの情報をイベント直前にSNSで発信し、



図 8 食虫植物イベントに関する事前取材

集客率をアップすることを狙いとした。結果として、事前に投稿したFacebookでの投稿ではリーチ数211、いいね数13件、YouTubeでの動画投稿では57回の視聴があり、一定の情報拡散効果が得られたと考えている。

(2) ザリガニ駆除体験

“のんほいパーク”の植物園にあるスイレン池では、繁殖したザリガニがスイレンの根を切ってしまうため、排水して一斉駆除を行っている。

ザリガニの掴み取りは、子供が好きな遊びのひとつであるため、大学生(素人)の目線で、駆除作業のイベント化の可否について検討して欲しいと依頼を頂き、実際にザリガニ駆除作業の体験を行った。その後、メンバー内で議論して感想や意見書を作成してみどりの協会へ提出し、担当者との意見交換を行った。

このような活動は、我々と連携先との信頼関係の構築に大きく結びついていると考えている。



図 7 ザリガニ駆除体験の様子

(3) 飼育員インタビュー

昨年度までの活動の継続として、動物の飼育を担当している方へのインタビューを行った。この活動は、動物への興味関心、のんほいパークの宣伝、本プロジェクトのファンを増やすことを狙いとして、プロジェクトを開始した 2012 年度から継続して行っている。今年度は、アフリカ園を中心として、カバ・サイ・チンパンジー・シマウマの各担当者にインタビューさせて頂いた。インタビューの様子を図 10 に示す。

なお、インタビューで得られた情報は、プロジェクト Web サイトに掲載している。



図 9 飼育員インタビューの様子 (シロサイ)

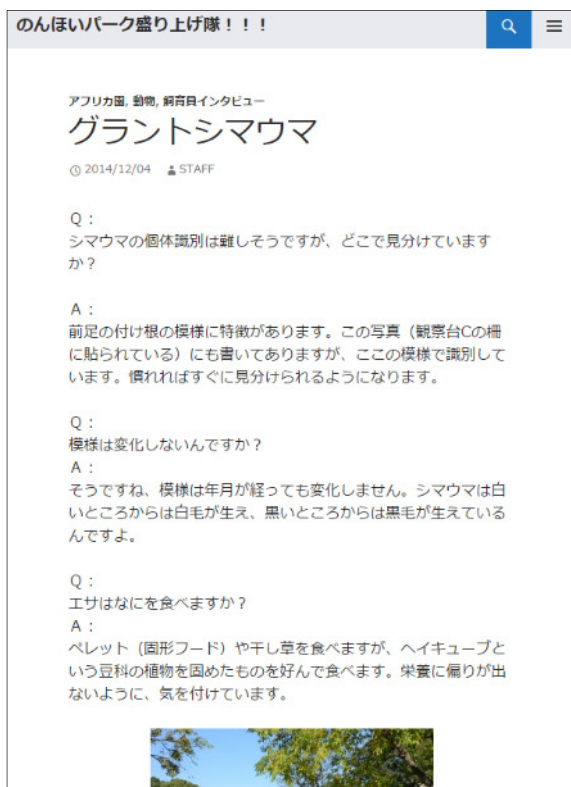


図 10 飼育員インタビューの Web 公開

6. プロジェクトの成果

本プロジェクトでは、2012 年度からの活動を継続し、様々な方法を用いて“のんほいパーク”の情報発信を行った。

その結果、若者向けの情報拡散を目的とした SNS では、昨年よりも少ない情報発信数ながらも、多くのファンを獲得することができた。また、学園祭パンフレットの表紙裏に活動の宣伝ページを設けたことや、のんほいパークのイベントに合わせてポスターを制作して豊橋市内の他大学（豊橋技術科学大学、愛知大学）へ掲示、宣伝することができた。

また、プロジェクト Web サイトへの閲覧者の誘導を目的として、動物データベースや動物時計、周辺マップ等の新しいコンテンツを制作した。特に、動物データベースには、2014 年度時点のほぼ全ての動物情報を登録することができた（個体識別の難しい動物はまとめて掲載した）。

その他、食虫植物展示やザリガニ駆除に関してみどりの協会から取材依頼や参加依頼を頂き、取材や意見交換をすることができた。これにより、連携先との信頼関係が強化されたと感じている。

年間を通して、SNS による継続的な情報発信を実現するために、読み手を意識した掲載写真の選択や記事の執筆等を心掛けた。苦労もあったが、着実に SNS のフォロワー数の増加へと結びつき、効果的な広報活動への理解が深まったと感じている。活動全体として、SNS による情報発信、プロジェクト Web サイトの整備、等を通じて広報活動への意識が深まったことと同時に、情報発信する際に、実際にイベントを体験することや、取材を行うことの重要性を学んだ。

7. 所見

21123121 竹内亨仁

私は本プロジェクトを通して、チームの中の各個人が、どのような役割や意思を持って活動するかを観察し、そして自分のできることや役割を統合させてチームとして働く力を身に着けるように努めた。それは主に、メンバーの性格や行動の傾向・連携先の方との接し方・プロジェクトを進めるうえでの役割分担の三つを考えるようにした。

実際の能力としては、私はイラストレーターを使ったことがあり、その知識を深めることもテー

マであった。効果的な文章構成にするためにシンプルに作ったポスターや、写真を加工し、見やすさを重視した広告など、その絵がどのように映えるかを実験的に行った。

活動全体で、各個人の行動がメインであり、共同的な作業を教員に任せる面が多かったと感じている。その分学生が主体の活動にしかない、積極性やチャレンジ性があまり見受けられなかったことが悔いとして残っている。さらに SNS の広告の効率性を高めることと、プロジェクト活動の生産性（個人のスキルから団体でのまとまった力を引き出す能力）を高めることとの接点に対する視野を持つことができなかつたことに私は反省点があると考えている。

21217101 青木威一郎

私は、今回のゼミ活動にて動画作成と現地訪問を行うことが多かった。動画作成はソフトウェアに不慣れな点が多く、あまり動画を作成できなかった。自分から提案した動画作成を完遂できなかった点は反省したい。現地訪問にて職員の方々と意見交換を行う機会があった。意見交換の場では先生や他のメンバーに頼り切ってしまう場面が多く、自分の意見を相手に伝えられなかった。その原因として、自信不足がある。十分な準備がなく、相手の話を理解するだけで精一杯な場面が多く、コミュニケーションを行えなかった。これまでの点を反省し、コミュニケーション能力を養っていく。

21217125 宮崎輝

私は、今回のプロジェクト活動でメールでのアポイントメントをとること、のんほいパーク、みどりの協会への取材、SNS の投稿などを行った。アポイントメントをとるときの文章作成や、SNS での文章、写真選択を行って、どんな相手にどんな情報を伝えたいのかを考えて文章を作ることが大切だということが学べた。アポイントメントでは相手に失礼のない文章で、要件をわかりやすくすること SNS では読む人がのんほいに行ってみようと思えるような言葉や写真を選択することが大切だと感じた。

また、アンケート活動での呼びかけ、のんほいパークの方たちとの打ち合わせなどで緊張してし

まい、積極的によびかけや質問ができなかつたため、今後は普段から積極的に質問や意見を言うよう心掛けたいと思う。

21217117 土屋翔太

私は今回のプロジェクトでは主に動物時計の製作を担当した。多くの人たちに利用してもらえよう、魅力的なデザインや便利な機能を考えて製作を行おうとしたが、とにかく知識・技術不足でなかなか作業が進まなかった。先生方の協力のおかげで最低限のものはできたと思っている。デザインやプログラムについての知識を学んでおく必要があると感じた。

また、今回の活動で初めて SNS を利用したがこちらは非常に良い経験になったと思う。仲間とのコミュニケーションツールとして利用したり、画像や動画を張り付けて情報の発信を行うことができたりと非常に便利だなと感じた。この先 SNS を利用する機会は多くあると思うので、今回利用することができて良かったと思っている。

今回のプロジェクト活動では、とにかく全体的に力不足を実感した。今回経験したことを活かし、自分を高めていきたいと思う。

豊橋市における外来生物影響調査プロジェクト

和田プロジェクト

1. プロジェクトメンバ

伊藤紘基(21217105), 白井康太(21217112)
鈴木康介(21217113), 于 輝 (21417301)
指導教員：和田剛明

2. 連携先企業・組織

豊橋総合動植物公園 豊橋市自然史博物館
主任学芸員 坂本博一氏

3. プロジェクト背景と目的

日本には2,000種を超える外来生物が生息しており、農作物や生態系に重大な影響を及ぼしているものも少なくない。豊橋市でもその一部が確認されているという話も聞くが、具体的にどのような生物がいて、どれだけ被害が出ているかといったことまでは、地元に住む自分たちもあまり知らない。

このため、豊橋市に生息している外来生物について調査し、現状や外来生物がもたらす影響をまとめ、地域住民に報告して問題意識を高めることで、地域に貢献することを目的とする活動に取り組むこととした。

4. 実施計画

4月 ミーティング
5月 資料調査・計画決定
6月 坂本氏インタビュー
7月 活動のまとめ、中間報告
8月 資料調査・外来生物の影響の実態の整理
9月 水抜きへの参加・取材
10月 ポスター作製開始
11月 配布許可申請
12月 ポスター印刷依頼、報告会
1月 活動報告資料作成

5. 実施結果

最初に基礎的な知識を得るために、インターネットや図書館などの資料をもとに、外来生物の種類や影響についての情報を調べた。また、豊橋市役所ウェブサイト、新聞記事やブログなどを検索して豊橋市における目撃例や影響について下調べをした。

この中で、豊橋市自然史博物館の主任学芸員の坂本氏が、豊橋市における外来魚の生息状況や影響についての研究をしていることが分かった。このため、外来生物の中でも外来魚にターゲットを絞り、坂本氏に専門家として現状について教えていただき、活動についてのアドバイスをいただきたいと、連携・協力を依頼した。

坂本氏にインタビューをした結果、まず、現在豊橋市で生息数が多い外来魚は、ブラックバス、ブルーギル、カダヤシの3種だということがわかった。坂本氏からの情報とウィキペディアの記事を合わせて整理すると、以下ようになる。

まず、外来種という言葉はその語感から外国から持ち込まれた生物というイメージをもたれることが多いが、本来は外国に限定して適用される概念ではない。移入元が国外か、同一国内の他地域であるかによって、国外外来種・国内外来種と区別する。しかし、現実には「侵略的外来種」あるいは「特定外来種」とされている動植物は全て国外外来種であり、国内外来種が「侵略的～」「特定～」と見なされている種は一例も存在しない。

ブラックバスは大型の肉食魚で元からいた魚を食べてしまう。全種とも自然分布域は北米大陸。内3種が日本国内で移入定着している。北米では五大湖周辺からミシシッピ川流域、メキシコ国境付近までの中部および東部、フロリダ半島などに広く分布し、汽水域でも生息可能である。原産地では食用淡水魚として流通しており、赤星鉄馬によりオオクチバス、コクチバスが日本に移入された大きな目的の一つも食用である。

ブルーギルは小型だが、その分、浅瀬にまで入ることができて、小さな魚や稚魚も食べてしまう。また、雑食性で、他の魚の住処やえさになる水草・プランクトンまで食べてしまうため、影響が大きい。日本への移入は、1960年に当時の皇太子明仁親王が外遊の際、アイオワ州グッテンバーグで捕獲されたミシシッピ川水系原産の15尾をシカゴ市長から寄贈され、日本に持ち帰り、水産庁淡水区水産研究所が食用研究対象として飼育したのち、1966年に静岡県伊東市の一碧湖に放流したのが最初とされていた。

カダヤシはメダカのような魚で、数が増えているが影響についてはまだわからないということだった。カダヤシのもともとの分布域はミシシッピ川流域を中心とした北アメリカ中部だが、ボウフラを捕食し、また水質浄化に役立つとして、明確な根拠はなかったものの世界各地に移入された。移入されたカダヤシは強い適応力で分布を広げ、今や熱帯・温帯域の各地に分布する。日本に分布するカダヤシは、1913年にアメリカから、また1916年に台湾経由で持ちこまれた。

これらの外来魚に対する対策としては、ため池や用水路にいるものは、冬や春前に計画的に水抜きして駆除しているとのことである。ただし、公園の池にいるものは水抜きすることができないので駆除しにくい。さらに、川にまで出てしまうと駆除は難しく、課題となっている。

また、将来的な外来魚の影響について考えたときに、環境に適応して繁殖できない外来魚は自然に減っていくため、現在の生息数とともに、それが増えるのか、減っていくのか長期的な変化をみていくことが必要になる。このため、坂本氏はため池の水抜きの際に外来魚の生息数を数えるなど、継続的な調査をしている。

以上の情報をもとに、自分たちの具体的活動として、現状と取り組みの実態を把握するため、外来魚調査隊、水抜きに参加して外来魚駆除の現場に立ち会うこととした。植田大池での水抜きでは、自然史博物館の館長、地元のボランティアの人たちの中で行われた。植田小学校の生徒たちは学外授業という形での参加となり館長から植田大池での在外生物の詳しい生態について説明を受けた(図3)。説明対象となった在来生物は日本全域に生息している鯉、ヘラブナ、鰻で外来生物ではミ

シシッピアカミミガメ、ブラックバス、ブルーギルなど多種多彩な生物たちである。

水抜きのほうでは池の水を抜き残った水たまりの中から巨大な4ツ手網とショベルカーなどを使い在外生物などを振り分ける作業が行われた。在来種と外来種のバケツがあり在来種の生物たちはまとめて別の池に移される。外来種もまとめて殺処分という形になる。予想に反して外来種に比べて在来種のほうが多かった。

向山大池では自然史博物館の坂本氏主催の外来魚調査隊が行われた。この活動の目的は向山大池での外来種の調査を目的にし、地域の人々を対象に小学生、保護者などが集まった。外来の調査の手段としてはタモ、四ツ手網、水中に投げ込む型の網などを使用して外来魚を捕獲した。捕獲に成功した生物はブラックバス、ブルーギルの外来種とモツゴ、フナ、メダカの在来種である。捕獲した生物は在来種、外来種問わず坂本氏が説明した。向山大池の在来種は自然史博物館へ持ち込まれ、外来種は殺処分という形になった。向山公園は植田大池と違い外来種が多く見られた。

植田大池での水抜きでは、予想に反して外来種に比べて在来種のほうが多かったが、向山大池での外来魚調査隊では外来種が多く見られた。



図1 外来魚調査隊の様子 (07/23)



図2 水抜きの様子 (09/29)



図3 館長が小学生に説明する様子 (09/29)

10月からは、坂本氏から聞いた話と自分たちの調査・取材結果をもとに、子供向けのポスターの作成に着手した。完成した原稿について、坂本氏にチェックしてもらった上で、豊橋市役所に掲示場所と注意事項・手続きについて許可を取ることとした。豊橋市役所ホームページから掲示物についての問い合わせ先を調べると豊橋市役所都市計画課が窓口となっているとのことだったので、都市計画課宛てにメールで申請したが、メールでは現物のポスターがなくよく分からないとのことなので市役所に足を運んだ。

都市計画課で趣旨説明をした上で、作成したポスターを池のある公園に掲示したいことを伝えると、公園に掲示するには公園緑地課の許可が必要と分かったので、続いて公園緑地課を訪れた。公園緑地課では、雨水の影響を受けないように加工

すること、周囲の景観を損ねないように派手な色使いを抑えること、連絡先をポスターに表記することが必要だと指摘された。これをうけて、ポスターに連絡先を入れ、色を地味なものへと変更し(図4)、ポスターの作製にとりかかることとした。

外来種ウォッチ

外来種とは
 外来種とは、その場所にもともしなかった生物のことなんだよ！
 その中でも私たちの住んでいる豊橋にはさまざまな外来種がいるんだよ！
 外来種が増えすぎるとその場所に元々いた生き物がどんどん食べられてしまい、
 これから先の未来にはその生き物たちがあきらまなくなってしまうかもよ！？

豊橋に生息する外来種

オオクチバス(特定外来生物) 通称: ブラックバス
 体長: 30cm~50cm
 豊橋市内では一部の河川やため池で生息確認
 口が大きくて肉食で食欲が旺盛

ブルーギル(特定外来生物)
 体長: 20cm前後
 豊橋市内では一部の河川やため池で生息確認
 体は大きびみだが雑食(何でも食べる)で食欲が旺盛

ミンシツピリアミガメ(要注意外来生物、県指定移入種)
 通称: ミドリガメ
 体長: 20cm~30cm
 多くのため池や水辺などで単体あるいは集団で確認
 雑食で健康あり汚染にも強く繁殖力も旺盛

水抜きについて
 現在豊橋市では、年に数回水を抜いて外来種の駆除、調査をやっているよ！！
 外来種を駆除するのはとても大変だけど、元からいた生き物を守るためにとても大切な事なんだよ！！
 外からの見学もできるから興味のある子は参加して見てね！！
 写真は実際の水抜きの作業の写真だよ！！
 お問い合わせ先: b1217105@sc.sozo.ac.jp
 豊橋創造大学 伊藤まで

図4 作成したポスター (10/17)

ポスターの作成では、イメージ広告の菅沼氏に協力を仰いだ。ポスターは池の周りのフェンスなどの屋外に掲示することを想定していて、破れにくく雨風にも多少耐えられるものが良いという条件を菅沼氏に相談した結果、PETを使用することを勧められたのでPETを使ってポスターを作製していただいた。直接お話しをする機会はなかったが、電話で材料、印刷枚数、納期などの相談をしてこちらの要望通りのポスターを作製していただいた。

完成したポスターを手に再度豊橋市役所公園緑地課を訪れ、ポスターを見てももらったところ、ポスターに“水抜きについて”という項目があり、水抜きのことが書いてあると市民に“この公園の池で水抜きが行われる”という誤解が生じてしまい、問い合わせがきてしまうということで、許可が下りなかった。

そこで、公園ではなく水抜きが行われる池の周

りにあるフェンスに掲示することを考え、農地整備課を訪れた。農地整備課では、会議で検討することなので、連絡先を伝え、連絡を待った。しかし、農地整備課では、ポスターのタイトルである、“外来魚ウォッチ”では、“この池で外来魚を見ることができる”という印象を与えてしまうことと、水抜きが行われた植田大池は工事中で掲示したところで誰も見ないとのことで、許可が下りなかった。

6. プロジェクトの成果

今回のプロジェクトをとおして、自主的に情報を集めるようになった。豊橋市自然史博物館の主任学芸員、坂本博一氏から伺った情報を自分たちで整理し、外来種の中で、外来魚の影響を理解することができた。外来魚が多くなってしまったら、在来魚に対して、不利になってしまう。例えば、在来魚の食べ物がなくなったり、在来魚の種類がなくなったりなどの影響がある。外来種に駆除しないと、将来的に、環境に対して影響にもあるということが分かった。

プロジェクトを実施する中で、チームメンバーたちの交流も増えてきた。自分の意見を話せるようになった、他人と自分の意見が違う場合にも、他人を尊重し、他人の意見を聞くようになった。こういうやり取りで、コミュニケーション能力を高め、自己PRもできるようになった。今後、就職して社会人となったときに役立つ経験を積むことができたと思う。

7. メンバー各自の所見

21217105 伊藤紘基

今回のプロジェクト活動を通して、計画性と現状を把握することの大切さを知った。

夏学期までの活動は順調に進み、秋学期からの活動は予定していた水抜きに参加できなかったことや、市役所への踏み入れも遅かったりしたのにも関わらず、計画を立て直さないで夏学期に立てた計画のまま事を進めてしまったので、夏学期からあまり進展することがなかった。

チーム全員が集まって話し合うことが少なかったため、チームに情報が行き渡るように話し合い、現状を把握していくべきであった。

今後、学生でいる間や就職してからでも、今回

の経験を生かして、チームであるならば話し合い、計画を立てていけたらと思う。

21217112 白井康太

私は今回の活動を通じて、生き物の儚さとチームワークの大切さを知りました。一回池の水抜きをするだけで大量の生き物が死んでしまい、外来種だけではなく在来種までも多く死んでしまう。そこにいた在来種は勿論の事外来種も人間の勝手に各地の池に放たれ、繁殖し増える。それを私たちはさもそこにいた外来種を悪くい殺すことしか考えないのがとても悔しく感じたとともに外来種のためにも殺すだけではなく展示などという形にすれば尊い命も失われずすむと感じた。このような事が起こらないためにも、もう少し池回りを取り締まる必要を感じた。

チームワークの面でも自分を含め計画性がなく提出期限が迫っている課題も甘く考えプロジェクトの授業も何回も休んでしまって、莫大な迷惑をかけた。もう少しチーム内での話し合いができていたら、とても後悔している。

21217112 鈴木康介

今回のプロジェクト活動を通して、計画性と実行力の大切さを学んだ。プロジェクトを成功させるためには、チーム内でコミュニケーションをとり連携することが重要になると感じた。ミーティングの時に、現状の進捗状況を確認し合って今後どのような活動をしていくのかを決めていかなければならなかった。

チームで決めた目標も低く、最低限の仕事をこなそうという意識がありました。そうした意識がやる気や行動力を抑えていたのだと思いました。行動を次に次にとタイミングをずらしていくことで、時間をかけて最低限のことは行ってきたことが満足できない成果になった原因の一つだと思います。活動を決めてから行動するまでに時間をかけず、可能であるのならその場で行動する行動力、意識が大切であり、チームに足りなかったものだったと思います。

21417301 于輝

この一年、プロジェクトに通じて様々な事を学んだ。プロジェクトの実施過程ではもっと積極的に

に発言がしたかったが、まだ日本語の微妙なニュアンスがわからないことも多く、あまり自分から発言できなかつた。ただ、日本人のクラスメートの交流が増えるなかで、日本語でのコミュニケーション力も高まったと思う。

私は所属しているチームの中で、私の貢献が一番少ないので、メンバーが一つの文句もなかつた。逆に、私の分の仕事もやってくれたので、本当に、心から感謝している。こういう暖かさがいっぱいチームなかで、幸せである。

この一年間を学んだ事は、今後の職場生涯中で、きっと役に立つと思う、これから、就職に向けて、精一杯で努力したいと思う。

謝辞

本プロジェクト活動を行うにあたり、豊橋総合動植物公園 豊橋市自然史博物館 主任学芸員坂本博一氏には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

【参考文献】

(1) ウィキペディア ブルーギル

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%82%AE%E3%83%AB>

アクセス：平成 27 年 1 月 13 日

(2) ウィキペディア ブラックバス

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%83%E3%82%AF%E3%83%90%E3%82%B9>

アクセス：平成 27 年 1 月 13 日

(3) ウィキペディア カダヤシ

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%80%E3%83%A4%E3%82%B7>

アクセス：平成 27 年 1 月 13 日

2 プロジェクト活動成果報告書 (教員)

高校・介護施設向けのiPad活用および業務システム改善	111
担当教員:今井 正文	
コミュニケーション能力とは何か	114
～学生視点と社会人視点の相違～	
担当教員:加藤 尚子	
Sozo Socks Station 開店・運営プロジェクト	115
担当教員:川戸 和英	
豊橋エコタウンプロジェクト	
～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～	116
担当教員:見目 喜重	
打倒オカザえもん! がんばれトヨッキー!	118
担当教員:中田 麻貴	
ウミガメ保護プロジェクト	119
担当教員:中野 聡	
のんほいパーク盛り上げ隊!!!	120
担当教員:三輪 多恵子・山口 満	
豊橋市における外来生物影響調査プロジェクト	123
担当教員:和田 剛明	

高校・介護施設向けの iPad 活用および業務システム改善

今井プロジェクト

1. プロジェクトメンバ

寺田一穂 (21117617), 村上彰仁 (21117728)
畦畑元美 (21217107), 榎田多絵美 (21217111)
玉田睦実 (21217116), 牧野貴徳 (21217631)
武村恒汰 (21417302)

2. 連携先企業・組織

プロジェクトにご協力いただいた連携先企業は、以下の通りである。

有限会社ナーシングホーム気の里：
代表取締役 田中靖代様
愛知県立小坂井高等学校： 教諭 池田啓彰様

3. プロジェクトの概要

<3. 1>プロジェクトの背景と目的

豊橋市内の介護施設に PC を活用したレクリエーションの実施についてヒアリング調査を行った結果、実施施設は 100 施設中 5 施設と少なく、実施していない理由は操作性の問題であった。また、iPad を取り入れている施設は 2 施設とさらに少なく、介護施設としては新しい形のレクリエーションであるといえる。iPad を活用したレクリエーションなら、操作が簡単なため高齢者にも受け入れられ、他施設と差別化できる可能性がある。そこで、本プロジェクトは、iPad を活用したレクリエーションを提案し、参加者アンケートの満足度を通して、iPad を活用したレクリエーションの有効性を検証する。また、施設より要望のあった研修管理表の改善については、事業の運営において適切な情報管理と業務効率化ができるよう、Access によるデータベースの構築を提案する。高校における iPad の活用については、授業内での iPad 活用についての協力要請が小坂井高校様から昨年度の活動を継続する形であったため、連携先高校の要望に応じてプロジェクト活動として対応した。

<3. 2>実施内容、実施結果および成果

介護施設との連携にあたり、介護保険制度の概要について勉強会を行った。その後、連携先施設であるナーシングホーム気の里でレクリエーションの実態調査を行った。施設では、毎日、午前は外来講師を招いてセミナーを行っており、午後は利用者自身が主体となるサークル活動が行われていた。サークル活動の内容は、機能訓練や俳句の会、民謡の会、脳トレや貼り絵などであった。午後のサークル活動を見学し、iPad 利用のレクリエーション実施に向け作業内容の確認を行なった。この時、施設の方から、「脳トレのような認知機能低下の予防につながる内容にしてほしい」という要望や、「作業が難しいとやる気や集中力の維持が困難となり飽きやすい」などの注意点も伺った。

施設調査の結果から、レクリエーションでの利用アプリは、「操作しやすいものにする」、「ユーザーの希望に合わせて様々な難易度を準備する」を意識し、検討することとした。「漢字」、「計算」、「クロスワード」などの種類別に、アプリの内容、難易度、操作性の評価を行ない、レクリエーションとして提案するアプリを決定、大学貸与 iPad 設定等の準備を行った。

iPad 操作マニュアルを作成し、希望者 5 名に対し第 1 回レクリエーション (8 月実施、全 4 回) を試験的に実施した。第 1 回レクリエーションでの 4 回を通して、参加者は iPad への関心が強くなり、操作にも慣れた様子だった。アンケート調査を実施し、利用者の方の意見も参考に、時間制限や背景に動きがあるものは無くし、好評だったアプリの種類を追加した。

第 2 回レクリエーション (11 月実施、全 8 回) では、中間発表からの反省を踏まえ、連携の意味や情報発信の仕方を再検討した。活動や内容が伝わりやすいように参加案内を作成し、利用者の方と居宅介護支援事業所に配布した。参加者は 14 名であった。実施後には、利用者の方から「またやりたい」や「この機械で頭の体操ができたらいい」という声をいただいた。施設からは、「利用者

が楽しみにしているので、今後もレクリエーションを継続したい」と依頼があった。

アンケート調査の結果は、8月は「面白い」80%、「やや面白い」20%だったものが、11月には「面白い」93%、「やや面白い」7%という結果になり、高齢者にも iPad が受け入れられていると考えられる。また、満足約 93%、やや満足約 7%となり、iPad を活用したレクリエーションは高齢者にも十分有効であるといえる。レクリエーションについては、学生もやりがいを感じていたことが、学生の報告書からも得られている。なお、施設側からも要望されているので、平成 27 年 3 月末までレクリエーションを継続する。

介護施設データベースシステム構築については、Excel で管理していた研修記録表を Access に移行することを提案した。通常の研修記録とは別に参加管理が必要な研修記録等の重複するデータを正規化やリレーションシップ設定等のデータベース化することによってデータ整理と効率化を行った。また、要望に合わせ、入力フォーム、クエリ等を作成した。マニュアルを作成し、完成したデータベースシステムを施設に納入した。研修記録の重複データ等が解消されデータの一元的管理が可能となったため、入力作業量が削減やデータ入力忘れが防止されるなど業務の効率化がなされ、適切な情報管理ができるようになった。

高校における iPad 活用については、本年度は今井ゼミの研究用 iPad2 と小坂井高校様が購入されたタブレット端末 (Lenovo Android)、スマートフォン等が活用された。ダンスの授業でのビデオ撮影およびデータ転送用の Wi-Fi 経由のビデオ提出システム、体育館内での複数モニタへの映像提示等を提案した。タブレット利用によって各グループは撮影と確認を繰り返すことができ、データ転送用 Wi-Fi 経由でビデオデータは教員 PC に集約され、教員 PC およびタブレットから複数の外部モニタによる映像提示も可能となった。

4. プロジェクト活動の教育効果

社会人基礎力では、前に進む力、考える力、チームで働くことのできる力の 3 能力 12 分類の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、様々な施設や環境における iPad 活用を考え、アプリ選定や準備、利用者への説明、あるいはシス

テムの構築等を実際に行わなければならない。どのようにチーム分けして分担し、準備と実施、利用者からの評価と改善という活動から、3 能力すべてが求められる

本プロジェクトでは、事前調査から利用するアプリについて選定し、レクリエーションに用いる iPad の事前準備、介護施設や高校での実施、評価の分析から改善提案等、作業内容が多岐にわたる。学生個々のスキルや役割分担を含めての議論も必要になる。この段階では、考える力、チームで働くことのできる力が主に必要となる。スキル別、分担別にチーム分けしてから実施までには、考える力、チームで働くことのできる力はもちろん、さらに前に進む力が必須となる。

レクリエーションの実施やシステム構築を行う事を通して、チームによる活動の基礎を学び、各自の性格的な特性や技術的に不足する点等を自覚、内省できたと考えている。また、実施から得られた多くの評価や反省点に対して、各自または分担別、プロジェクトチーム全体での検討と改善を繰り返していたことから、実践を通じた学生の自主的な PDCA が出来ていたと評価している。

協力企業との関係としては、情報提供、意見を貰いながら実施する協力レベルから、今後は外部企業とのチーム作業による連携や提携までの発展が今後の目標となる。

5. 指導上の工夫や困難性

本プロジェクト活動では、出来る限り学生に任せ、毎週の学外での活動に関する事務的な手続きや中間発表および成果発表等のスケジュール伝達以外は、特段の指導はせずにおいた。ただし、プロジェクト活動のための技術的な質問等や必要機材・プロジェクト進行上必要となるものについては相談に応じ、支障の無いよう心がけた。

初期段階のプロジェクトテーマについてはブレインストーミングや図形表現による意見集約法による意見集約に時間をかけていた様子である。会議法については適宜ヒントを与えたが、この段階では、考える力、チームで働くことのできる力の初期段階であるがメンバー互いに様子をうかがい互いに少し遠慮しながら活動していた。学生個々のスキルや特性から、アプリ選定や機材準備、各種調査等の作業分担が決まってからは、特に助言

や調整することもなく、各自あるいはチームでしっかり活動できていた。

小坂井高校様からの授業内での iPad 活用の協力要請については、4 年生の助言等を得ることについても問題なく行っており、限られた時間の中での要請に対して柔軟に対応出来ていた点等も評価できると考えている。

初期の段階より、プロジェクト進行等も含めて学生に任せたが、作業分担から始まって、個別作業、チーム作業のスケジュールまで、全ての段階でチーム作業が出来ていた。学生の活動としては大変に評価できると考えている。また、レクリエーションとは別に業務システム、高校での iPad 活用など 3 つのテーマを作業していたが、それぞれのチームにおいて技術的な部分でも相応の学習効果もあったようである。

以上の点について、学生の活動報告書や評価シートからも各自の達成度には違いがあるもののチームとしての活動はおおよそ同様の前向きな評価をしているようである。一方、社会人基礎力における、計画力、実行力、チームで働く力（学生は連携と表現）では各自反省点を挙げて内省している。これらの項目については、担当教員としては途中で少し気付きはしたが各チームごと作業できており、自発的に意見収集の場を設定し定期的に全体ミーティング等を行っていたことから、学生は十分対応できていたと考えられる。学生の活動報告から改めて振り返ってみると、担当教員としては個別の学生が持っている固有の弱点等については対応すべきだったかもしれないと感じている。

対外的な評価については、協力企業からは学生の活動に対して評価を頂けている様子であり、学生自身の印象も良いとの意見を頂いた。また、介護施設、高校教員の方々からは感謝の言葉もいただいていることから評価している。対外的な実施については様々な反省点や力不足等の自己評価が学生から出ている。もちろん改善すべき点ではあるが、対外的な評価から考えるとほぼ問題無いレベルであると考えている。協力企業との関係としては、情報提供、意見を貰いながら良好な関係にある。今後は外部企業とのチーム作業まで発展を目指し、指導教員として今後の課題としたい。

6. まとめ

プロジェクト活動は、社会人基礎力養成の教育プログラムである一方、学生の動機づけの機会と考えているが、できる限り外的要因でなく内的要因を誘発するものになるよう配慮したいと考えている。そのためできる限り教員の関与を意識させないようにしているつもりであるが、前節で反省点、課題としたように関与度合いについては私自身まだまだ考慮する点も多く常に悩ましい部分であると考えている。

本年度のプロジェクト活動を踏まえた次年度以降のプロジェクトについて以下に示す。(1) プロジェクト内容については、上記理由により特定することなく行いたいと考えている。(2) 同様にプロジェクト活動の進め方については、出来る限り学生に任せる方向で対応したい。教員の関与については議論の余地があり、今後も考慮しつつ運営したいと考える。(3) プロジェクト運営の制度については、表彰の評価基準については例年微妙な部分、特に教員の評価についてはプロジェクト本来の目的と表彰の評価に乖離があるようにも見え、一考の余地があるように感じる。また、3 年次の学生の動機づけと達成できる目標には、学生個々の知識的な問題もあり、将来的には改善の余地がある。2 年から 4 年、各学生個々それぞれに実行可能なレベルがあるため、前後の導入的、実践的プロジェクト等があれば、さらに効果があるように考える。

コミュニケーション能力とは何か～学生視点と社会人視点の相違～

加藤プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

福井実也美(21217121)

2. 連携先企業・組織

野島保険事務所 (代表：野島啓氏)
スクエア (代表：國崎恭弘氏, フォー：星野梨恵氏)
クオークネット (代表：齋藤純氏)
株式会社ナツメ (取締役：夏目喬之氏)

3. プロジェクトの概要

一般社団法人日本経済団体連合会のアンケート結果 (2014年) によると、企業が選考時に重視する要素の第1位は「コミュニケーション能力」であった。

本プロジェクトでは、この「コミュニケーション能力」とは具体的にどのような能力を指すと考えられているのか、学生と社会で働く人々とはここでいうところの「コミュニケーション能力」に対する認識が異なっているのではないかと、という点に着目し、この「コミュニケーション能力」について考えることを目的としたプロジェクトに取り組んだ。

本プロジェクトの具体的な活動内容は以下のとおりであった。

- ①プロジェクトテーマ決め
- ②アンケート作成・依頼・実施・集計 (本学学生対象)
- ③インタビュー項目作成・実施・インタビューおこし・先方への内容確認依頼 (社会人対象)
- ④結果の検討
- ⑤発表 (成果報告会)
- ⑥報告書作成

結果、学生と社会人とはコミュニケーション能力の捉え方に違いがありそうなこと、職種によってコミュニケーション能力の重要性には違いがありそうなことが見えてきたプロジェクトであった。

2. プロジェクト活動の教育効果

社会人基礎力のうち、ここでは次の3つの力を取り上げ、プロジェクト活動内容との関係についてみ

ていくこととしたい。

<発信力>

先に述べた活動内容のうち、以下の項目が発信力に関係する項目と考えられる。

- ②依頼・実施
- ③インタビュー実施
先方への内容確認依頼
- ⑤発表 (成果報告会)

<傾聴力>

先に述べた活動内容のうち、以下の項目が傾聴力に関係する項目と考えられる。

- ②アンケート依頼
- ③インタビュー実施
先方への内容確認依頼
- ⑤発表 (成果報告会)

<ストレスコントロール力>

先に述べた活動内容のうち、以下の項目がストレスコントロール力に関係する項目と考えられる。

- ②アンケート依頼
- ③インタビュー実施

5. 指導上の工夫や困難性

指導上の工夫として挙げられるのはPDCAサイクルのたえず確認していくことであった。何度かこのサイクルをまわすことでプロジェクトに対する自己効力感を高めるよう試みた。

課題として残されているのは、学生の様子をしっかりとみている「つもり」になる怖さである。この点については慎重になりすぎてもちょうどよい程度であると肝に銘じ、今後も取り組んでいきたい。

6. まとめ

プロジェクト終了時には、社会人基礎力が伸びている実感が学生自身にあったようだ。前回と同様の得点であってもその中での伸びを実感している様子が伺えた。また、プロジェクトをやり遂げたという自信もついたようである。プロジェクトをやってよかったというコメントも印象的であった。

Sozo Socks Station 開店・運営プロジェクト（教員）

川戸プロジェクト

1.プロジェクトメンバー；

石本智加奈（21217104），岩月美和（21217106），
鈴木祐行（21217114），長谷川摩周（21217120），
堀之内彩香（21217124），矢西キンベルリ（21217126）
指導教員：川戸和英

2.連携先企業・組織；

★(株)ナイガイ、中部ガス不動産(株)

3.プロジェクトの概要；

- ①施設名：「Sozo Socks Station」
ー豊橋市松葉町2丁目17-1、第2星野ビル1F
- ②開店：2014/10/17,18にプレオープン；11/2開店
- ③販売商品：(株)ナイガイ提供のレディース、キッズ、メンズの靴下とルームウェア
- ④営業要項：毎週土曜、日曜日、10:00~17:00
- ⑤店舗運営役割分担：
店長/矢西、副店長/鈴木、営業/岩月、
企画/長谷川、広報/石本、総務/堀之内
- ⑥店舗出勤：2人組みローテーションで1日出勤

4.開店準備から開店、現在までの取組み；

- ①テナント下見・交渉・決定：
・中部ガス不動産(株)の仲介により4か所のテナント候補から、豊橋市松葉町第2星野ビル1Fに決定
- ②靴下知識学習：
・(株)ナイガイ東京本社安松営業課長、本学教務課遠山氏から2コマの学習会
・F.コトラー,2010,「マーケティング 3.0」朝日新聞出版、読了
- ③商品品揃え、店舗什器等(株)ナイガイとの交渉：
・商品、店舗什器は(株)ナイガイが提供、
・仕入れは、購買時点仕入れ方式採用
- ④販売基本戦略企画ー（1）イベント企画策定：
・10/17,18：豊橋祭りに合わせオプレオープン
・11/2,3：開店
・11/23~12/23：クリスマスイベント開催
ー~1000円以上お買い上げで、お菓子入りクリスマスブーツプレゼント
・1/10~2/14：バレンタインデーイベント
・2/15~28：就活応援イベント
・3/1~29：新生活応援イベント
- ⑤販売基本戦略計画ー（2）広報戦略
・基本メディアは「チラシ」とする
→すでに、開店&プレゼント告知チラシ、及びク

- リスマスセールチラシ作成、配布
- ・必要に応じて広告出稿も計画
→HANAMARU1/25発行号への広告出稿
 - ・メディアへのパブリシティ働きかけ
 - ・10/29：本学でプレス発表会開催
→中日新聞、東愛知新聞、東日新聞3社来学、
10/30~11/1にかけて3紙にパブ掲載される
 - ・11/25：ツイッター、FBアカウント作成
 - ・12/18：Planetsにパブ掲載
 - ・SNSにアカウント開設（Twitter, Facebook）
 - ・1/25：HANAMARUに1/4ページ広告掲載



5.指導上の課題と工夫

- ①(株)ナイガイとのコラボが決まってから、学生たちのモチベーションが高くなったのは、学生が靴下販売に目的意識的に取り組めたからで、教員としてはそのモチベーションを落とさないために、できるだけ彼らの企画や希望を叶えられる環境づくりに取り組んだ。
- ②できるだけナイガイの安松課長と学生たちのコミュニケーションを深める機会作りに励んだ。1月16日に「棚卸」に合わせて課長自ら来店してもらい、指導を受けることができた。

6.まとめ

- ①成果（1）：ゼミ生たちが生の靴下販売の実体験が積めたこと、そしてモチベーションを高め、自分の課題を自ら追及する姿勢ができたこと。
- ②成果（2）：メンバーとのコミュニケーションの重要性を深く実体験できたこと

以上

豊橋エコタウンプロジェクト

～小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

見目プロジェクト

1. プロジェクトメンバ

森下佑也 (21217633) 山本雪乃 (21417303)
田邊俊希 (20923215) 眞子匠 (21123132)
中川千加 (21123228)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋市教育委員会教育政策課
(担当者：浅倉淳志、高橋拓也)
- ・豊橋市内小中学校

3. プロジェクトの概要

近年、資源の枯渇化、脱原子力発電、地球温暖化といったエネルギー・環境問題への対応から、太陽光発電の普及促進が進められてきた。そうした中で、20年以上継続して安定した発電が求められる太陽光発電システムの故障や発電性能の劣化などの長期信頼性に関する問題が指摘されている。

太陽光発電の長期信頼性の評価には、ある地域において複数のシステムの長期的なデータ収集・分析が望まれる。しかしながら、民間施設に設置された太陽光発電のデータを長期的に収集することは困難である。一方で、公共施設に設置されたシステムについては、データの提供・収集が比較的容易であると思われる。

以上のことから、本プロジェクトでは豊橋市内の小中学校（全 74 校）に設置されている太陽光発電システムを対象に、平成 23 年度からシステムの稼働状況を調査してきた。今年度も調査を継続して実施し、長期信頼性に関する基礎データを収集して分析する。

プロジェクトの実施にあたっては、以下のよう
な作業を実施する。

- ・豊橋市教育委員会への調査実施の依頼
- ・各小中学校への調査実施の依頼

- ・訪問調査の担当校の分担決定
- ・訪問調査の日程調整（電話で担当者と調整）
- ・調査項目の検討
- ・訪問調査の実施
- ・各小中学校への調査協力のお礼（お礼状の送付）
- ・調査情報のとりまとめと分析
- ・報告書の作成（中間報告書、年度報告書）
- ・調査結果の報告（豊橋市教育委員会）

本年度は 74 校中、40 校の調査をこれまでに実施し、システムのトラブル状況を発電量への影響から 3 段階にレベル分けしてまとめ、過去 3 年間の結果と比較した。その結果、本年度は 40 校の中で 21 件のトラブルを確認し、さらにその中には修理が必要なトラブルが 11 件確認された。その内容として、インバータのファン故障が 8 件、配線切れ 2 件が確認された。

また、吉田方および豊城中学校を対象にして、太陽光発電システムの性能劣化評価を変換効率の推移から試みた。これまでに得られた結果の分析から、吉田方中学校のシステムについては変換効率の若干の低下が見られた。ただし、その低下の度合いは太陽電池メーカーの性能保証範囲内にあると思われる。今後、さらにデータを収集して、より詳細な定量的分析を試みる。

4. プロジェクト活動の教育効果

<4. 1>前に踏み出す力

本プロジェクトでは、各自が調査分担校と日程調整を行い、訪問調査を実施することで、主体性・実行力を育成する。

<4. 2>考え抜く力

訪問調査の結果から、現状とその問題点を分析・考察することにより、課題発見力と創造力を

育成する。

また、訪問調査の実施に当たっては、調査対象校の都合、各自の講義スケジュール、プロジェクト全体のスケジュールを念頭に入れて、効率的に計画を立てなければならない。こうした経験を通して、計画力を育成する。

＜4. 3＞チームで働く力

各小中学校の担当者によって太陽光発電システムに関する興味は大きく異なる。こうした状況で、調査の際に自分が何を聞きたいのかを相手にわかりやすく伝えることが必要である。ここでは、発信力が必要となる。さらに、調査結果を連携先機関に報告することで、発信力を育成する。

また、訪問調査の際に相手の意見を丁寧に聞き出し、不足する情報を得るために改めて質問をすることで、傾聴力を育成する。

訪問調査の実施にあたっては、決められた日時に訪問することは絶対である。また、調査結果のとりまとめ、報告書の作成などグループでの作業には、やはり日時を決めて作業を協働で進める必要がある。こうした活動を通し、規律性が育成できる。

これまでに実際に自身で外部機関に連絡をして日程調整をし、訪問するという経験をしたことがない学生にとって、これら一連の作業を行うことは非常に大きなストレスである。こうしたことから、ストレスコントロールが育成できる。

5. 指導上の工夫や困難性

プロジェクトを進める上で、プロジェクト実施の意義・価値、ならびに実施の効果や必要性を認識させることが重要である。そのため、春学期はエネルギー・環境問題、太陽光発電などの最新トピックを交えながら、太陽光発電自身の基礎知識の修得に努めるとともに、ディスカッションを通してプロジェクトに対する意識を深める取り組みを行った。また、昨年度の結果をとりまとめて連携先企業に報告することで、学生に本プロジェクトの実施意義を確認させ、その後の活動に取り組むことができた。

本年度は3年生2名と、訪問調査の実施には人数が不足していた。そこで、昨年度経験した4年生3名にも参加してもらい、特に訪問調査の実施部分で3年生をサポートしてもらった。これによ

り、3年生学生には一種の安心感を与えるとともに、4年生には活動の意義と内容を振り返る（再考させる）機会を提供した。

このような形でプロジェクトを運営し結果、前半は比較的順調にプロジェクトは推移した。しかし、参加学生数が少数であったため、また3年次学生の履修科目数も多く、訪問日程の調整が例年よりも困難であったために、秋学期に訪問調査が本格的に始まると、活動は当初計画よりも遅れ、全74校中・40校の調査にとどまった。

また、各種資料の作成や訪問先学校との日程調整の分担についても、一人当たりの分担量が増え、一部学生には多大なストレスを与える結果となった。

さらに、3・4年生間の連絡不足・情報共有の方法にも問題が見られ（報告・連絡・相談の欠如）、4年生による活動支援にも課題を残した。

6. まとめ

本年度は、市内小中学校の全74校中・40校の訪問調査を実施した。参加学生数が少数であったために期間内に全校の訪問調査を終えることはできなかった。しかし、それでも半数以上の調査を終えたこと、連携先機関への中間報告書の提出などにより、実行力や発信力、傾聴力の育成には一定の効果があったと思われる。

その一方で、各種資料の作成や学外との連絡を取ることに大きなストレスを感じ、その後の活動に影響を生じた学生もいた。また、メンバー間の連絡も十分に取られているとは言い難い状況であった。こうした点から、ストレスコントロールなどチームで働く力の育成には、大きな課題を残したと思われる。

また、基礎知識の不足もあり、得られた情報の分析は十分とは言い難い。課題発見力ならびに創造力の育成については、今後、その手法を再検討する必要がある。

打倒オカザえもん！

がんばれトヨッキー！

中田プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

尾関 海斗(21217109), 坪田 紳吉(21217118)
武智 椋也(21217115), 神藤 賢護(21123114)

2. 連携先企業・組織

豊橋市役所 産業部観光振興課 小泉拓馬氏

3. プロジェクトの概要

ゆるキャラグランプリ 2013 では、同じ愛知県内のゆるキャラ「オカザえもん」が 22 位であったのに対し、315 位であった「トヨッキー」。そこでプロモーション活動を積極的に行なうことで認知度アップを図り、ひいては豊橋市への地域貢献を行っていくことを目的とし、プロジェクト活動を行った。

豊橋市役所の担当者との話し合いの中で、子供たちの認知度が低いのではないかとの見解があったため、プロモーション活動の対象は低学年層とし、まずプロモーションのためのオリジナルステッカー作成に取り組んだ。そして、配布先として保育園と放課後児童クラブを選定し、訪問活動を実施した。

豊橋市内の公立保育園 2ヶ所および放課後児童クラブ 5ヶ所への訪問活動では、トヨッキーの着ぐるみをきて、子どもたちと一緒に折り紙や塗り絵を実施しながら、自分たちで作成したステッカーを配布し、認知度の向上に努めた。

4. プロジェクト活動の教育効果

<4. 1>前に踏み出す力

ステッカーの配布先である公立保育園および放課後児童クラブの訪問にあたり、学生がそれぞれの担当先を決め、日程調整のための電話をかけるところから訪問時まで責任を持って取り組むことで、主体性・実行力を育む効果があった。

<4. 2>考え抜く力

どのようなプロモーション活動をしたらよいかという点で市役所担当者との話し合いをヒントに学生が議論を重ねることで、課題を発見し、創造力を発揮した。一方、方向性の決定までに時間がかかり、1年を通じての計画力の欠如が露呈した。

<4. 3>チームで働く力

本プロジェクトは4名のメンバーで行われたが、訪問活動の際、全員のメンバーが揃うことが難しく、メンバーが欠けての実施となることが多々あった。休みがちであったメンバーにとってはチームで働く際の規律性を学ぶきっかけとなり、一方の側では、そういったメンバーに対し、状況把握をした上で、もっと働きかけや発信をしていかなければならないということ学ぶ機会となったのではないかと思う。

5. 指導上の工夫や困難性

当初、ゆるキャラグランプリ 2014 に今年も出場するであろうという想定のもと、順位を上げることを最終的な数値目標としてプロジェクトがスタートしたが、プロジェクト中盤で市役所の意向により出場しないことが決定し、定量的な目標を失った。また低年齢層を対象としていたためアンケート調査なども難しく、認知度向上を定量的に評価する新たな評価指標を設定できず、終盤メンバーのモチベーションが削がれていた点が反省点である。

6. まとめ

ゼロの状態から課題を見つけ、個々が主体的に行動しながら、チームで試行錯誤し課題解決を図ることの困難性を痛感した1年であった。しかし、今回の経験が今後同様の困難に直面した際に何らかの道標となってくれることを願う。

アカウミガメの保護活動

中野プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

篠田真輝(21123104)

石原奨大(21217103)

山内一生(21217127)

2. 連携先企業・組織

豊橋市役所環境部環境保全課

3. プロジェクトの概要

昨年に引き続き、アカウミガメの保護活動を行った。表浜海岸はアカウミガメが上陸・産卵に来る日本有数の海岸であることを背景に、豊橋市のウミガメ保護活動に協力し、地域の環境保護活動を担うことを目的とする。

活動は、以下の形態で行った。

- ① プロジェクトテーマ設定
- ② 市役所・NPO 開催のイベント参加 … 自然観察会 (7.19 早朝)、竜宮探検 (7.26 夜間)、
- ③ ボランティア保護活動 … 海岸清掃、
- ④ ウミガメの生態と現状理解のための勉強会、
- ⑤ 模擬授業 PPT の作成 (10 月)
- ⑥ ショートムービーの作成(模擬授業に利用し、豊橋市環境ビデオコンテストに投稿) (12 月)
- ⑦ 小学校での模擬授業
- ⑧ 活動報告レポートの作成

ムービー作成に際しては長谷川君の技術支援を受けた。模擬授業は、三谷東小学校 4 年生 2 クラス (11.18)、鷹丘小学校 4 年生 4 クラス(12.2)で行った。

4. プロジェクト活動の教育効果

新しいテーマに関して学ぶこと、ショートムービーを作成し、環境ビデオコンテストに応募すること、そして特に、積極的に質問を投げかける小学生を前に、自然保護の必要性を訴える経験は、かけがえのないものだったと思う。

なお、三谷東小学校の授業は、石原(同校卒業)と篠田が、鷹丘小学校の授業は篠田(同校卒業)が、最終報告は山内と篠田が担当した。

5. 指導上の課題と工夫

毎回、指導の在り方が問題になる。無指導では全く進まず、指導過多はアクティブラーニングの趣旨からはずれず。今回の失敗の一端は、昨年の経験を引き継ぐため、結果として過度に干渉した点にあった。その他の課題として、以下の諸点を指摘できる。

- ・専門領域とは無関係なテーマを選択せざらう得ないこと。これは、社会事象への関心と(中等教育段階からの)基礎学力の欠落による。
- ・知識吸収の過程が相変わらず不十分であること。学んだ知識の上に、論理的学習と思考、行動を築くことができないため、自然な発達が見られない。結果として、全体的にコンテンツを欠落させたプレゼンテーション・コンテストに陥る。
- ・いわゆる社会人基礎力が、しばしば生得的または長期的に形成され、必要に応じて発動される性格的、社会関係的特質を対象とすること。それを1年単位で「評価する」ことに意味があるのか。
- ・ゼミナール学習(専門教育)への影響が否定できないこと。プロジェクト演習とゼミナール双方をこなすことの負荷が大きく、後者の時間を前者に振り向ける事例があった。プロジェクトテーマが学生の卒論に影響し、西洋経済史・社会史や現代資本主義論に向き合う学生がいない。卒業時において、学生が社会科学を学んだように思えない。

専門分野における自主学習の欠如は、当該演習における未発達性とほぼ同じ原因によるものではないか。

6. まとめ

それにもかかわらず、小学生を対象にした模擬授業は学生にとって、そして教員にとっても、とても良い勉強だった。惜しむらくは教授する知識の質の問題があったものの、またとない学習機会だったと思う。

のんほいパーク盛り上げ隊！！プロジェクト

三輪・山口プロジェクト

1. プロジェクトメンバ

青木威一郎(21217101), 土屋 翔太(21217117),
宮崎 輝(21217125), 竹内 亨仁(12345678)

2. 連携先企業・組織

- (1) 豊橋総合動植物公園(愛称: のんほいパーク)
- (2) 公益財団法人 豊橋みどりの協会

3. プロジェクトの概要

本プロジェクトは 2012 年度からの継続テーマとして、豊橋総合動植物公園(愛称: のんほいパーク)について様々な情報を発信し、活性化を図る目的で活動を行った。特に、連携先からの要望として「若者向けの広報」が出されたため、今年度は情報発信のターゲットを若者に設定した。

昨年度までの実績から、若者向けの情報発信ツールとして SNS (Social Networking Service) が有効であることを確認しているため、昨年度作成した SNS アカウントを継続して活用することとした。さらに、プロジェクト Web サイトの情報を整理すると共に、閲覧者にとって有益と思われる新しいコンテンツを作成し、サイト上で公開した。

プロジェクト期間を通じた恒常的な活動は、以下の通りである。

- (1) Facebook … 春学期は週 1 回、秋学期は週 2 回程度の頻度で、写真および動画を用いて動物の様子やイベント情報を紹介。
<https://www.facebook.com/Project.NonHoi>
- (2) Twitter … パーク訪問時に、動物たちの様子をリアルタイムで発信すると共に、のんほいパークや他の動物園、動物情報を発信しているアカウントを積極的にフォロー。
<https://twitter.com/ProjectNonhoi>
- (3) YouTube … 取材等を通して録画した動物の動画を編集して公開(動画データの蓄積)。
<https://www.youtube.com/user/projectnonhoi/videos>
- (4) Web サイト … のんほいパークの基本情

表 1 平成 26 年度プロジェクト実施スケジュール

月/日	活動内容(学外訪問等)	(学内)
5/19	協力依頼 ㊦昨年度報告・今年度予定 写真撮影(5/11, 28)	SNS, Web サイト継続
6/12 19 25	取材 ㊦ 協力依頼 ㊦昨年度報告・今年度予定 取材 ㊦七夕イベント 写真撮影(6/24)	動画(短)作成開始 →随時アップロード
7/30 "	取材 ㊦食虫植物イベント 3 大学ポスター掲示依頼 写真撮影(7/3, 10, 24, 27)	動物データベース開始 動物時計作成開始 ナイトガーデンポスター作成
8/11, 13, 17	取材 ㊦ナイトガーデン	
9/ 5 30	取材 ㊦ナイトガーデン 打合せ ㊦学祭アンケート 写真撮影(9/24)	学祭アンケート作成 学祭パンフレット裏作成 学祭ポスター作成
10/20 25・26	参加 ㊦ザリガニ駆除体験 創造祭→アンケート実施 写真撮影(10/2, 9, 16, 29)	ザリガニ報告書作成 学祭アンケート集計
11/10 27	報告 ㊦ザリガニ駆除体験 取材 ㊦飼育員インタビュー 写真撮影(11/5)	アンケート報告書作成 アンケート報告書送信
12/ 4	意見交換 ㊦ザリガニ企画 写真撮影(12/6, 21, 23)	発表準備
1/11	写真撮影(1/11)	

注: ㊦は“のんほいパーク”, ㊦は“豊橋みどりの協会”

報やインタビュー記録を公開。今年度は新たに動物データベース、周辺マップ、動物時計等の閲覧者にとって有益なコンテンツを作成。
<http://projectweb.sozo.ac.jp/tmiwaproj2013/>

その他に以下のような活動を行った。

- ナイトガーデン(8/11~17)の宣伝ポスターを作成して市内の大学に掲示。
- 学園祭(10/25,26)において“のんほいパーク”アンケートの実施。
- みどりの協会(植物園管理)からの依頼を受け、イベント取材やザリガニ駆除作業に参加。今年度の具体的なプロジェクト実施スケジュールを表 1 に示す。

4. プロジェクト活動の教育効果

< 4. 1 > 社会人基礎力の養成

社会人基礎力における3能力12分類の資質について、本プロジェクトにおける体験項目を表2に示す。

本プロジェクトでは、連携先の要望である“若者向けの情報拡散”という「課題」に対し、メンバー全員で解決方法を探り「実現」を目指したことから、全体を通して『考え抜く力——“課題発見力”』や『前に踏み出す力——“実行力”』が必要である。また、SNSを用いて「継続して（定期的に）記事を発信」したり、閲覧者に有益なWebサイトを「検討して実現」したり、といった活動には『前に踏み出す力——“主体性”』や『考え抜く力——“創造力”』、『チームで働く力——“状況把握力”、“規律性”』が重要となる。

さらに、事務所の方々との打ち合わせや意見交換、飼育員インタビュー等を通して『チームで働く力——“発信力”、“傾聴力”』が養われたと考えている。

図1に示す結果から、プロジェクト活動を通して主体性や実行力、課題発見力、状況把握力、等について学生の自己評価が上がっていることがわかる。これは、チーム内で役割を分担し、計画的に活動を行うことで、学生自身が成長を自覚できた結果だと考えられる。一方で、柔軟性、ストレスコントロール力が低下しているが、表2に示したように、本プロジェクトの活動においてそれらの項目を体験する場面が少なかったためだと判断する。

表2 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト外実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性	◎物事に進んで取り組む
	働きかけ力	○
	実行力	◎目標を設定し実現する
考え抜く力	課題発見力	◎現状分析/改善案の検討
	計画力	○
	創造力	◎魅力的な記事の作成
チームで働く力	発信力	◎取材、インタビュー
	傾聴力	◎取材、インタビュー
	柔軟性	○
	状況把握力	◎作業状況や役割分担の把握
	規律性	◎作業分担に責任を持つ
	ストレスコントロール	○

◎：大いに必要，○：必要

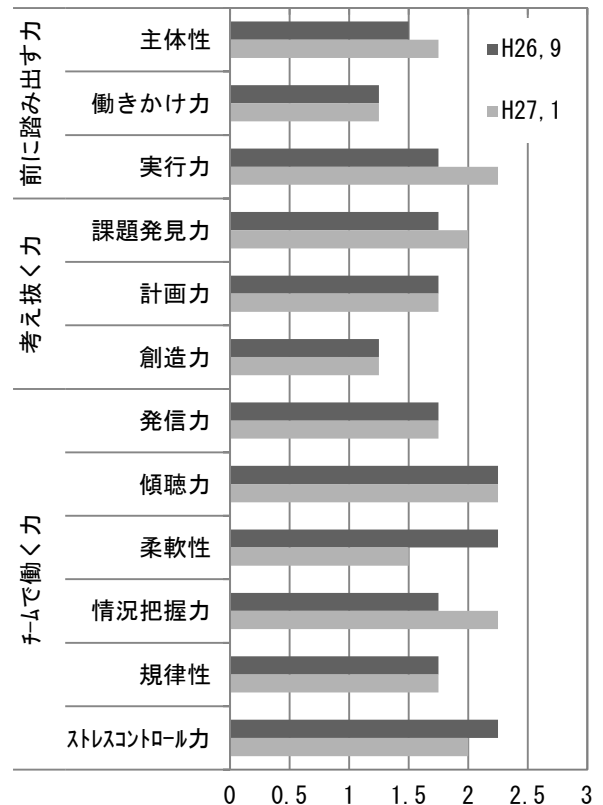


図1. 社会人基礎力（学生自己評価）

< 4. 2 > その他の教育効果

本プロジェクトでは、社会人基礎力の養成と併せて、

- (1) 自分に不足している知識・技術を見つめ直すことで、自己の発展の原動力とする。
- (2) 大学で学んだ知識や技術を発揮できる“場”を設けることで、積極的な自己表現を促す。という2点を実現できるように全体像を計画した。プロジェクト活動を通して学生の様子を観察すると、程度の差はあるものの、

- ・ SNSの仕組みやそれぞれの連携方法
- ・ ファン獲得のための効果的な記事の書き方等について、基本的な知識を習得できたように考えられる。また、動物データベースや動物時計、周辺マップ、等のWebで公開するコンテンツの作成に関しては、コンピュータに詳しい学生が中心となり、成果物として十分な完成度のもの作成することができた。

これらのことから、大学の“カリキュラムの具体的な成果”としての結果は十分に得られたと考えている。

5. 指導上の工夫や困難性

本プロジェクトでは、SNSの活用、動画の編集、Webサービスの活用、といった授業では扱わない内容が含まれていた。このため、スキルの高い学生に負荷が集中する場面が多く見られた。また、一部の学生が行っている作業について、他のメンバーが作業状況を把握できていない場面に何度か遭遇した。この点に関して、進捗報告を報告・記録することで改善を図ったが、なかなか改善が見られなかった。円滑な情報共有の仕組みについては今後の検討課題としたい。

また、学生の作業分担の捉え方（責任感）に差があり、SNSの更新を忘れていたり、それまでの流れを無視するような記事を書いたり、といった場面が何度か見られたのが残念である。さらに、遅刻を重ねたり無断で欠席したりするメンバーがいたため、ミーティングが滞ることが度々生じたことが反省点である。

必修授業であり、外部との接触が多いという性質上、どうしても教員主導になる場面が多くなるため、学生から“やらされている感”を払拭するのは困難である。作業の分担に教員が手を加えたり、各学生に個別に声を掛けたりすることで、不公平感を無くし、学生の自発的な行動、責任感のある行動を促すような仕掛けが必要だと感じた。

取材やインタビューだけでなく、メンバー内での意見交換を通して「発信力」や「傾聴力」を養うことができるよう、指導を改善したい。

6. まとめ

3年目の活動ということで、主な連携先であるのんほいパーク、および、豊橋みどりの協会からは昨年度以上の協力を頂くことができた。特に、今年度はメール等を通してパーク側から情報を提供して頂くことができたため、非常に円滑に活動を進めることができた。また、学生からの一方的な活動ではなく、パーク側からの依頼や提案等を受けられることもでき、活動を行う上で学生が「やりがい」や「責任感」を持って作業を進めている場面が多く見られた。外部協力を得て進めるプロジェクトでは、信頼関係の構築が非常に重要であると考えている。その意味では、本プロジェクトは十分に成果を出せたと考えている。

なお、社会人基礎力の養成については、チー

ム全体を通して見ると、計画性や実行力について大きく成長を感じることができた。一方で、プロジェクト開始時点での個人差が最後まで継続する点については、何らかの改善案を検討する必要があると考えている。特に、責任感や規律性といった“家庭のしつけ”から派生するような部分については、各学生の行動心理が異なっており、全員が同じ水準を満たすことは困難であると強く感じている。

豊橋市における外来生物影響調査プロジェクト

和田プロジェクト

1. プロジェクトメンバ

伊藤紘基(21217105), 白井康太(21217112)
鈴木康介(21217113), 于 輝 (21417301)

2. 連携先企業・組織

豊橋総合動植物公園 豊橋市自然史博物館
主任学芸員 坂本博一氏

3. プロジェクトの概要

本プロジェクトの目標は、豊橋市において外来生物がどのような影響をもたらしているかについて調査し、その結果を地域の人々に発信することで、外来生物問題全般への意識を高めることである。この目標の達成に向けて、以下の活動を行った。

①調査対象の絞り込み

新聞やインターネット記事をもとにした予備的調査、豊橋市在住の学生の体験をもとに、外来生物の中でも身近に存在し、影響があると考えられる外来魚に調査の対象を絞り込んだ。

②連携先組織への協力依頼・取材

豊橋市における外来魚に関する文献を調査する中で、豊橋市自然史博物館主任学芸員坂本博一氏が豊橋市における外来魚の実態を調査していることが判った。坂本氏に連携依頼協力を行うとともに、現状について説明していただき、活動についてのアドバイスをいただいた。

③各種対策活動への参加・取材

豊橋市における外来魚対策活動について、外来魚に関する啓発活動の「外来魚調査隊」、ため池の水を抜いて外来魚を駆除する「水抜き」に学生が参加し、現状を取材した。

④ポスターの作成

豊橋市における外来魚の影響について発信するために、チラシ、ポスター、インターネットのブログなどの媒体を検討し、ポスターを作成することとした。その上で、ターゲットを子供

に定め、内容を平易にし、視覚的に訴えることを重視するポスターを作成した。

⑤ポスターの掲示申請

作成したポスターの原稿を持参し、豊橋市役所に掲示についての相談に伺った。提示にあたって必要な条件について指摘をいただき、内容の修正を加えた上、具体的に掲示場所を定めて掲示申請をするようにアドバイスをいただいた。

学生は、この修正指示に従えば掲示が可能となると判断し、修正を行ったうえで印刷業者へ依頼を行い、ポスターを作製した。作製済みポスターを持参し、豊橋市役所に掲示申請を行ったが、担当部署における審査の結果、不適切であると許可が下りなかった。

4. プロジェクト活動の教育効果

概要で述べたように、本プロジェクトは目標としたポスターの掲示を達成できなかった。学生の自己評価を総合しても、やるべきことができなかったという評価であった。

本プロジェクトは、残念ながら失敗したと評価せざるを得ない。しかし、失敗したがゆえに学生が大いに反省し、自身に不足しているものが何かを理解して成長することができ、高い教育効果が得られたと考える。プロジェクト活動と並行して行っていた社会人基礎力レベル評価において全員の評価が低下したが、これも厳しい目をもって自分を見つめることができるようになった、人間的成長の一端であるといえよう。

以下、社会人基礎力レベル評価の3つの力に対応させ、本プロジェクトの活動においてどのような教育効果があったかを述べる。

<4. 1>前に踏み出す力

本プロジェクト終了後の学生と教員との話し合い、学生が作成した成果報告書の所見の記述において、プロジェクトが失敗した理由として主体性や実行力が不足していたことへの反省がなされた。前に踏み出す力は、本人の「心構え」により大き

く改善されるものであると考えられ、今後の成長が期待される。

＜4. 2＞考え抜く力

本プロジェクトにおいて、実現可能性を重視し到達目標を低めに設定し、さらに作業の進捗の遅れに応じて引き下げることが度々あった。これは、現状を分析して行動するという面での考え抜く力があったといえるが、その方向性は縮小に向かう後ろ向きのものであった。

しかし、プロジェクト後には、自分たちは頑張ればもっと高い目標を達成できたはずだと学生が反省した。今後、創造力を伴う前向きの考え抜く力を身につけていくことが期待される。

＜4. 3＞チームで働く力

ポスターの掲示許可申請において、掲示物の許可が下りるまでのプロセスについて楽観的に考えていたことを学生が理解した。各種の許可申請手続の厳格さ、交渉の難しさ・厳しさを経験したことで、社会のルール的重要性を知るとともに、根気強く交渉にあたるためのストレスコントロール力を身につけ、社会においてチームで働く力が高まったと考える。

5. 指導上の工夫や困難性

プロジェクト活動の趣旨として、学生が主体的に活動することが望ましい。このため、教員から具体的なテーマは提示せず、過去のプロジェクト活動の概要を学生に見せ、その枠組みを参考にしてプロジェクトテーマを設定させた。

しかし、プロジェクト計画の立案においては、学生のみで必要となる作業を明らかにし、その作業に必要な時間について見込みを立て、スケジュールを策定することはなかなかできなかった。このため、教員側から大まかな作業内容とスケジュールを提示し、詳細についての決定を学生が行うという介入を行った。

プロジェクト実施段階でも、学生だけでは進捗管理ができなかった。このため、プロジェクト実習の時間に進捗報告をさせ、情報共有と現状確認をさせた上で、現状で取り組むべき課題や、計画の修正の必要性の有無についての議論を促した。また、学生がこれまで話し合った内容を忘れがちだったので、教員がメモをとっておき、適宜これまで議論した内容を思い出させる必要があった。

このような介入が、学生の主体性を損ない、教員の求める範囲内で、できる範囲のことをすればいいという思考を醸成し、モチベーション、貢献意欲、責任感を下げる原因になった可能性がある。これらの意識を高めることができなかったことが、目標が達成できなかった結果につながった一因であろうと反省している。

そして、プロジェクトの最終段階では、目標達成が危ういことを把握し警告はしたが、学生に責任をもってプロジェクトを完遂させるべく、失敗を回避するための過度な助力は行わなかった。プロジェクト全体で見れば、途中まで手を貸しておきながら、最後の段階でその手を放すというかたちになってしまい、段階を踏んで学生の自立性を高められなかったことも、目標を完遂できなかった原因であると思われる。

以上、学生の自主性を尊重することと、プロジェクト活動の期限内で成果を出すことを両立させることが、本プロジェクトにおいて非常に困難な点であった。

6. まとめ

まず、本プロジェクトが目標を達成できず失敗するという結果に終わってしまい、ご多用中にもかかわらずご助力いただいた豊橋市自然史博物館主任学芸員坂本博一氏にお詫び申し上げます。

目標は達成できなかった一方で、学生が失敗したことから学び、成長しており、教育活動の観点からは一定の成果が得られたと考えられる。

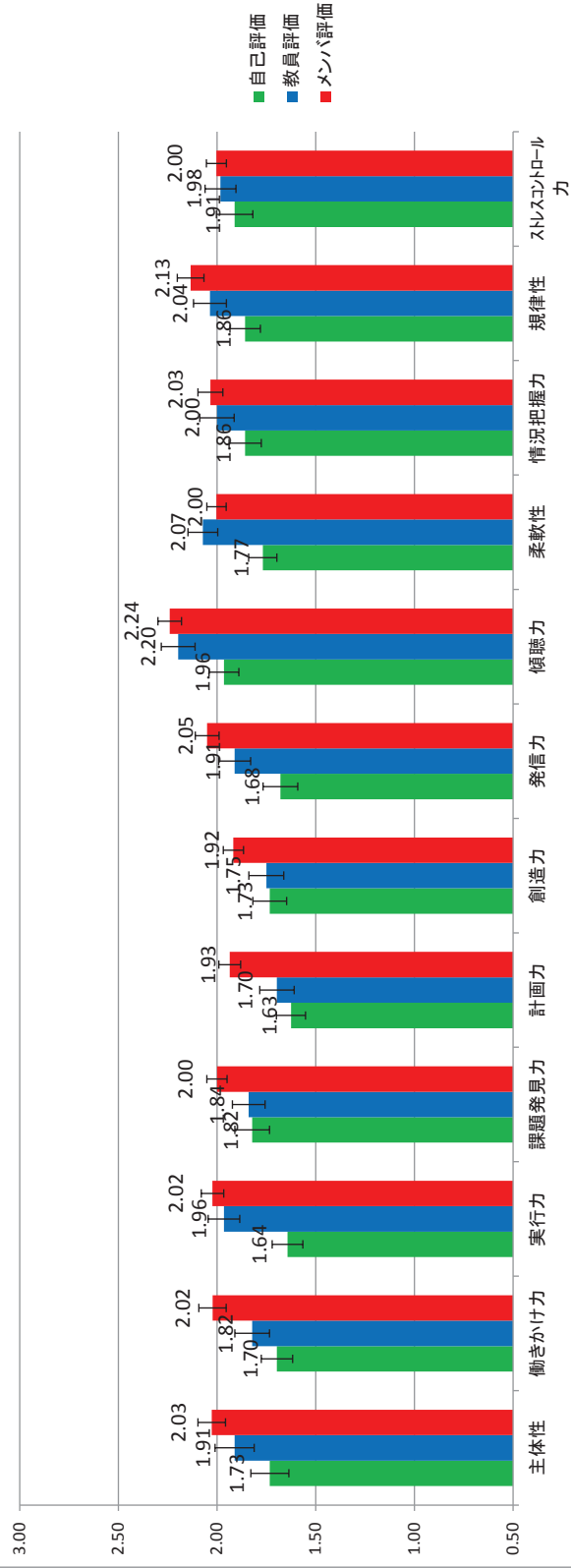
ただ、教育効果が得られたといえど、プロジェクト全体をとおして教員である自分が適切に指導できなかったと反省する点も多く、次年度以降の課題としたい。

また、学生の性格次第では、失敗により自責の念にかられ、自信を喪失する可能性もありえた。今回は幸いなことに、失敗を前向きに受け入れることができるメンタルの強さを学生が備えていたため、過度な助力はせず結果を見守ったが、そうでない学生の場合はどうすべきか、この点も検討していきたい。

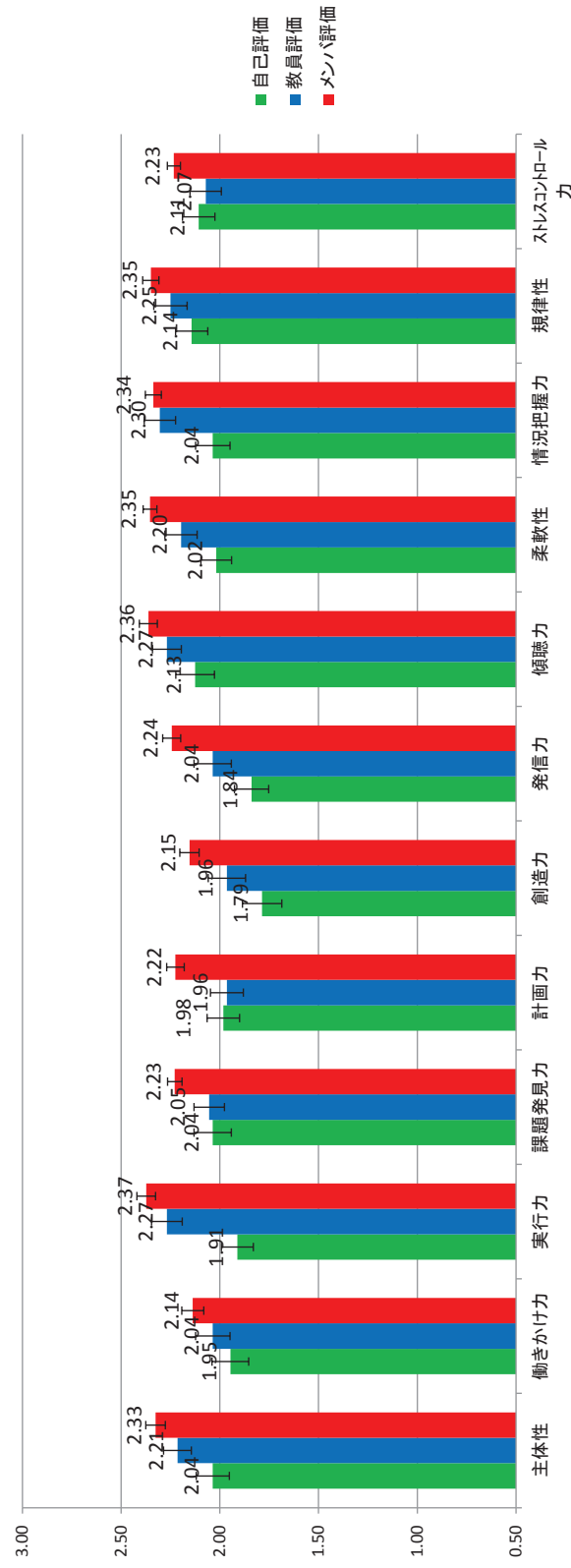
3

社会人基礎力評価

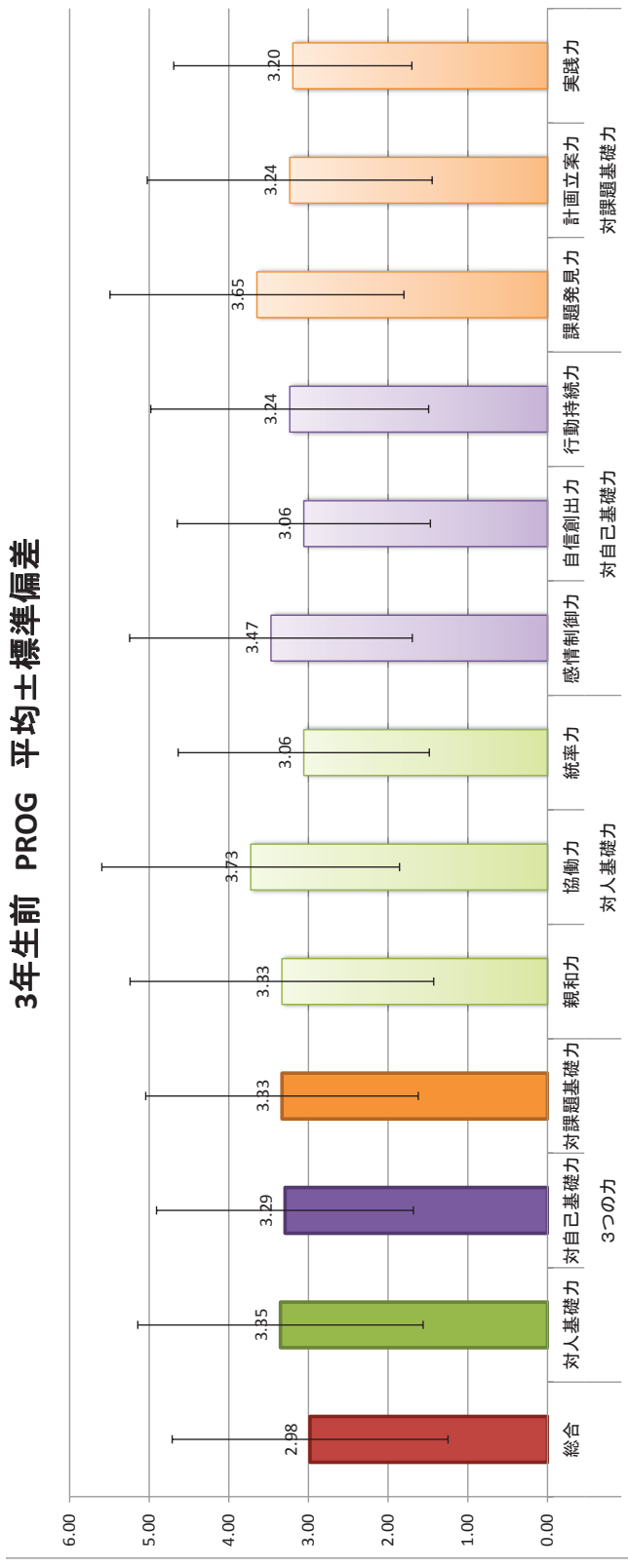
2013年度 社会人基礎力(中間) 平均±標準誤差



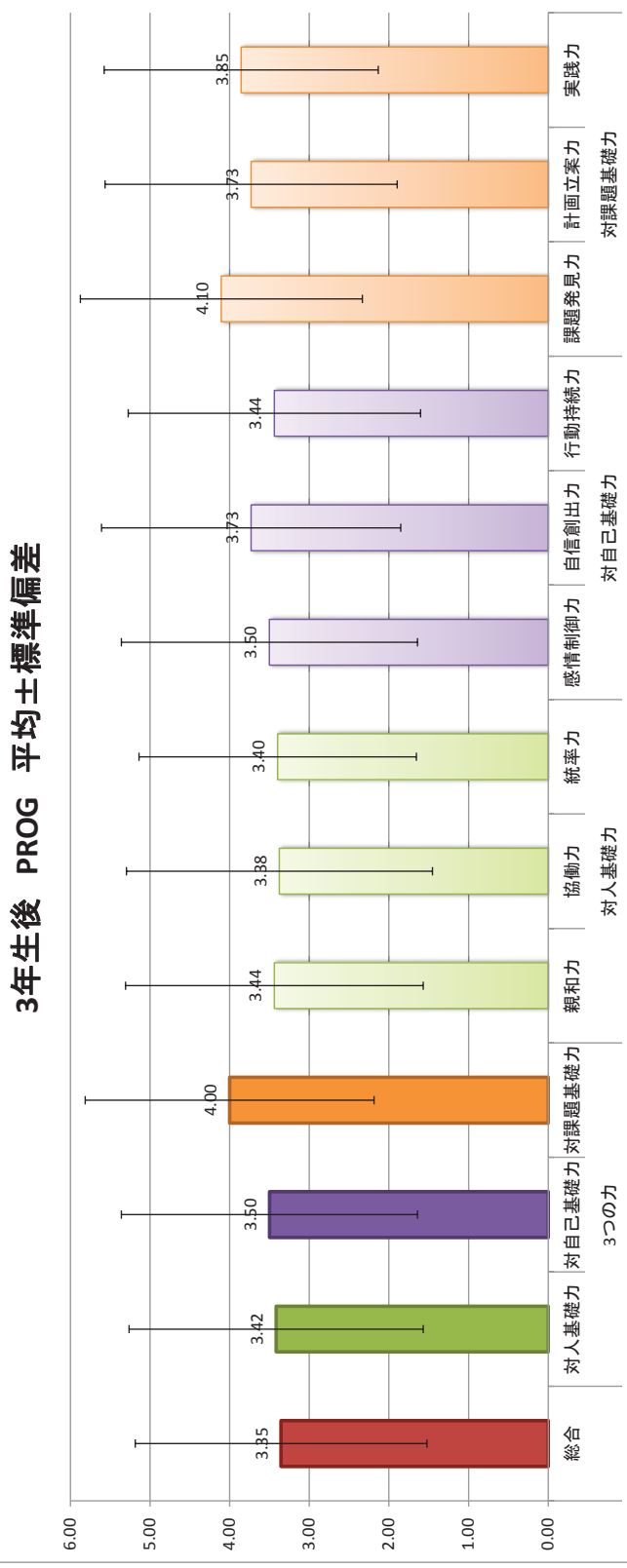
2013年度 社会人基礎力(期末) 平均±標準誤差



3年生前 PROG 平均土標準偏差



3年生後 PROG 平均土標準偏差



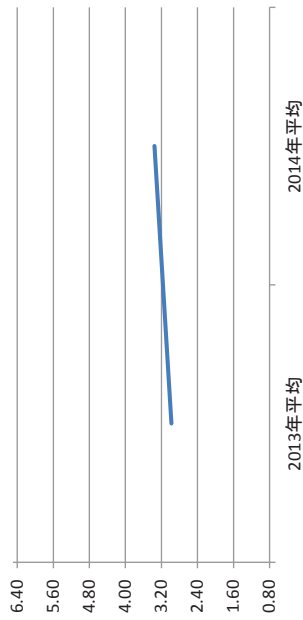
PROG	総合	對自己基礎	対課題基礎	対人基礎力	對自己基礎力			対課題基礎力			対人基礎力		
					感情 力制御	自信 力創出	行動 力持続	課題 力発見	計画 力立案	実践 力	親和 力	協働 力	統率 力
2013年平均	2.98	3.29	3.33	3.35	3.47	3.06	3.24	3.65	3.24	3.20	3.33	3.73	3.06
2014年平均	3.35	3.50	4.00	3.42	3.50	3.73	3.44	4.10	3.73	3.85	3.44	3.38	3.40
変化率	13%	6%	20%	2%	1%	22%	6%	13%	15%	21%	3%	-9%	11%

自己評価	総合(平均)	前に踏み出す力(平均)	考え抜く力(平均)	チームで働く力(平均)	考え抜く力					チームで働く力					
					主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性
中間	1.77	1.69	1.73	1.84	1.73	1.70	1.64	1.82	1.63	1.73	1.68	1.96	1.77	1.86	1.91
期末	2.00	1.96	1.93	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04	2.04
変化率	13%	16%	12%	11%	18%	20%	24%	12%	25%	18%	21%	4%	15%	10%	7%

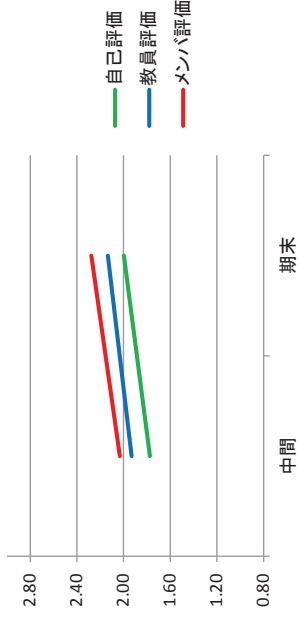
教員評価	総合(平均)	前に踏み出す力(平均)	考え抜く力(平均)	チームで働く力(平均)	考え抜く力					チームで働く力					
					主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性
中間	1.93	1.90	1.76	2.03	1.91	1.82	1.96	1.84	1.70	1.75	1.91	2.20	2.07	2.00	1.98
期末	2.14	2.17	1.99	2.19	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21	2.21
変化率	11%	14%	13%	8%	16%	22%	13%	20%	31%	27%	16%	1%	7%	11%	12%

メンバ評価	総合(平均)	前に踏み出す力(平均)	考え抜く力(平均)	チームで働く力(平均)	考え抜く力					チームで働く力					
					主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性
中間	2.03	2.02	1.95	2.08	2.03	2.02	2.02	2.00	1.93	1.92	2.05	2.24	2.00	2.03	2.13
期末	2.28	2.28	2.20	2.31	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33	2.33
増加率	12%	13%	13%	11%	15%	15%	15%	16%	20%	21%	13%	4%	16%	14%	9%

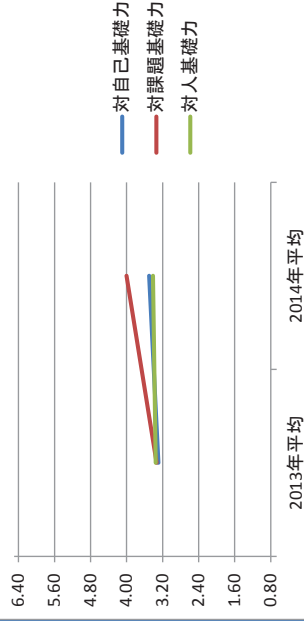
総合(PROG)



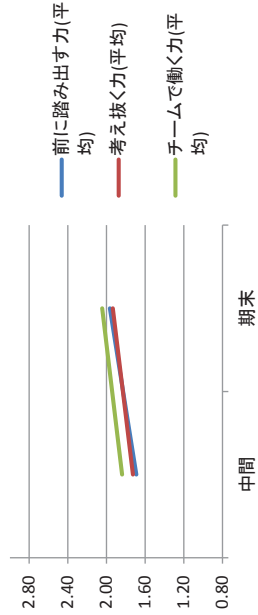
総合(社会人基礎力)



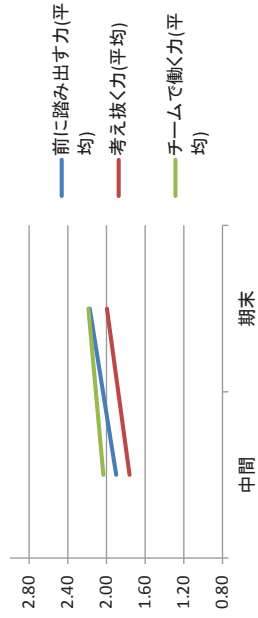
3つの力(PROG)



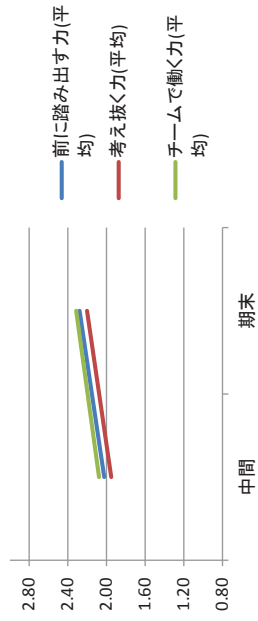
3つの力(社会人基礎力) 自己評価



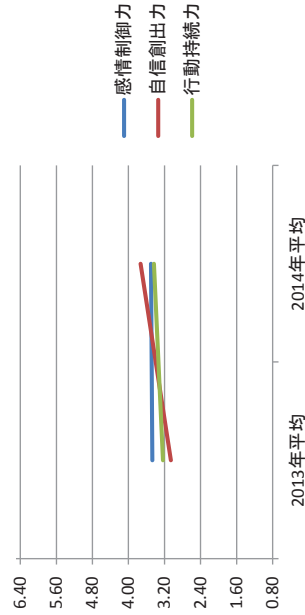
3つの力(社会人基礎力) 教員評価



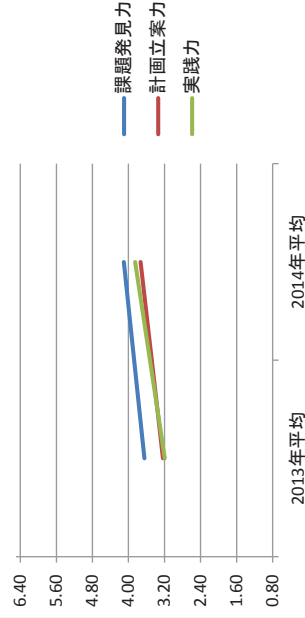
3つの力(社会人基礎力) メンバ評価



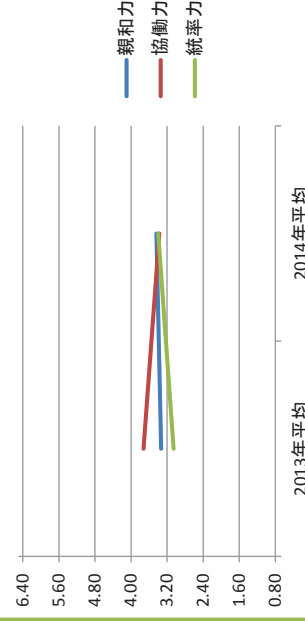
対自己基礎力(PROG)

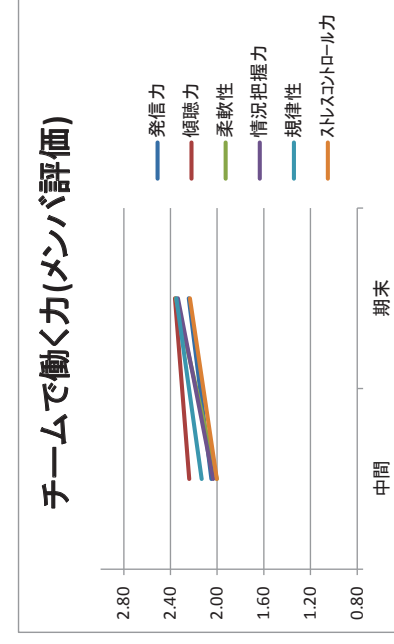
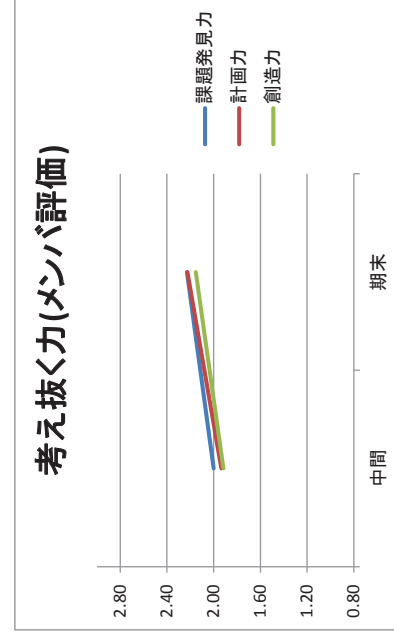
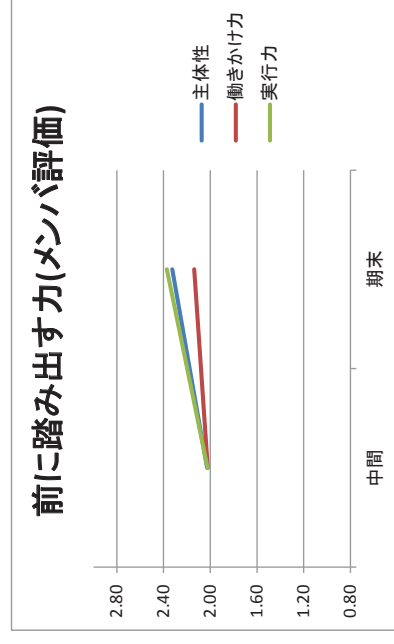
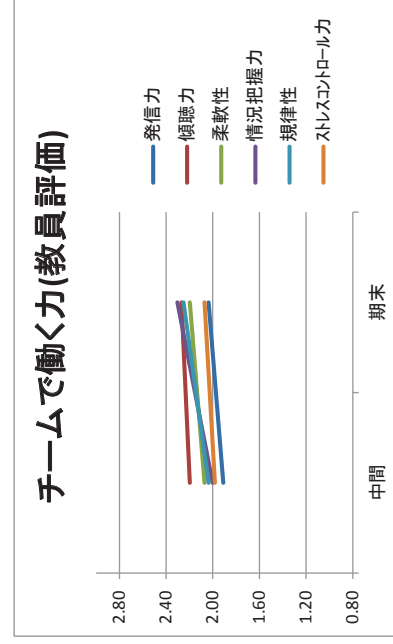
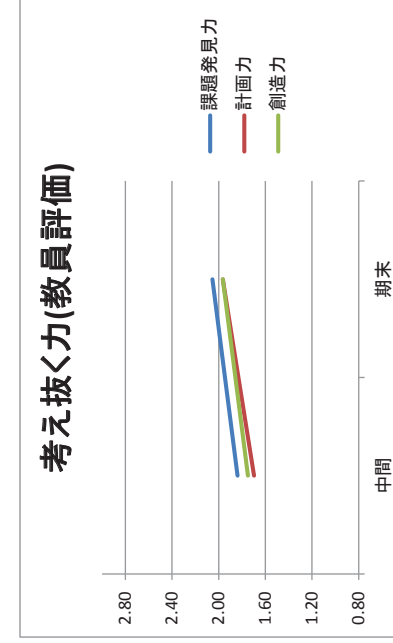
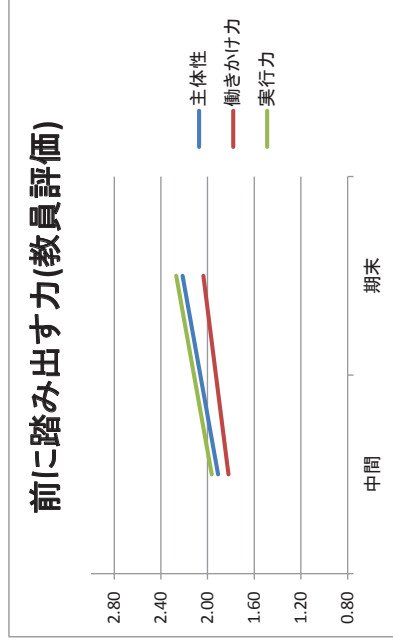
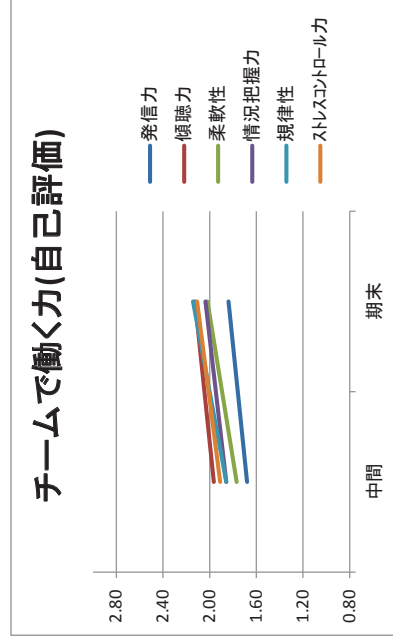
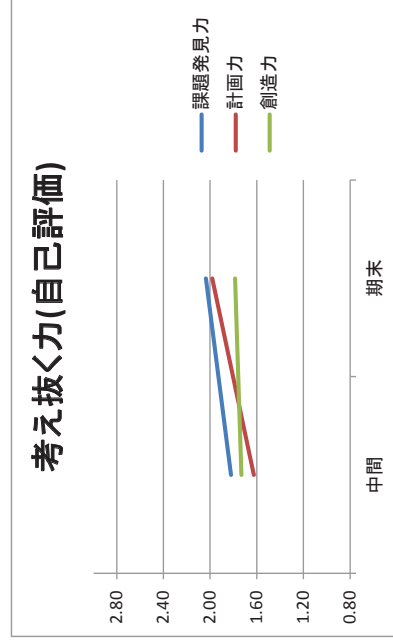
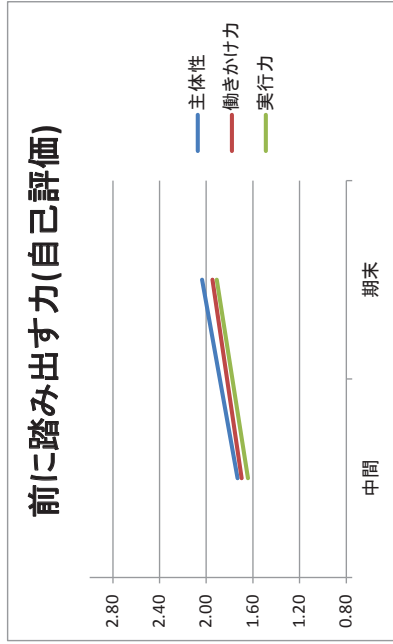


対課題基礎力(PROG)

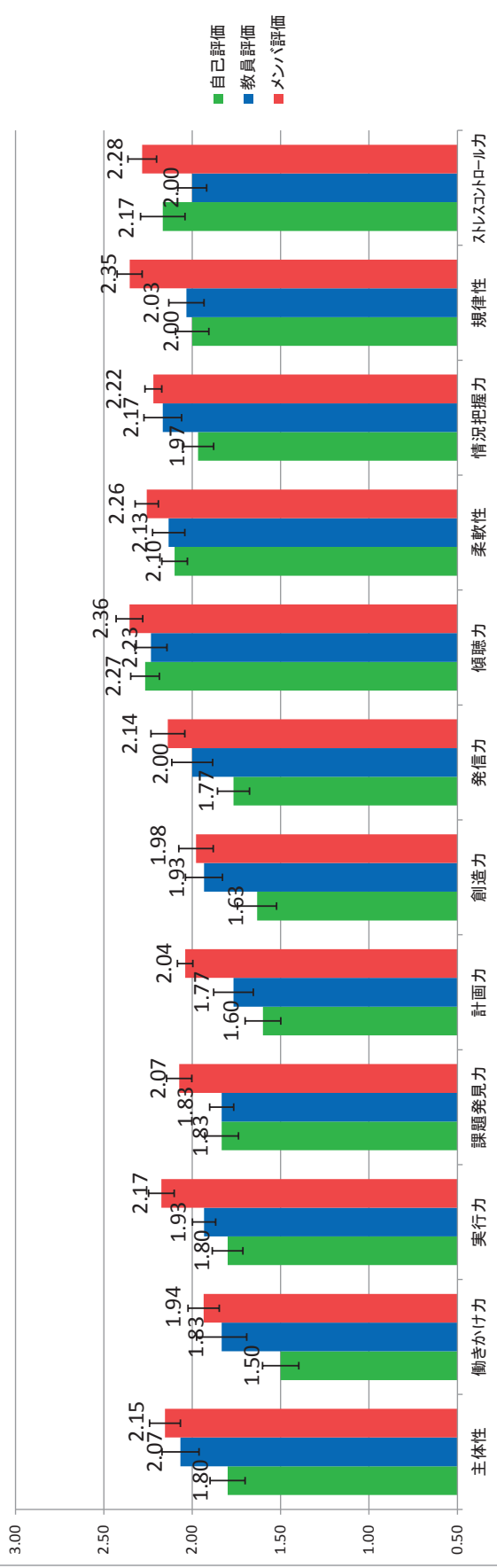


対人基礎力(PROG)

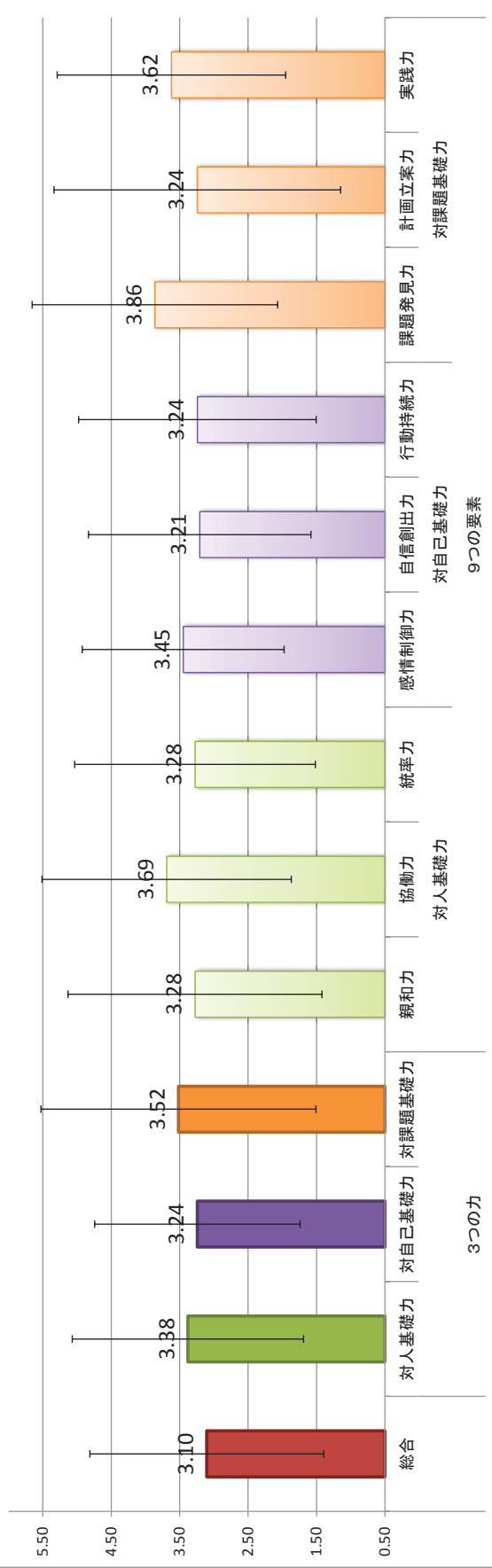




2014年度 社会人レベル評価(中間) <自己・教員・メンバによる比較(平均±標準誤差) 全員>



2014年2月実施 PROG(平均±標準偏差)



4

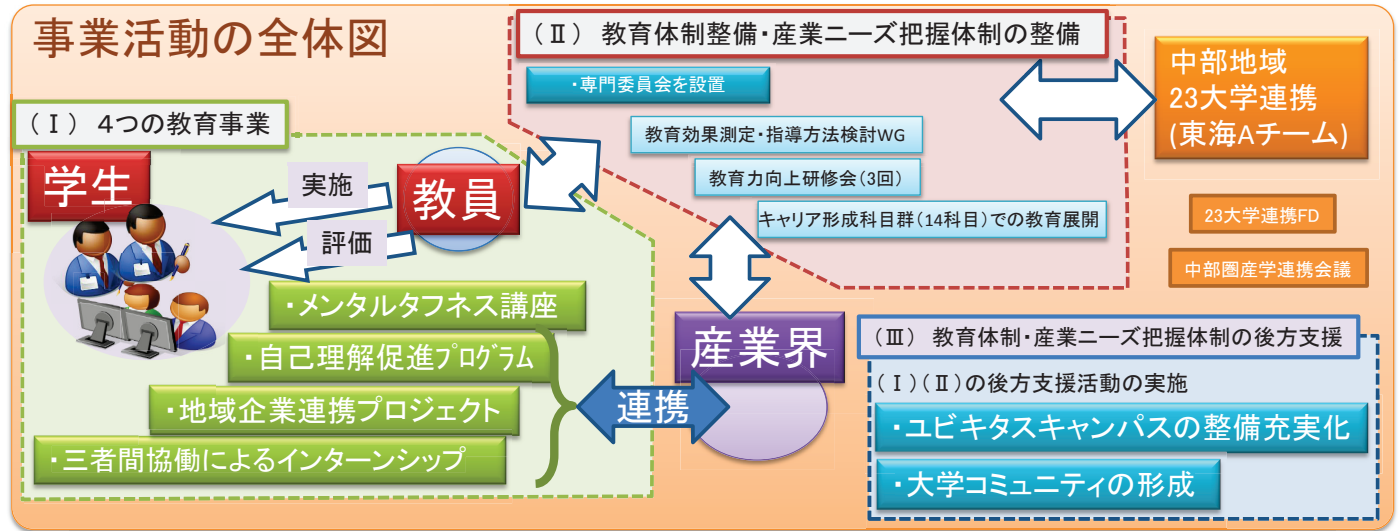
2015年度中部圏産学連携会議 ポスター発表資料

豊橋創造大学 事業成果

地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会

産業界ニーズに対応した
教育改善・充実体制整備事業
(中部圏23大学連携事業)

『中部圏の地域・産業界との連携を通じた
教育改革力の強化』
・アクティブラーニングを活用した教育力の強化
・地域・産業界との連携力の強化



(I) 4つの教育事業の成果

◆メンタルタフネス講座(全3回実施)



概要/目的	メンタル面の強化を目的とした講座の実施
実施内容/方法	座学とグループワークを通じた理論の学習と体験
成果	社会人基礎力(前に踏み出す力、チームで働く力)の育成に寄与(アンケート結果より)

◆自己理解促進プログラム



概要/目的	企業側のニーズの理解、自己の就業観の形成と自己理解促進
実施内容/方法	バーチャル人事体験(採用面接官の疑似体験)
産業界連携	企業・組織で人事体験担当経験のある卒業生の協力
成果	自己理解の促進、社会人基礎力(前に踏み出す力)に一定の成果が認められた(アンケート結果より)

◆地域企業連携プロジェクト

概要/目的	PBL(Project Based Learning)を通じた問題解決能力・社会人基礎力の養成
実施内容/方法	地域企業・組織と連携した課題解決型学習の実践
産業界連携	地域企業、市役所、小・中・高等学校、NPO法人等
成果	社会人基礎力の醸成に寄与(社会人基礎力評価シートより)

◆三者間協働によるインターンシップ



概要/目的	学生、連携大学、地元企業の三者間によるインターンシップの高度化
実施内容/方法	連携大学間の情報の交換・共有を基に既存プログラムの改善・充実化
産業界連携	地域企業、市役所等
成果	産業界ニーズの把握(インターンシップ座談会より)

(II) 教育体制整備・産業界ニーズ把握体制の整備の成果

◆社会人基礎力育成体制の整備

キャリア形成科目等14科目で展開するために、該当科目における学修計画を立案し内容の充実を図った	教育効果測定・指導方法WGで育成すべき資質の行動規範を定め、評価方法の検討・改善を図った ⇒教育力向上研修会などを通して、専任教員へフィードバックし、改善内容の共有化を図った
<14科目の例> ・職業研究 ・キャリア形成 など	
教育力向上研修会を実施し、学生指導方法についての学習の方法を深化させた	就業体験講座、経営ビジネス講座を開催し、学生が社会(企業)と接する機会を創出し経営の学びについて理解を深化させた
<テーマ例> より良いPBL(Project Based Learning)指導を目指して	

◆他大学との連携事業による教育方法の改善

本学ならびに他大学との実施状況確認等のためにミーティングに参加し相互理解を図った。東海Aチームの連携FD活動として合宿研修会に参加し情報の共有化が図られた。

(III) 教育体制・産業界ニーズ把握体制の後方支援の成果

◆ユビキタスキャンパスの整備・充実化

- 学内ICT環境の充実(無線LAN環境の整備)を図った
- 携帯情報端末の配布・利用支援ならびに、eラーニングシステムの導入・利用推進による教育体制を充実させた
- 「4つの教育事業」推進を支援するシステムの開発をし運用がなされた
ー各評価結果を蓄積・参照できる総合学修ポートフォリオシステムの開発ー
- 事業内容・成果の共有化および広報を目的としたWebサイトの構築を図った

◆大学コミュニティの形成による学生支援

- 卒業生業界別交流会を実施し、卒業生との意思疎通が図られた

sozo 豊橋創造大学

●情報ビジネス学部・キャリアデザイン学科 ●経営学部・経営学科
〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下20-1 地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会
Web: <http://project.sozo.ac.jp/portal/> E-mail: gp4@ml.sozo.ac.jp

地域産業界連携教育力改革プロジェクト —プロジェクト活動を通じた社会人基礎力の育成—

3年間の地域産業連携プロジェクト テーマ一覧



豊橋エコタウンプロジェクト
～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～
協力: 豊橋教育委員会教育政策課, 豊橋市内各小中学校



高校・介護施設向けのiPad活用および業務システムの改善
協力: (有)ナーシングホーム風の里, 愛知県立小坂井高等学校



のんほいパーク盛り上げ隊!!!
協力: 豊橋総合動植物園(のんほいパーク), 豊橋みどりの協会



SOZO SOCKS STATION
協力: (株)ナイガイ



トヨハン(ハート)ヨシ プロジェクト
協力: 豊橋観光コンベンション協会, 豊橋市(企画部政策企画課・産業部観光振興課), 豊橋鉄道, 穂の国とよはし芸術PLAT, 豊橋生菓子組合事業委員会



豊橋市における外来生物の影響調査
協力: 豊橋市自然史博物館



高校生と学ぶ会計学☆
協力: 藤ノ花女子高等学校, 愛知県立犬山高等学校(商業科)



アオウミガメの保護活動
協力: 豊橋市役所環境部環境保全課



豊橋からオレオレ詐欺をブッ飛ばせ!!
協力: 豊橋信用金庫, 豊橋市役所福祉部長寿介護課, 豊橋市役所豊橋文化市民部安全生活課

- ◆「外食産業におけるロジスティクス・システムの研究」
—(株)物語コーポレーションを事例に—
- ◆福祉施設の現状と紙芝居ボランティア
- ◆ビジネス系学生のための情報処理資格に向けた電子コンテンツの改善活動
- ◆会計事務所の事務内容と組織の仕組みを知る
- ◆社会人企業の実証研究
- ◆豊橋筆プロジェクト
- ◆豊橋トップインタビュープロジェクト
- ◆学食広報プロジェクト by学食おうえん団
- ◆東三河における繊維産業
- ◆炎の祭典支援プロジェクト

- ◆東三河 Bible
- ◆認定試験に受かるための学習環境と運営
- ◆豊橋コンテナターミナルの発展可能性に関する調査研究
- ◆ヨシノパプロジェクト
- ◆SOZOショップ企画・開店
- ◆医療情報の学習環境構築と運営
- ◆田原のウインドファーム
～社会的企業の実証研究～
- ◆豊橋トップインタビュープロジェクト2012
- ◆豊橋献血促進プロジェクト
- ◆PB競争時代における地域スーパーの生き残り戦略
- ◆打倒オカザえもん! 頑張れトヨッキー!!

5

大学教育改革フォーラム

in東海2015

発表資料

社会人基礎力養成に係わる教育効果の主観的・客観的評価事例

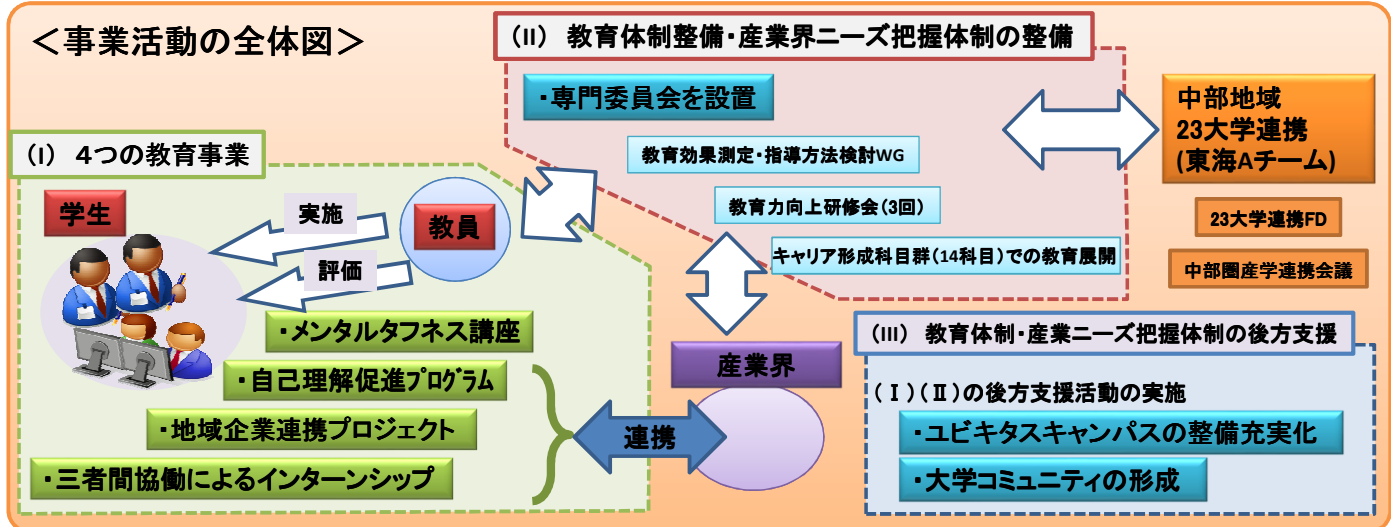
豊橋創造大学 経営学部経営学科

<概要>

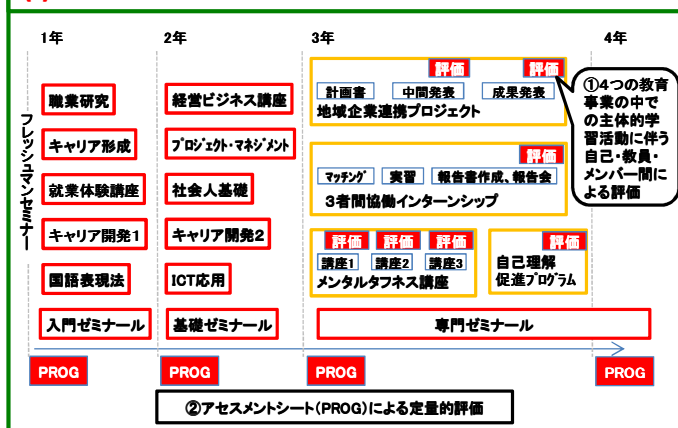
本学では産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業で取り組む4つの教育事業、ならびにキャリア形成科目群を通して社会人基礎力の養成に努めている。その教育効果を、学年進行に沿ってアセスメントシート(PROG)により客観的に評価するとともに、社会人基礎力評価シートを用いて主観的な評価(自己・他己評価)を行っている。

評価データが比較的整備されたH25年度3年次学生について結果を見ると、3年次春と4年次春のPROGの結果では総合値の平均が0.37ポイント上昇した。特に、対課題基礎力(実践力、計画立案力)や對自己基礎力(自信総出力)の項目で高い上昇率が確認された。また、社会人基礎力評価シートによる測定結果でも、年度中間と期末の結果を比較すると、自己評価の総合値の平均が0.23ポイント上昇した。特に、計画力や実行力、働きかけ力で高い上昇率が確認された。教員評価およびメンバー評価でも同様の傾向がみられた。

<事業活動の全体図>



(I) 社会人基礎力の評価のタイミング



(II) アセスメントシート(PROG)による評価結果

	総合	対自己基礎力			対課題基礎力			対人基礎力					
		感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力	緩和力	協働力	統率力			
3年春(2013年)	2.98	3.29	3.33	3.35	3.47	3.06	3.24	3.65	3.24	3.20	3.33	3.73	3.08
4年春(2014年)	3.35	3.50	4.00	3.42	3.50	3.73	3.44	4.10	3.73	3.85	3.44	3.38	3.40
変化率	13%	6%	20%	2%	1%	22%	6%	13%	15%	21%	3%	-9%	11%

結果) ・ほとんどの力が1年間で向上
・「自信創出力」「計画立案力」「実践力」で高い伸び

(III) 社会人基礎力評価シートによる評価結果

◆評価シート

	12の要素	定義	自己	教員	メンバー
前向きな 力	主体性	物事に進んで取り組む力			
	働きかけ力	他人に働きかけ働き込む力			
	実行力	目的を設定し確実に行動する力			
抜く 力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力			
	計画力	3段階評価(1:できなかった 2:何とかできた 3:できた) 主体性の判断例) ・自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる ・自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる ・自分なりに判断し、他者に流されず行動できる			
チームで 働く力	規律性	社会のルールや人との約束を守る力			
	ストレスコントロール	ストレスの発生源に対応する力			

◆評価結果

	総合(平均)	前に積み出す力(平均)	考え抜く力(平均)	チームで働く力(平均)	前に積み出す力			考え抜く力			チームで働く力						
					主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	コンストロイスル	
教員評価	中間	1.93	1.80	1.78	2.03	1.91	1.82	1.88	1.84	1.70	1.75	1.91	2.20	2.07	2.00	2.04	1.98
	期末	2.14	2.17	1.99	2.19	2.21	2.04	2.27	2.05	1.96	1.96	2.04	2.27	2.20	2.30	2.25	2.07
変化率	11%	14%	13%	8%	16%	12%	15%	12%	16%	12%	7%	3%	6%	15%	11%	5%	
自己評価	中間	1.77	1.69	1.73	1.84	1.73	1.70	1.64	1.82	1.63	1.73	1.68	1.98	1.77	1.88	1.88	1.91
	期末	2.00	1.98	1.83	2.04	2.04	1.95	1.91	2.04	1.98	1.79	1.84	2.13	2.02	2.04	2.14	2.11
変化率	13%	18%	12%	11%	18%	15%	16%	12%	22%	3%	10%	8%	14%	10%	15%	10%	
メンバー評価	中間	2.03	2.02	1.95	2.08	2.03	2.02	2.02	2.00	1.93	1.92	2.05	2.24	2.00	2.03	2.13	2.00
	期末	2.28	2.28	2.20	2.31	2.33	2.14	2.37	2.23	2.22	2.15	2.24	2.38	2.35	2.34	2.35	2.23
変化率	12%	13%	13%	11%	15%	6%	17%	11%	15%	12%	9%	5%	18%	15%	10%	11%	

結果) ・全体的には、どの力も中間から期末にかけて向上
・3者の評価で、「主体性」「実行力」「計画力」が向上率の上位

6

プロジェクト活動 連携企業・団体一覧

愛知県立小坂井高等学校

クオークネット

スクエア

豊橋市教育委員会

豊橋市環境部環境保全課

豊橋市企画部政策企画課

豊橋市産業部観光振興課

豊橋市自然史博物館

豊橋総合動植物公園

豊橋みどりの協会

(株) ナイガイ

(有) ナーシングホーム気の里

(株) ナツメ

野島保険事務所

(敬称略順不同)

7

各種発行パンフレット

プロジェクト活動

1 高校・介護施設向けの iPad活用および業務システム改善

担当教員 今井 正文
担当教員 藤岡 真由子

豊橋市内の保育所や幼稚園、小中学校、高校などにiPadの活用を促進するために、iPadの活用を支援するためのiPad活用ワークショップを開催しました。ワークショップでは、iPadの活用に関する基礎知識や、業務システムの改善方法について、実証実験を行いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。



学生は、プロジェクトを通じて、iPadの活用方法を学び、各自の性格や興味に基づいて、自分なりの活用方法を模索し、実践を行いました。また、各自、自分なりの課題や悩みを話し合い、互いにサポートし、成長を遂げました。

2 コミュニケーション能力とは何か ～学生視点と社会人視点の相違～

担当教員 藤岡 真由子
担当教員 藤岡 真由子

一般社団法人日本経済団体連合会のアンケート結果(2014年)によると、企業では「コミュニケーション能力」が最も重視されています。一方で、学生からは「コミュニケーション能力」とは何か、具体的に何を指しているのか、という点に疑問を抱いています。本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

3 SOZO Socks Station 開店・運営

担当教員 川岸 和美
担当教員 アイザック(学生)

2014年4月に開店した「SOZO Socks Station」は、現在も盛況です。学生たちは、商品の企画・開発・販売の過程を通じて、マーケティングやデザインなどについて学びました。また、顧客とのコミュニケーションを通じて、サービスの向上に努めています。今後も、新たな商品を開発し、お客様に満足いただけるよう努めます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

4 豊橋エコマラジエーション ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～

担当教員 藤岡 真由子
担当教員 藤岡 真由子

近年の太陽光発電システムの普及に伴い、太陽光発電システムの設置や運用に関する知識やスキルが求められています。本プロジェクトでは、豊橋市内の小中学校に設置された太陽光発電システムの現状を調査し、その活用状況や課題について調べました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

5 打倒オカサエもんかんぱりヨッキー!

担当教員 田中 真由子
担当教員 藤岡 真由子

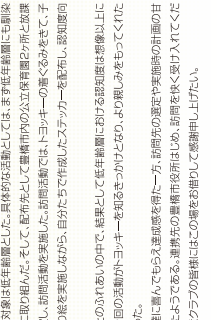
本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

6 アカワミガメの保護活動

担当教員 中野 啓
担当教員 藤岡 真由子

アカワミガメの保護活動を行うため、市民からボランティアを募集しました。参加者には、アカワミガメの生態や保護の方法について説明し、現場での観察を行いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。



本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

7 のんほいパーク盛り上げ隊!!!

担当教員 三橋 多恵子(学生)
担当教員 藤岡 真由子

のんほいパークの盛り上げ活動を行うため、市民からボランティアを募集しました。参加者には、のんほいパークの歴史や魅力について説明し、現場での清掃を行いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

8 豊橋市における 外来生物影響調査プロジェクト

担当教員 田中 真由子
担当教員 藤岡 真由子

外来生物の影響を調査するために、市民からボランティアを募集しました。参加者には、外来生物の種類や被害の状況について説明し、現場での調査を行いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。



9 豊橋市における 外来生物影響調査プロジェクト

担当教員 田中 真由子
担当教員 藤岡 真由子

外来生物の影響を調査するために、市民からボランティアを募集しました。参加者には、外来生物の種類や被害の状況について説明し、現場での調査を行いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。



10 豊橋市における 外来生物影響調査プロジェクト

担当教員 田中 真由子
担当教員 藤岡 真由子

外来生物の影響を調査するために、市民からボランティアを募集しました。参加者には、外来生物の種類や被害の状況について説明し、現場での調査を行いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

本プロジェクトでは、学生と社会人の両方の視点から「コミュニケーション能力」について掘り下げ、その重要性や求められるスキルについて話し合いました。また、現場での活用事例を共有し、今後の活動について話し合いました。ワークショップは、好評で、今後も積極的に開催していきます。

8

行事实績一覽

【学部】平成26年度 地域産業界連携教育力改革プロジェクト 行事計画一覧

	①メンタルタフネス講座	②自己理解促進プログラム	③地域産業界連携プロジェクト	④三者協働によるインターンシップ	⑤連携推進	⑥ユビキタスキャンパス	⑦大学コミュニティ	テーマB インターンシップ
通年			・プロジェクト管理システムの運用			・学内IT環境の維持・管理・監視 (状況に応じて改善活動) ・ポータルサイトの運営・改善 ・Sozo Platz追加開発と運用 ・eラーニングシステムの活用推進策の検討 ・プロジェクト管理システム開発支援 ・Sozo Passport開発支援		
4月	・メンタルタフネス講座の結果測定・評価 ・ベシック講座の結果測定・評価 (～5月)	3(木)～14(月) PROG実施 (対象:1年生) 3(木)～14(月) PROG実施 (対象:新4年生欠席者対応) ・スチューデントプロフィールシステム開発支援(4月～8月)	・プロジェクトメンバーの決定			8(火)5限 プロジェクト管理システム利用説明会 10(木)6限 " 11(金)6限 " (対象:編入・転入生) ・プロジェクト管理システムの情報更新 ・各種システムのユーザーアカウント作成	・前年度卒業生就業状況調査の集計・分析 (～5月)	
5月	・セルフモチベーション講座の企画 24(土) セルフモチベーション講座		1(木)4限 キックオフ講演会 30(金) プロジェクトテーマの決定 プロジェクト計画書の作成 ・プロジェクト計画の策定 (目的・協働企業選定・確定)	水曜日 科目担当教員による事前指導 (各週) (インターンシップの事例紹介、 グループワーク)	17(土)10:00～ 第1回 東海A(教育力チーム)会議 参加 17(土)13:00～ ワークショップ「産学アクティブラーニングの発展に向けて」 (主催:中部地域大学教育改革推進委員会【第1回連携FD】 参加)	・携帯情報端末の配布準備		
6月	・セルフモチベーション講座の結果測定・評価 (～7月)			水曜日 キャリアセンター事前指導 (各週) (実習先マッチング) (自己紹介書作成指導)		11(水) 携帯情報端末の配布と利用説明会 (対象:1年生)	・卒業生就職企業訪問(求人開拓等) (～3月)	
7月	31(木) ビジネス研究講座			水曜日 科目担当教員による事前指導 (各週) (自己紹介書の校閲指導、 グループワーク)		27(金) 平成26年度インターンシップ等実務者研修会(大阪地区)		5(土)10:00～ 第1回東海ブロック会議 参加 31(木)18:00～ 第1回車座
8月	・ビジネス研究講座の結果測定・評価		1(金) 中間発表会 ・パワーポイントによる発表 ・配布資料(A4用紙1枚2段組)の作成	※2参照 実習(1～2週間) 実習先訪問 (キャリアセンター) (就職委員会教職員) (専門ゼミナール担当教員)	6(水) 第1回教育力向上研修会 実施 7(木) 第1回就業体験講座 実施 28(木)～29(金) 東海A(教育力)チーム 連携FD合宿研修 参加			
9月	・就職ガイダンス (～2月)	・就職ガイダンス (～2月)	・プロジェクトの推進 (～12月)	※3参照 報告会資料の作成指導・発表練習 (科目担当・専門ゼミナール担当教員)	3(水)～5(金) 平成26年度 教育改革ICT戦略大会(主催:公益社団法人私 立大学情報教育協会) 参加 8(月) 第2回就業体験講座 参加 24(水) 第3回産業界ニーズ事業特別セミナー(中部大学) 参加 ・キャリア形成の科目展開 (～12月) ・経営ビジネス講座の開催 (～12月)			
10月			3(金) 社会人基礎力評価シートによる評価 (教員面談・助言と自己行動計画作成) (社会人基礎力評価シートを基に実施)	20(月) インターンシップ報告会 インターンシップ座談会 ※4参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (学内校閲後、企業担当者校閲)	20(月) インターンシップに関する 企業担当者との座談会 (※1参照)		25(土) 創造祭卒業生就業状況調査 26(日) " 27(月) 学内企業説明会(OBIによる説明の実施)	
11月				※4参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (学内校閲後、企業担当者校閲)	15(土) 平成26年度 第1回中部圏産学連携会議(主催:中部地域大 学教育改革推進委員会)参加 19(水) 第2回教育力向上研修会 実施			18(木) 第2回車座
12月			18(木) 4～5限 成果発表会 ・パワーポイントによる発表 ・配布資料(A4用紙1枚2段組)の作成 ・ポスター形式 ☆重複授業に関しては要検討 ☆2年生動員に関しては要検討	※4参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (学内校閲後、企業担当者校閲)	18(木) 第2回東海Aチーム(教育力チーム)会議 参加 26(金) 平成26年度達成目標に係る評価報告書提出	携帯情報端末の物品確認 (対象:経営・情ビ3年)	・卒業生就業状況年次調査の実施 (～2月)	
1月			23(金) 社会人基礎力評価シートによる評価 (教員面談・助言と自己行動計画作成) (社会人基礎力評価シートを基に実施) 29(木) 30(金) 学生座談会 成果報告書(学生)作成 成果報告書(教員)作成	※5参照 報告書作成指導 (科目担当・専門ゼミナール担当教員) (企業校閲後の修正)	23(金) 平成24～26年度活動報告書提出	携帯情報端末の物品確認 (対象:経営1年・2年)		
2月		21(土) PROG実施(対象:1年生、2年事前、健康診断日に実施) 23(月)～24(火) 模擬面接講座の実施 25(水)～27(金) PROG実施(対象:3年事後)	20(金) プロジェクト活動総括ミーティング (第3回教育力向上研修会) ・次年度計画の策定 プロジェクト実施に関する改良 自己内省支援方法の検討		2(月) 第3回就業体験講座 実施 20(金) 第3回教育力向上研修会 27(金) 本事業の事後評価書提出	携帯情報端末の物品回収 (対象:情ビ4年)	4(水)～25(木) OB・OG業界研究会 (OB・OGによる説明の実施)	3(火) 第3回車座 6(金) 第2回東海ブロック会議
3月	26(木) ベシック講座(2年生)			13(金) 報告書の完成・印刷	7(土) 大学教育改革フォーラムin東海2015(主催:大学教育改革 フォーラムin東海2015実行委員会、名古屋大学高等教育研 究センター) 参加 12(木) 第3回 東海A(教育力チーム)会議 参加			

※1 インターンシップ座談会に際し、参加企業より学生に求める資質等の産業界ニーズをヒアリング
 ※2 8/4～9/12の間で実習先ごとに日程を調整
 ※3 9/9、10および9/15～10/24の各週水曜日
 ※4 10/27～12/19の各週水曜日
 ※5 実習先企業からの校閲原稿の返却状況に応じて、学生ごとに個別に指導

平成 24 年度採択「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
『地域産業界連携教育力改革プロジェクト』成果報告書 平成 26 年度版

平成 27 年 3 月 18 日 発行

編集発行 豊橋創造大学
地域産業界連携教育力改革プロジェクト委員会
(渉外部キャリアセンター内)

〒440-8511 愛知県豊橋市牛川町松下 20-1

TEL 050-2017-2104

FAX 050-2017-2112

<http://www.sozo.ac.jp/>

